

○敬つて申し奉る、されば畜類つばさ迄、親子の別れ悲めば、況んや人の親として、なげくことこそ道理なれ、八百屋お七の親達は、今日ぞきはまる最後日と、聞くにかなしく氣心も、せきくる涙もろともに、最後所へ駈け來り、其のまゝお七にすがりつき、泣くより外のことぞなき、母は涙のひまよりも、さほど吉三に添ひたくば、我にひそかに知らせなば、是非とも和尙に申し上げ、行末長く添はせうにかゝる大事をし出して、親にうきめを見すること、子にてはあらでかたきかや、花の娘をさきに立て、あとに残りて何かせん、共に消えんとなげかる。お七涙にくれながら、父上様や母さまの、なげき給ふも道理なり、しのえん無量ぞ何事も、定まる事と思召し、思ひあきらめ給ふべし。雪折竹にあらねども、世はさかさまのことながら、跡弔うてたまはれと、末の詞はなき涙、かゝるあはれの其中へ、寺の吉三はかけ來り人目も恥もすがりつき、只さめざめとなげきける、お七涙もろともに、扱も床しの吉三様、命は秋の鹿とかや、子はあらねどもつまゆゑ

さは玉子に目鼻、同じ町内ますやといふの、二番娘のおでんといふは、年は二八で今咲く花よ、器量申せば平左にまさる、色の白さは初雪まさり、頃は六月祇園の祭、平左おでんが一度に參る、平左姿をおでんが見染め、一目見るより早戀となる、二目見るより思ひとなりて、文や玉章夜に日に送る、送りつめたよ三十二本、それに返事が只一度ない、聞けば平左はお江戸の御番、我も人もと躰なさる、わしも少しの躰したい、五尺手拭中染分けて、それに平左の定紋入れて、はやる所で上帯となされ、はやらぬ所ぢや汗拭きなされ、脚絆甲掛引迄へこれをあなたに躰とする、そこで平左がいられるやうにや、花のお江戸に赴くからは、狭い津和野にや思ひはおかぬ、いうて躰さしもどされた、そこでおでんが腹立て顔で、下にさがりし鍛冶屋に寄りて、なんと鍛冶さん御無心ござるほうしない釘二十一打ちて、そこで鍛冶さんいはれしやうは、親の代から鍛冶屋はするが、ほうしない釘やのろひの釘で、ほうしない釘やこれには打たぬ、そこでおでんがいはれ

に、命を捨つる習ひあり、最後のお目にかゝること、よにも嬉しく思ふなり、今が此世の別れぢやに、こゝへござんせ我つまと、吉三が兩の手を取りて、此美しきお姿に、何の命を惜むべき、我を不憫とおほすなら、出家になつてなき跡を、とうて給はれ吉三様、此世の縁は薄くとも、長き來世で添ひましょと、互になげきるたりしが、時刻移ればそれごとと、親子吉三を引き分けて、お七ひとりに柴を積み、炎さかんに燃え上り、あはれなるかなお七こそ、十六歳を一期とし、つひに煙となりはつる、情のまことこれぞ此、煩惱すなはち即菩提、悟れば近し其まゝに、迷もはれて吉三さん、すぐに出家の身となりて、お七が菩提をとはれけり、とふも語るも一昔、たゞ世の哀これなりと、敬つて申す。(松江市)

平左くどき

○今度新版津和野の城下、城下元なら士ござる、佐々木様よといふ士の、それがむすこの平左といふは、年は十九で角前髪で、器量申せば世にならびなし、色の白

しことは、鍛冶が打たいでどなたが打つか、打ちておくれにやおまへをのろふ、そこで鍛冶屋も吾身がおぞい、打ちて上げます二十一の釘、これを受取繪かきの許へ平左姿の人形かいて、それをお宮の柱に張りて、七日七夜の誓願こめて、胸には八本眼に五本、急所くゝに皆打納め、打ちや納めし二十一の釘、家に歸りて二階に上り、鏡立て置き姿を見れば、角が十六眼が光る、鱗逆立ち大蛇の姿、これぢや津和野にや住居はならぬ、夜も晝もとお江戸に上る、七日七夜にお江戸に着いた、夜のことなら大門打た、裏に廻りて八重垣越えて、平左寐間へとひらりととんで、平左くゝと小聲で起す、平左夢さめ枕を上げて、誰かどなたか迷の者か、迷者なら助けてやるぞ、名乗語れや語らぬ者は、守刀で只一打に、名乗語るは堪へ難けれど、わしは津和野のおでんござる、おまへ見たれば我身がはてた、七日七夜の誓願こめて、おまへ命を打取る程に、七日中にと覺悟をめされ、いうておでんは津和野へ歸る、あとの平左は病氣となりて、七日ぶりにて相果てられ

た、江戸と津和野の御物語。(瀬摩郡)

清三くどき

○花の京都の三條の町の、糸屋與右衛門四代目の酒屋、店も賑か暮しも繁昌 お臺所はなる瀬の如く、店の手代が七十五人、あるが中にも清三というて、年は二十一男の盛り、物もよう書く算盤も、何にかけてもぬからぬ男、ぬけ目ない程思案の外は、その娘におきちとござる、年は十六今咲く花よ、花に譬へて申さうならば、春はつつじか櫻の花か、五月野に咲く蓮華の花か、秋は紅葉か花蘭菊か枝垂小柳腰打ちかけて、梅の薫りを櫻に持たせ、それに劣らぬお吉でござる、それに清三がちよと目をかけて、一夜二夜と通ふがうちに、一生添ふとの起請取りかはし、起請を書いたは親達や知らぬ、人の噂もまだないうちに、親の耳にとそろりとはいり、聞くと親衆は髪逆立て、おきちく〜と一間へ呼んで、お吉驚き親衆の前で、何の御用かと兩手をつけば、われを呼ぶのは餘の儀ぢやないが、店の手代とわけあるそなが、手代風情に目をかけるなら、捨て

とても、言つた詞はかはしはせまい、おきち清三の別れの節は、生木小枝を引き裂く如く、そこで清三我家へ歸る、清三歸ると四五日すると、夜の九つ夜半の頃に、夢を見たく〜清三さんの夢を、清三死んだと夢見た程に、捨てちやおかれぬ行かねばならぬ、そこでおきちがこしらへいたし、清三尋ねて忍んで出やる、おきち旅道すく〜行けば、舟に乗らんかと聲かけられて、舟ぢやあぶないお徒歩で行かう、もしもお怪我がありたる節は、戀し清三さんに逢ふこと出来ぬ、長の旅道すく〜行きやる、やあく〜嬉しや大阪が見える町の外れに子供が一人、菊屋の子かと子供に問へば、菊屋菊屋もだん〜ござる、本家分家で四五軒、ござる、清三屋形はどれかと問へば、橋を渡ると二軒目の茶屋で、紺の暖簾に菊屋と書いて、あれに見えるが清三が屋形、そこでおきちは打ちよるこんで、懐中さがして金二朱一分、これは子供衆菓子買ひなされ、御免なされと手に笠を取る、清三母さん奥から出りやる、若き女中はどちらと問へば、お名を申すは恥かしけれど、

ちやおかれぬ分けねばならぬ、こんな母さんそら嘘である、それは人衆の噂であると、驚を鳥と争ひなされる、驚を鳥と争ふならば、汝ぢやわからぬ清三をよべと、清三く〜と一間へ呼んで、清三驚き旦那の前へ、御用如何と兩手をつけば、そなた呼ぶのも餘の儀ぢやないが、一人娘とわけあるそなが、一人娘を通ひにやさせぬ、暇をやるぞや今日限り、算用なされや一文迄も、そこで清三は途方に暮れて、器量がよい程氣迄がやさし、何をいうても只はいく〜と、涙こぼして算用にかゝる、やうやう算用も相濟みました、店の者にも兩手をついて、縁と時節が又あるならば、頼みますぞや行末迄も、さあさこれから旅ごしらへよ、紺の股引大津の脚絆、帯は當世のはやりし博多、三重にまはしてきちゃん結び、ほんとなたいて脊中へ廻し、さらばく〜とどなたもさらば、七十餘人が一度にさらば、清三今日やおかへるそなが、我等業とは思ふな清三、そこでおきちがちよと知りだいて、裏の小門そろりと明けて、清三お歸り夢程知らぬ、たとひこころで別れた

私は京都の三條が町の糸屋娘のおきちでござる、糸屋様とはあなたのことか、清三お世話に相成りまして、何のお世話もあつたぢやないが、私や清三さんに逢ひとて来たが、どうぞ清三さんに逢はせてたまへ、そこで母さん涙にくれて、清三歸りて四五日すると、旅の疲れが病氣となつて、醫者に醫者かけ介抱すれど、是非に叶はず相果てました、そこでおきちが申されよには、嘘だ〜と争ひなされる、そこで母さん申され様には、嘘と思は、佛壇見やれ、白木位牌に清三と書いて、そこでおきちは涙にくれて、左片手に水桶提けて、右の片手に香花を提けて、どうか母さん案内頼む、向に見えます新し墓が、あれが清三が墓所でござる、急ぎ急いで墓所へまるる、西に向いては兩手を合せ、東向いては南無阿彌陀佛、清三く〜と二聲三聲、墓の石塔が二つに割れて、五尺下から白装束で、そこで泣くのはおきちぢやないか、様が變りて恥かしござる、たとひ約束したればとても、様が變れば分れにやならぬ國へ歸りてよき夫持ちやれ、そこでお吉が申され様に

は、堅い約束してゐるからは、死出のお山も三途が川も、お手を引きよて渡らにやならぬ、すぐに懐劍逆手に持つて、左横脇すかりと立てて、そこでおきちも南無阿彌陀佛。(能義郡)

(此口説は島根縣下に弘く行はれてゐる。簸川郡地方には文句に異同があつて、おきちの旅ごしらへのあたりは、「下へ白無垢あひには綸子、上に着たのが總紅鹿の子、帯は當世の黒繻子の帯、三重にまはして吉彌と結び、髪は島田でごしんと結ひて、銀の簪ちらりとさいて、白い甲掛大津の脚絆、足にはいたる紙緒の草鞋、手には杖持ちつま折り笠で」とある。)

皆 一

○皆一様におならびなされて、をどり手ぶりを御目にかけうー。インサ〜。

○こなたのごもんじ、花のさいたごらんじ。ぜんぜんと見たれば、錢花も咲いたり、黄金の花もさいたり。ヤーラン目出度い八重垣候ぞ。

○こぞより今年は門の松も高いぞ。高いこそ道理ぞ。稻

れ、扇を持ちて舞ふ時に歌はる。

(知夫郡)

こだいす踊

歌の始の囃、サーナーヨーサーナーコーラナーヨーコーラナイ。

○こだいすが山に寺たて、人も参らず戸も明かず。

○こだいすが山に寺たて、聞けばとらけ和尚様。

○こだいすが腰にかご提けて、前の小川へ土繪とり。

○こだいすが青竹割りやる、與一乗せるとて籠組みやる。

(大原郡)

小をどり

○さねもりさまのごりしよはどこか。都となりてごりしよかい。さねもりさまのおくだりならば、いなむしなどもついで行く。いなむしなどをおくりとならば、稲の柱もかすしれず。稲の柱に敷ないなれば、米子の町にくらをたちよ。

○上から舟が三ぞう下る。さきなる舟は絲屋が娘、絲足袋ゆはいて、絲よる手元がおもしろはないか、旅の殿。中なる舟は絹屋がむすめ、絹たびゆはいて、きぬおる

もさかえ候ぞ。

○須彌山の山の小猿が、空の星を取らんとて、手を差し

のほす。

○若狭へ上れば津山が見ゆる。さん心得でかせをば取りやれ。

○しよじの國のごがく院の御寺は、東向の寺なれど、福の参るは數知れず。

○こなたへ参りて、御庭かゝりを眺むれば、梅、桃、唐桃、すも、やうな實はととも、青葉の櫻、さしても川の御殿櫻、八重の櫻の八重櫻、うづき、けんす皆悉く植ゑ揃へ、今盛りと内による。

○此方へ参りしよもと泉水ながむれば、椎と栗、柿と梨はしまめと、はんさ〜、播磨を廻りてござしやれ。

○岩の間から出る水なれど、忍ぶになれば面白い。

○大國領に黒ない扇を守に持ちて、諸國の福をまねかる

最後の歌は舊八月十五日、一宮神社にて、太鼓の拍子につ

手元が面白はないか、旅の殿。あとなる舟は綾屋がむすめ、綾たびゆはいて、綾織る手元がおもしろはないか、旅の殿。

○宮島様にまゐりて見れば、あらうつくしの宮島よ。あの宮島へまゐりて見れば、三國一の宮島よ。宮島沖の白濱ごろじ、こんよとなくは鹿の聲。おかけんさまの氏子をごろじ、つばくろ色にかねつけて。おかけんさまのおともぶねをごろじ、新造が三艘よりそうて、百八さがる燈籠の火。ヤレ。あややら鋪を大手にまいて中には樂をなされ候。

○なはての小草、見る人ごてが刈りたがる。

○十七八が浅川わたる。わたさばわたせ、今負ひわたせ、あの山かけのある内に。

○これのおせどの蓮の池、清水がわいて、泉わく。今こそ、お前のよざかりよ。サー。

○これのおせどの梅の木に、うそがとまりて琴をひく。琴のひびきに花が散る。今こそお前の世ざかりよ。サー。

○これの小庭こにほのごよの松、鶴が巢をかけ、ごしよづるが、あそぶ所がおもしろや。今こそお前のよざかりよ。サ

○秋鹿が谷の細道ゆきつめて あそぶ所がおもしろや。

扇に尺八とりそへて、さすはたださかひこのわかい衆。

○庭雀竹の小枝をゆきつめて、あそぶ所がおもしろや。

扇に尺八とりそへて、さすはたださかひこのわかい衆。

○雞にわとりがお前のこにはをゆきつめて、遊ぶ所が面白や。

扇に尺八とりそへて、さすはたださかひこのわかい衆。

○大阪木綿おほさかに塵はつかぬ。エー。おもひなかく、ちき

りにおさぐさ。しんごうしのはやさ、てうし調子のよさよ

さ、しんとろとろとくだまいて、さてのうきよや。

○大阪ひどんすにちりはつかぬ。エー。おもひなかく、

ちきりにおさぐさ、しんごうしのはやさ、てうし調子のよ

さよさ。しんとろとろとくだまいて、さてのうきよ

や。

○大阪あや織りに塵はつかぬ。エー。おもひなかく、

ちきりにおさぐさ、しんごうしのはやさ、てうし調子のよ

さよさ。しんとろとろとくだまいて、さてのうきよ

や。

きもせん。つるべの水で茶をたてさせて、のまばや伊

勢のそめつけの。

○うてノ、やれつづみ、手のやれつづみ、はりあけた者

にどうとらせう。まひとしめて、てのやれつづみ、は

りあけた者どうとらせう。この年よりがをどりをはじ

め。

○當所が花の都なり。當所が花の都となれば、加賀越前

の舟がつく。加賀越前の舟ばかりかや、京鎌倉の舟が

つく。京鎌倉の舟をばつれて、お前の庭に漕こぎきたり、

お前の庭にこぎ来る舟は、あれこそこれの寶船。

(以上大踊)

備考 この歌は各自鼓をつりて拍子に合せ、且つうたひ且

つゝどる時に用ふ。(邑智郡)

○やまくづせー、ハラセー、お山くづいて田にしませう。

ハラヤーハトナーヤーハトナー。

○わしの若い時や、あちらからも、こちらからも、嫁にと

らとらと、ヤートセー、あちもいやいや、ヨーホエヤ

ナー、あとでかたわの男をもつた。あたまさえちち、

さよさ、しんとろとろとくだまいて、さてのうきよ

や。

○大阪いま織にちりはつかぬ。エー。おもひなかく、

ちきりにおさぐさ、しんごうしのはやさ、てうし調子のよ

さよさ、しんとろとろとくだまいて、さてのうきよ

や。

○伊勢山伏やまがしと、京山伏の、かけたるけさはノ、淺ぎもよ

ぎすみぞめ、イヨむらさきめ紫染にこそこのひの絲やそめほそ。

○伊勢山ぶしと、京やまぶしの、さいたる太刀はノ、一

尺二尺三尺、三尺さけをに戀の絲やそめほそ。

○お前の庭へをどりがまるる。黄金こがねの門をおしひらき、

一の門ひらき、二の門ひらき、三ころえておしひら

き、三ころえてひらいて見れば、あらうつくしのま

りの庭、まりなる庭へ泉がわいて、つるべでくめどつ

大をどり (邑智郡)

かみやしよろのひけ、まえけ八の字、目はさるまなこ、

鼻は獅子鼻、口や鰐口で、胸は鳩胸、出腹ではらで出尻でしり、あ

ゆむすがたはあひるのすがた。あんなものでも、との

と定めれや、かはゆてならの。(知夫郡)

しよがいな

○しよがいなのならい時やござい。酒の四五丁も持つて

ござい。シヨガイナ。(知夫郡)

きそん

○きそんどのかや、けにやだて男。何處へ置いてもまぎ

れない。(知夫郡)

2 雜 謠

神樂歌

○萬づ代と波は寄せきてかはれども、かはらじものはい

にしへの石かや。

○これやこの、こは高天の原なれば、集りたまへ、四

方のかみんく。(美濃郡)

○加茂大夫のたよのかぐらして見しやい。かぐら見にこそ

第二編 本州西部俚諺

五七九

わしや來れ。(知夫郡)

ばんご歌 (一名鱸歌)

○ヤー金がわきますナーこのたたらに、イヤせんだまんだのナー、イヤ金ふきだす。

○ヤーむらけ様がナー、よければナー、炭焚様もよけれ。イヤこのよな出るな、その金が金性がよいは。

(大原郡)

ばんだ歌

○大阪表の天王寺山、松のみどりかよなくと、鐵がわきます、此山内で。

○手前こかねて五十五駄、手前にかねて五十五駄、わけば旦那様には倉建てなさる。倉の主には金がる。

(仁多郡)

大山椿

○さてもめでたナ船通(山)のともも、もとは卜藏に葉ははぎ山に、影をさすのが三か國、春はよい。

○さてもめでたな大山椿、もとはお山に葉は日野川に、花は米子の城で咲く。(仁多郡)

○鶴が舞ひます、蓬萊山に。三羽すわりし其山に、中の一羽が舞ひ遊ぶ。あとの二羽鶴うちはやす。

○小夜の中山兩谷清水、谷の清水が峰わくなれば、妻と分れはありやすまい。

○草になりたい、すま取り草に。よれつもつれつ、もつれつよれつ。勝負土俵の中に在る。

○京のとまちで桐の箱ひらうて、あけて見たれば扇の地紙、ひらいて見れば末繁昌。

○忍び忍んで遇はれぬ夜には、門のかさぎに歌をよむ。鳥もはら／＼我も鳴く。

○大せんお山で目に附くものは、蓮の蓮華の手水鉢、誰が寄進に上げたやら。瀬戸の定右衛門が上げたとな。あらんかぎりの名を残す。

○京の金閣寺を拜見なしたかごろうじなしたか。楠の天井の一枚ばりではないかいな。はぎのちがひ棚南天床ぶち床ばしら。

○しんほこたいじに虎の皮きせて、千里飛べとはそれや無理だ。

どつさり

○お客望みなら、やり出して見ませう。當世はやりの、こだいじを、歌に無調法な、わしなれど。

○いと可愛い、めさきなだのことよ。去年おろいた前髪を、たて、お下れや元の様に。

○兩國の橋の上から、文取落す。文は流れる、戀路は沈む。よれつもつれつ、瀬で遊ぶ。

○鶴の巢ごもり、賀古川本藏、障子明くれば尺八の聲、娘小波で身をやつす。

○筆を柱に硯を船に、書いた文をば帆にまいて、戀と云ふ字を帆印に。

○猫よ、おのれの眼は丸うて四角で、まん中どころがちよこちよいと赤い。それでなければ、二階のなけしちよん／＼ちよろづく、通る鼠をいも取らの、捕らな毎晩毎朝鼠子か、戸棚に上げた茶碗や皿鉢、しつちんがらりと落す。

○歌に就いては、わしや思ひ出す。わしのとのごは歌好きで、聲はよい聲、面白い。

○下りつけねば上りの節に、港はいらにや、口まで著けて下され、おやぢどの。

○親のない子と羽なし鳥は、たつにほろりとないてたつ。

○酒は三盃、男は五尺、五尺男は出ず入らず。

○鳩と鳶と、鳥と雀と、雉と鶯とほととぎすの啼く聲きけば、鶯びろ／＼、けん／＼ばたく、はつとんかけたかほととぎす。鶯梅の木小枝とまりてほけきよ讀む。

○鷹がまひます、五條の空を。鷹でござらぬ牛若丸が、辨慶とるとまひ下る。

○しよけん知らねば歌の節習へ。歌はしよけんの理をわける。

○大山お山から、ナー隱岐の國見れば、島が四島に大満寺、サーノーエー、東方から朝日さす、サーノーエー、西に、コレハイドーチャナー、五色の、ナー、チヨイト、雲がかける。サーノーエー。

○かのた、かのた、ヤーナー、思ふこと叶うた。鶴が御門に巢を懸けた。サーノーエー、御家、サーコレワイドーチャナー、御繁昌と、ナー、チヨイト巢を懸けた。

アーサーノーエー。

○私の兄弟は、ナー七人ござる。京や、大阪や、江戸伏

見、サーノーエー、佐渡や、コレワイドーチャーナー、

新鴻や、チヨイト私こゝに、エーエー、サーノーエー。

○國が小さいとて、愚にしやるな。こゝも昔のあとあり

て、蛙鳴く音も松風の音も、静まるいはれあり。

○竹に雀はあちらの枝から、こちらの枝まで、ちんく

ばたばた羽がひを揃へて、品よく止まれ。止めて止ま

らぬ三千世界の色の道。

○竹に成りたい、大阪新町傘屋の、ろくろの柄の竹に、

可愛さ、蛇の目の傘を、殿御に、廣げて持たせて、さ

ゝせたい。

○竹の丸木橋すべつて、ころんで、あぶないけれども、

殿となら、譬へ落ちて二人連。

○忍べじよとすら、鳥がめつける、まだ夜も明けぬにが

ほがほと、憎くや八幡の森鳥。(知夫郡)

○大仙山から隠岐の國見れば、島が四島に大満寺、隠岐

に珍らしお山さん。

○着けて下され上りの節に、港はいらにや口までも、頼

みますぞえおやぢさん。

○壇鏡祭は八月の朔日、諸人参詣の歸りがけ、牛の角力

は土橋で。

○隠岐の各港船は七處着ける、關や知夫や浦郷、別府菱

浦や津戸西郷。

○隠岐の名所は色々あれど、西郷港に別府灣、山で焼火

に大満寺。

○隠岐の名物色々あれど、するめ材木馬と牛、牛の角力

にドツサリ節。

○

○安來出る時は涙で出たが、今ぢや安來の沙汰もいや。

○關は朝日よ杵築は夕日、名所出雲の西東。

○山が高うてあの家が見えぬ、あの娘戀しや山にくや。

○遠く冠山登りて見れば、沖には八色の石がある。

○遠く離れて枯木に螢、見ずに焦れて居るわいな。

○嫁が島根に夕日がさせば、松の小枝を船が行く。

○儘になるなら松江の湖水、何時かあなたと嫁が島。

○安來千軒名が出たところ、社日櫻に十神山。

(能義郡)

出雲安來節

○私しや雲州平田の生れ、十里二十里三十里東の果から

西の果迄引ずり、引張つて來たものを、今更暇なら暇

とらぬ、廣い世界に主獨り。

關の五本松

○關の五本松一本切りや四本あとは切られぬ夫婦松。

○關は良いと朝日を受けて大山嵐がよそくと。

○關と境は竿指しやとく何故にとくかぬ我戀路。

○四海波歌ふて貰ふた女房でさへ切れる時は切れるまし

て我々風情の口約束ぢや尙のこと。

3 童 謠

手鞠唄

○向ふの山に、猿が三匹止まつて、前の猿は物識らず、

後の猿も物識らず、中の子猿が能う物識つて、ござれ

友達、花見に行こや、花は何處花、地藏の前の櫻花、

○おほまんぐちく、あけやのまいまで、よをしたかさ

んとよさん、ひめさんたんだが、しまのえきさき、さ

ーの花めござん、せんくとんく、やつとんくな

よう、いつ、むう、な、やあ、この、とを。

○猫が桑名へまるとて、桑名の道で火が消えて、とほ

してもとほらいで、茶屋の椽へと腰をかけて、水を一

杯お呉れんか、水を與るのは易いけど、釣瓶の底が脱

けました、やれくきつい姉さんぢや、お茶を一服お

呉れんか、お茶をやるのは易いけど、茶釜の底が抜け

ました、やれくきつい姉さんぢや、煙草を一服お呉

れんか、煙草をやるのは易いけど、煙管の首が抜けま

した、やれくきつい姉さんぢや、ひい、ふう、みい、

ら、ちよいと、いらさい、おちえて、おまんぐー。

(松江市)

○向ひ坊さん椽から見れば、梅か櫻か牡丹の花か、行けば能う来た上れと仰有る、上りやお茶召せおすべの眞お茶も眞も所望ぢやないが、今朝見た女郎衆は髪が亂れて鬢がそ、けて一寸百ついた。

○源さんく、花源さん、私が十五になる時にや、城山崩いて宮建て、宮のお庭に松植ゑて、松の小枝に鈴下けて、鈴がちんく、鳴るわいな。

○今日は小々明日は大々、大事なお手鞠様を、蝶よ花よと育て、置いて、四十四枚のお紙に包んで蜜柑くぐしにくぐしまねいて、今日今晚雨は降らばや風は吹かばや、お松様よりお竹様迄、確かにく、進上申すへ、そりや取んなされ(と次ぎの、人に渡す)、お竹様にはお松様より確にく、受取りました。(石見地方)

○どんく、叩くはだいさんか、千松小屋のをぢさんか、をぢさん何してお出でたか、せきだがかはつてかへに來た、おまへの雪踏はどんな色、淺黄にこまがら紺び

ろどく。(美保關)

○大門口から、揚屋の前まで、みよしたかささん、ふまいのきんじよ、皆々道中、見事なことよ、行きさきくの花女子さん、とよさんふめさんなんだかしまの、高尾かしんべの、くれなるさんじよう、錦あやおり、たしかにさんじよう、かざぐりさまよと、おめおりさんしか、ぬし手が枕で、むかしやしぬばし、せんくんとんく、やつとんとんなら、ちよと一千うついた。

(松江市)

子守唄

○お寝んね、く、お寝んねや、宵には早から御寝なり、あさまは早からお目覚で、御目覚のお褒美はなあに何、お乳の出端を上げましょぞ、お乳のではながお嬢なら、鶏蹴合せてお目にかきよ、鶏蹴合せおいやなら、お菓子は澤山おあがりか。

○ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや、彼方向いてもやあま山、此方向いてもやあま山、やあまの中に何かある、椎や鈍栗櫃の實。(出雲地方)

○寝んねこ、寝んねこ、ねんねこや、寝たらお母へ連れて行なあ、起きたらかまがとつて嚙まあ。

(出雲地方)

○雪やこんこや、霰やこんこ、お前の脊戸で、團子も煮える、小豆も煮える、山人は戻る、赤子はほえる、杓子は見えず、やれいそがしや。(出雲)

○大山の山から大風吹いて來いよ。

○おまんが紅さいた、と、か、に云うてやる。

動物の唄

○鳶、とび舞うて見せ、あしたの晩に、鴉にかくして鼠遣る。

○蝙蝠來い、酒飲ましょ、酒が無きや、樽振らしよ。

○もい、く、角出せ、焼いて嚙も。

○蛙の目玉に針立て、どこ飛ばりよか飛んでみな、ピヨピヨコく、ピヨコく。

遊戯唄

○三月櫻獨樂、四月しーら獨樂。

○地藏さん、く、おまへの水を、どんどと汲んで、松葉に入れて、まツくりかへた。

○向ふの山の蛙が啼くが、なして啼くか、寒うて啼くか、ひもじて啼くか、ひもじきや田つくれ、田つくりやきたない、きたなきや洗へ、洗やつめたい、つめたきや暖れ、あたりや熱い、あつけや退れ、しざりや蚤が食ふ、蚤が食や殺せ、殺しや可愛い、可愛いきや抱いて寝、抱いて寝りや蚤が食ふ、蚤が食や殺せ。

さんまれ様

○さんまれみれの嫁御様、何所な育ちのさんまれ様ぞ、稲の裏穂の軒育ち。

赤い帷子

○ひるまもちのござるやう、赤い帷子で、ぶらりしやりと、赤い帷子で。

○みた、みいた、みた、みたみたやの、お勝さんが、だらくで、和泉屋權兵衛さんが、わしやちや見たども、云はぬこと、とーと。

○ほーらん、えええ、えやさのさつさー、いのらのらん、ほををらんや。(松江市)

○こゝは大坂一人ぢや踰せぬ、待ちて殿御に手を引かりよ。(縁家の玄關にて)

二 鳥取縣

1 祝賀歌

祝儀唄

○るのこゝ、亥の子はんの晩に、餅搗いて祝はぬ者は、鬼生め子産め、男の子女房の子。(西伯郡)

嫁入唄

○も早や行きます、何誰もされば、今度来る時や客で来る。(實家を出る時)

○花の蕾を植ゑ替えられて、知らぬ他國で花咲かす。

(郷里の村を通る時)

○こゝは播州の舞子が濱よ、向ふに見えるが淡路島。

(村を離れる時)

○門の構りは千石大名、内に這入れば二千石。

(縁家に着いた時)

○ふなふな行けば舟磯の、姫路の宮は牛頭天王、入船出船帆かけぶね、どんど、馳せ込む夏泊。

○しま(磯の意)を見やうとて家を出て、よい赤鯛チン

く夏泊、いやどうでも眞鼻はよい處なせにいな、いや池がある。赤崎鼻がちらりほらりと美保の關。

(因幡)

3 雜 謠

とんど宮の歌

○庄屋の庄屋の宿の嬬戻せ。(一月になると米子の各町毎にとんど宿)と云ふうちが設けられ歳徳神を祀つた小さい宮を安置し夜若連中が其宮を擔ぎ町内を練り廻る時唄ふもの)

(伯耆米子町)

○こちのお家は芽出度いお家、東の方には鶴がすむ、西の方には龜がすむ、中の柱に猿がすむ、まだく芽出度いことがある、せどの築山眺むれば、寒竹小竹が植ゑてある。(伯耆地方)

蟲 送

○嫁の御綺量は天王寺蕪、もはや此家の据り蕪。(嫁が縁家に這入ってしまった時)

(伯耆)

2 舞踊歌

盆踊唄

○盆が来たのに踊らぬ奴は猫か鼠かお稻荷か。

○唄と調子のきまるまで三味線三すじの絲調べ。

○盆にや御座れよ盆中にや御座れ死んだ佛も盆にや来る。

○因州因幡の新そばよりも妾しやあなたのをそばがよい。

○今夜こゝで寝て明日の晩はどこで明日は田の中畦枕。

○頸城や見納め米山三里峠越えれば柏崎。

○行こか參らんせうか米山薬師、一つは身のため主のため。

○主のためなら米山さまへはだし參りも厭やせぬ。

(鳥取地方)

○稻の虫送つた、何處まで送つた、丹後のはて(或は町)まで送つたい。(因幡國)

4 童 謠

手鞠唄

○夏年から冬年から、己れの大事のお手鞠さんを、紅の伏紗にお包み申して、向ふのお何女郎の、お手の掌に、確々とお渡しました、おいこに受取りました。

○おまんこりやく何故飯食はぬ、腹が痛いか夏やせしたか、腹も痛まぬ夏やせもせぬが、腹に八月のお子がある、若しや此子が男の子なら、弓矢とらせて甲冑きせて、もしや此子が女の子なら、琴や三味線縫針させて育てあけるが楽しみ、ちよいと百ついた。

○けんく京橋はツとーの御前女房はよい女房、私にも水仙牡丹女郎、牡丹女郎。

○向ふ通るはお萬でないか、お千でないか、行きて見て来い、おせんでござる、お千こりやく何故髪とかぬ、何が嬉しか髪ときましょに、一人父さん冥土に行き

やる、一人母さん大阪に行きやる、可愛い兄さん出雲
に行きやる、出雲土産に何々貰うた、櫛に笄八寸鏡、
袖七尺是れ貰うた、もろはもううたが、帯にや短し襷
にや長し、紵けてしそめて山田にあけて、山田薬師の
鐘の緒に。(鳥取市)

○一イ二ウ三イ四、五ツ六ウ七八ア、これでこいつ、
二三さぶ六花の都で落すか放すか一寸百ついた。

○向ふ通るは武内さんか、羅紗の羽織に天鷲絨の脚絆、
鐵砲擔いで雉子撃ちなさる、雉子はケン〜お鳩は、
バタ〜、藪の雀はスイトン〜ヤットントン。

(西伯郡)

○雪や来い〜霰や来い〜、大山やまの雪ころ〜や。

(鳥取市)

○お月さんは何んほ、十三七つ、七折り著せまして京の
町に出したら、鼻紙落し、笄落し、誰が拾つたか、向
ふの家の息子が拾つた、笑つても呉れず、泣いても呉
れず、と〜〜呉れなんだ。(鳥取市)

るなよー、おこらば初めによらんがえー。

子供囃唄

○きっこ、ばっこ、豆屋のおきく、豆一升ごうりごり、
豆一升貸さんせ、秋になつたら戻さうぞ。

○鴉はかあ〜かあのみ、雀はちゆん〜ちゆうのみ
の。

○坊主ほツくりやーま芋、折れたら持て来い接いだッぞ。

○正月さんはどーこから、鷲峰山の裾から、削箸にばほ
(餅の方言)さいて、食切り〜御座る。

○あたごさん〜、風出いて下んせ、風が無けらにや尻
一つ。(風揚げの時)

○丹後但馬の尻ふり爺、備後備中びーちびち。

○徳利とん鉢戸を破いで、いんだら母様に叱られた。

○蝸牛〜角出せ、煮ても焼いても食はれんぞ。

○鰈かあいや背に眼がついて、親を睨んだその罰だ。

○松竹梅か尻子たつた。狸のきん玉八疊敷、狐の尾を圍
子にしよ、松竹梅かー(尻取文句)

○辨慶皿持て来い、味噌汁やッぞ。

動物の唄

○鳥々こーめんじよ、後を見先を見、鐵砲打ちが来よる、
早くいんでこゑを掛けどん。

○からすの眞似をしたけれど、三年先に帳に付けてもど
いた。

○でん〜でんの虫、出たり、入たり、しやーらんだ。

○螢、ほーたる、来い〜、あつちの水は苦いぞ、
こつちの水は甘いぞ。

○雁なれ、竿なれ、先の雁後になれ、後の雁先になれ。

(鳥取市)

遊戯唄

○いーちこたーちこたーえんこ中見りやしトんがわく、
三つこーじよーろの罪の先きはぶい。

○いつほてつほ何食ふ蠶豆、かね粒おちまんがどんぐり
まいてみやうがにさんしよ。

○炭屋の鼠が炭食つて、ちこーおーせに成つても、おこ
りこなーし。

○雀の寄り合ひちゆう〜ばい〜、鬼になつてもおこ

○正んこ提灯こ、風が吹きやひよろ〜。

○てつきり清五郎があまんぶ。

○負けて遁けるか大根のしッほ、勝つて逃げるか蕪子
しッほー(最後の三つは喧嘩の時)(因幡青谷)

第二編 九州沖繩俚諺

甲 豊日地方

一 福岡縣

1 祝賀歌

長持唄

○箆笥ヨエ長持ちや見かけによらぬヨエ、中にや小判の積み重ねだーよー。

○祝ひなヨエ、芽出度や、若松様よネ、枝もナヨエ、榮ゆーりや、葉も茂るよネー。

○此處のナヨ座敷は、いーはひの座敷ネー、鶴とナヨ龜とが、舞ひ遊ぶよネー。

○蝶よ花よと育てた娘、末は他人の家に住む。

○娘友達や櫻の花よ、盛りすぐれば、ちらばらと。

○こちらのお婿さんな七福神よ、こころ嫁御さんな福の神。

ひの松、年の數は十三文、錢やんなさい。(福岡市)

松 囃子

保元の頃平重盛博多を領せしが、市民其恩恵に報いんため、初めて松囃子を行ふと云ふ。黒田氏の治世、歳の正月十五日、此の諺を唱へて市中を練り行きしが、現今尙其形式を存す。

稚子舞歌

○唐衣すそのが原の姫子松、く、ひけば千歳も我袖に、籠るぞ春はめでたき、この御代の春ぞめでたき。梅が枝も梅が枝も花咲きてこそ匂ひけれ。思へば春ぞたぐひなき。梅をいざやかざさん此花をかさせ人々。(あげ羽)君が代にかけをならべて、老松や梅も名高き立枝かな。松を祝ひし例には、幾萬代の朽せぬ黄金の箱崎の神ごころ。又は春たつ千代の門松、子の日の小松行末も、久しき色も變らぬ春毎に、これも相生の梅の花、かかる色香も昔より、めでたし人に齡もあまねく國々も、なびき従ふ君が代の、蔭に榮ゆる春こそめでたけれ。

○勢田の唐橋やからかね凝寶珠、水にうつるが膳所の城。○船は出てゆく帆かけて走る、茶屋のむすめが出てまねく。(八女郡)

千歳ろー萬歳ろー

正月元日より數日間、少きは三四人、多きは十數人の兒童、此の歌を一齊に唱へて、各戸に錢を乞ひ、之を集めて一の繪馬を購ひ、神社に奉納し、餘金を以つて飲食す。博多古來の習慣なりしが、數年前より全く廢止せり。

○せん歳ろー萬歳ろー、まー一番のお舟には、お船頭殿を置きやれよ。金魚丸といふ舟は、おもつてかさつて、やり立てて、櫂を上げてしめを張る。しめかけ柱おし立てて、綾錦の帆を立てて、積んだる寶は何々か。かくれ籠かくれ笠、打出の小槌、大判小判、中のばんにまめつて、らいしんは倉三つ、さらいしんは倉四つ、合せて七つの倉倉に、錢も金もわつくわつくわつくわ、年の數は十三文、錢やんなさい。

○今年も満作、らいしんも満作、満作年が続いて續いて、朝から晩まで働いて、背門や背門松、門や門松、お祝

稚子行歌

○抑も稚子と申するは、七福神の其中に、辨財天と申すなり。いと畏き装ひは、國を守りの御姿、戴き給ふ天冠は、壽光を加護の光りなり。光り光りて明けき、抱き給ふ御琵琶は、月日の恵み曇りなく、福徳圓滿一定の、其嬉しさをかけ鳴らす。妙なることの音曲は、福神達も一同に、笑壺に入らせ給ふなり。御代を守りの誓にて、天女と顯(あらは)しましたして、大津の町や葦津瀉、荒津の波も靜にて、榮え榮えの幾千代が、千代を重ねの千代の松、盡きせぬ御代の松ばやし、入船出船は幾萬艘、唐船も君が代の動かぬためし祝ふなる。碇を卸しおろして、ただ萬歳を唱ふなる、エーサラエーの囃子には、鶴も豊かに舞ひ納め、龜も遊びの音楽は、殿も榮えまーします、國も榮えまーします。マシマシマシマシ。

福神行歌

○福の神やー先立つて三寶荒神さしかけて、白毛の様にはまーしまーしまし、友と榮えまーしまーし、おふみ

かこみかこみどの様には、ひよつとすれや、誰やらさ
いとう芽出たう、かはりけり。

換歌

○ひとつき山にふたつきや、年のかずかんぬれば、三
百六十五かんだ、正月の月や又おとふ月とも祝うて、
鶴龜にごまんざいは、年の始めのとしをとこ、前に來
ればさだまりて、さいとう目出たうかはりけり。

○一本柱を結びたてて、二本の柱は日光さつこふ、三本
柱をさしからふ。四本の柱は四天王、五本の柱はこん
けん堂、六本の柱はろくじが地藏といひたて、七本柱
は七かの薬師、八本柱は長谷の観音、九本の柱は熊野
の権現、十本の柱は十字がせいしたまはつて、さて又
せいじ観音の、地藏ほさつのお船のみさきにつき立て、
左かち右かち右のかちおつとつて、たからが島にこぎ
よせて、さても目出度い御世なれば、君萬歳と祝ふな
り。(福岡市)

萬歳

萬歳は陰曆正月、各戸に至り、座上に舞ひて祝するものに

よ、祖母さんが寶よ、ほんこそ寶よ、嬢こそ寶よ。商
賣人の寶を一々申せばちきりに分銅矢立てに帳面。武
士の寶を一々申せば、弓矢に鐵砲刀や薙刀。百姓の寶
を一々申せば、牛こそ寶よ馬こそ寶よ。鋤、鍬、まう
がも是亦寶よ。牛では何處牛、五島や平戸の天つき地
飴か、鼻の先きよ怒らせ尾を又まきあげ、當年始まる
明き方のかたから、もーんもーんと舞ひ込みや是又目
出たし。馬では何處馬、日向や薩摩のあらゆる名馬が、
大判小判をどつしやり脊負ひて、ひーんひーんとほけ
つて舞ひ込みや、尙又目出たし。鋤では何處鋤、大藏
新地の猫鋤はい鋤、しろ鋤などで、さきでは何さき
豊後の鶴崎、筑前鐘崎箱崎、御宮の馬場さき、御寺の
門さき、さきのしよう集めて、本まではめこみ、鋤い
たりかいたり、其又鋤き手は誰々、かき手は誰々。柿
の木しぶ四郎、いろいろのひいとぎ、鍋の中しやく四郎、
戸尻の横槌、橋の下どん九郎、鳥の黒助、鼠の忠助、
松の木やに右衛門、熱爛太郎平、冷酒仁助、赤面する
平、丸倉金藏、穴の中久四郎、其手は九左衛門なんど

して、頭に烏帽子を頂き、神官の略服様の服装を著、手に
扇を携ふ。他の一人鼓をうちて之を囃す。

○一々億々千秋御萬歳樂と譽め奉る。白米が俵五萬の、
いーろー、飯の山を押戴いて春景の面白や。誠に目出
度う候ひける。年の始めの年男、れいしようこは、
頭に冠召され、ちよみの刀を腰に指し、ゆづり葉を口
にくはへ、五葉の松を手に持ちて、さて南殿につい立
つて、源氏が門を押し開き、………で候も誠に目
出たう候ひける。法華經は一部八卷、文字の並びが六
萬九千三百八十、其中般若經と呼ばれたる。佛法福の
止りとは、こなたなる御祝殿の御座敷を譽め奉つて、
先づ御祝ひには萬歳、々々々々萬歳樂、萬歳樂よと舞
うたる、其舞常なる舞にて候はず。昔は後白河法皇の
御時なぎやうやなぎやうや太政大臣、數多の公卿衆が
春日の社に集りなさるりや、天下が太平國家が安堵で、
鶴とよくつつ立てあがれば、是亦目出度し。浮世の
寶を逐一申せば、一には御命、二には又福德、三には幸
ひ、四には又御家の御繁昌の寶を申せば、祖父さんが寶

が、八ツ手のまうがをしつかり構へて、右これや左こ
れや、行かんかせらんか。こんがきや夜も晝も、豆の
しよう食ひたがつて、人の事あ言ひたがつて、糯の米
はかみたがつて、年寄りや尻から煙の出るほど、煙草
どものみたがり、白鷺や下の田に下りたがり、鰯どま
逃げたがる。何とかかんとか、其又植ゑ手は誰々。命
の長いが於鶴に於龜に、於千代に於萬に、於春や於秋
や、なんどが、尻をばやつこらさと腰までからけて、
旦那殿の御覽じる手前も構はず、山田も迫田もやれち
よほく、ちよほりと植ゑたる其田の實入のよさ、が、
一町で一萬、二町で二萬の秋あけなされば、大福長者
と諸人に仰がれ、鶴の代千年龜の代萬年、福の神やき
りく舞ひ込み、御家は繁昌く目出たや。

(企救郡)

やつとなんこ

是も初春に毎戸に至り、少女に異様の服を着せて踊らせ、
他の一人傍に立ちて唄ふ。極めて卑野のものなれども、近
年は殆んど跡を絶てり。

○ヤットナンコガ、ヨイヨサ、ことしやエー満作穂に穂がさいた。(企救郡)

はつちよぎ

是も初春に來りしが近年は絶えて見ず。後ろ鉢巻し、襷をかけ、兩手に錫杖の如き鳴り物を握りたる男、戸口より躍り込み、活潑に踊る。他の一人太鼓を打ちて唄へば、其間々に踊子は次の囃み唄ふ。

○段々畑のやせ南瓜、なるこた知らんではひまはる、つみ切つて血を出せ、もみ切つて血を出せ。(企救郡)

千代萬歳十二段

初 段

○一々おおく、彌勒のお世、三夜のあかつき、谷の眞砂が峯に登りて、大磐石は岩をかたらひ、古今やをにやら青空を、びらりしやらりと飛ぶは寶の千代五萬歳樂と譽め奉る。しらけはたはら五萬の治郎、飯の山を押戴いて春景が面白や。

二 段

○誠に目出度う候ひける。年の初の年男は、れいせうこ

うは、玉の冠をめされて、らいしやはたちをはつて、がくやはち、みの刀を腰にさいて、ゆづり葉をくはへて、五葉の松を手にもつて、さてなんでつい立つて、源氏が門を押開き、おし拜んで候も、誠に目出度う候ひける。

三 段

○幸や改まる年立ち歸る朝には、水も若やぎ木の根も榮えとふみ式々の、お祝ひの物とほめて悦び候も、誠に目出度う候ひける。

四 段

○さんせふやうの東には、富のほふが榮えて、其日の神を尋ねれば、長白が浮木にのつて、うこんの波がさか登り、霞に橋の渡すらむ。あんまの川原にどんふくら、うつ波が高うして、白龍水がながれた幸や。寶の君の御祝ひの、久しかるべきためしには、池の波の立ちやうは、夜打つ波のこんこう長しや、ひる打つ波は相生こふと、ふんとふらくに重つて、とふまなか、川柳川原風にひいて、こしみの根をしらふれば、波に

相生打ちたりけり。扱青王が、松根をばしらべたり。深き處に船置いて、浅い瀬に橋有りて、橋の本の菖蒲は、夏になつてひらいて、水を揚げるは水車、玉を見するはみよ作り、扱令月が宿れば、長お子に歸り流の久しきは、君の御代にことならん。誠に目出度う候ひける。

五 段

○あら目出度や、そてんのおんとの作りの有りやうは、りうふりがつのうへに、こんがう山が石をならべ、しゆみせんさんが柱を立て、屏風松の繪がめでて、花がはやし君がつまを、命もながむれば、かたに金物銀とうちて、ばんしやうがいたおろし、六波羅密ともかんついで、初ひてかんばしく候も、誠に目出度う候ひける。

六 段

○さて又けんぶが北に當つて、よふこう山福壽の山が高うして、梢を傳ふ猿猿や、谷の水は酒の泉、空をはしるは小男鹿の聲、萬歳とはふしかせ、あめは土を潤ひ

て、風は枝をならさいで、神明八丁十六丁、ほりかを、ほつてついぢをつき、宮殿廊下を立てならべ、四尺内裡内侍して、東門開きの東さむらひ、月見でん花見でん車屋すめのおさとふに、まはりのかかりに切立ての、ゆふべに成つて靜まりくるも、誠に目出度う候ひける。

七 段

○あら目出度や此處はかう處の處で、福壽がとまり末世末代、難なき處に候へば、空より七福ふり下り、地より草木をそふしよふし、昔聖德太子は妙法蓮華の車に召されて、りやうしやせんより我朝に、とんで渡らせ給ひしは、やうしや、ごーしや、牛車鹿車の車に召されて、はくひやうとふし引いて、地をば金剛力しやと引きたひらけ候も、誠に目出度う候ひける。

八 段

○東は御ざんしや、南に下れや門しや、西は大徳北は金剛座門しや、子丑寅は多もん天、巳はしよく天、未申はそうもく天、戌亥はきこく天、天には日月下にはけ

んらうすいじん^神は、丁度守らせしんごんせふしめ候も、誠に出度う候ひける。

九 段

○池の中の島々に、植ゑたる木の名はなにく、金鳥とは土椿、南天菊とは令^{りやう}やふ菊川原しやうぶく、松にかゝるは藤の花、水に浮草かもめ草、孔雀ほうわう峯の上、佛縁草とさよづるを、佛法草と斷りけるも、誠に出度う候ひける。

十 段

○ふん^{不動}とうさんは來らいで、こんがらどうじはきたらいで、せいたか殿はふつとして、廿八もんにやもりける物は、な一にく、法華經一部八百卷、廿八法もふじの、よふじの中にも般若經も讀み奉る。

○抑も昔さぬきの國四國田中村といふ所に、しんたん長者一人侍り。その長者殿の成亥の角に、千石作るさしつほあり。その中に三つ又のえのみの木有り。又は三本の竹くもをかすみとおひしけりしが、長者どのこれはふしぎと思ひ、ある夕漸くおそなへければ、空より

雪しもふり下り、其にほひのかんたつのごと、したみる姓をあつめ其あじはひをみたまへば、あまくありからくあり。これはみづのえ西の年にてたるもの故、水をへんとしてさんずるにとりとかく、さけとよむ。三木ともなづけさ、とも名づけ、松尾ごんけんを初として、日本六十よしうの神々にほかる奉る。幸々拂ひ給ふ、清め奉る、上はほん天下は帝釋閻魔王く、五道の冥が南海下界の内には、伊勢は神明天照皇太神宮、天の岩戸にこもらせ給へば、日本はくれのやみとならしめ給ひける。

十一 段

○いざなみいざなぎこきの尊と、夫^{そと}をかなしみ天に向ひ、夜にかはり日にかはり、ばんくやくにかはり、守らせ給ひければ、日天月天、空より鬼神はふり下り、赤きは人界、黒きは三界、白きはけんぞくけだものとも、名を付けたる。三本の御へい、天の岩戸に納め給へば、大神宮も夫を悦び、少しは御戸を開かせ給へば、誠に出度う候ひける。

○それより末社が立始めて、内宮の御宮四十末社、外ぐうの御宮八十末社、合せて百二十末社の御神とよ。中にも尊き荒御神とよばはり給ふ。雨の宮風の宮月よめ日よめ北にさいふ、高田の権現、鈴鹿の権現、加賀の白山敷地の天神、門司に下りて一社の大こん宮、三吉津の宮迄かんじやう申す。

十二 段

○四國のそうびやうさぬきの金比羅宮、あきの國には宮島、周防の國ではといし八幡、長門の國にはなれ合觀音、備後備中、備前の國ゆうが三社の大権現、萩に稻荷や長府に一の宮二の宮、并に神功皇后、關に龜山かんじやう申す。誠に出度う候ひける。

○九州の地に伴つては、日本のそうびやう宇佐八幡、并に大貞八幡、菰の社、彦山は三社大権現、くほては二社権現、一社は籠り水とかや、最早兎角寺山倉持山、八山一社の大てんぐう、椎田につなしき天満宮、さつまにきりしま祇園の社、筑前の國ちびごんけん并になら山大権現、南無さいふはじざい天神、箱崎八幡海八

幡、肥後の國では清正公、鹿大明神、阿蘇は十二大明神、川上では姫大明神、筑後の國ではかうら八幡、豊後の國ではゆす原八幡、日向の國では生目八幡、井にうどが岩屋と申する社は、うがやふきあへずの尊おんけいには火事をのがれ、亂けつには悪事をのがれ、夜の驚きひるのさわぎ、盜賊盜難七つの災難がふりやくるとも、此御神のくりきを以て、ま方千里が外に拂ひのけ、刀はさやに納まりければ、誠に出度う候ひける。(築上郡)

田 打 男

穰^{せう}をかけ鎌を持ちたる子供を踊らしむる物貰ひの歌なり。○今年^{ことし}や満作、出雲の國がら、田打ち男が参つた。参つた御序に、さらばあなたの御田植、田植さなほり何を肴に致しませう。一味噌、二味噌、三びら大根、四ら豆腐、五豆、六一、七ちやら、八つちやら蓮^{はす}の實、九り牛蒡に、十蒟蒻、之れを揃へて精進物ぢやなりますまいと、裏のまんがりくひゆう七^{なな}まがつた瓢箪^{ひょうたん}堀を、ほいて見たれば、鱈やどんほや、鯰、取り分け、どん

ほが多うござる。どんほのかばやきや、お女中方には好物もん。

○ことしや満作、出雲の國から、田打ち男が参つた。参つた御序に、さらばこなたのおん田植、西の畝町がお一千町、東の畝町がお一萬町、中のよい處が三段三畝の大畝町に、のしろだをとりまして、目出度いお年の始めから、御新年の御祝ひ。(三井郡)

獅子廻し

新平民獅子を廻し、太鼓を叩いて貰ひに来る。

○さて獅子なんと、申するは、此界にても始まらず、唐天竺にも始まらず。めん灌をん灌、さんない灌、中に住んたが獅子となる。唐天竺にては、七帝の御大將の獨り姫の婿に化けたり、まもなく二人の和子を設け、七歳九歳の春の頃、花園山に登らせけり。………槽に登り表の方を見て見れば、胴の長さは一丈餘り、まなこのあたりを見て見れば、八寸鏡二挺並べたる如くなり。口より火焰を吹く如く、十二の角をはりあけたり。あら恐ろしや母上さま、我父上は獅子化物と化け

てござる。黒金御門をはつしと打てば、獅子はかつばと驚き、黒雲まきよせ逃けんとすれば、天のしやぐまが首打ち落す。胴は天の河に流れ行く。むこ齒三枚盗み取つたるが五穀の種、首は三國界なる、彦山權現に收まり候。二月十五日は御田がはじまり、種蒔なんど、申するは、此獅子なり。(三井郡)

狐廻し

狐を作り貰ひに来る。

○来た〜〜〜飛んで来た。来たといつてもお客ぢやごんせん、飛脚ぢやごんせん。京都下りのお稻荷様よ。お稻荷様の御利生は、千兩萬兩のお金は來るとも、四百四病の病と悪魔はこんといふたら、いつちご、こん〜。(三井郡)

舞々

俗にめい〜と云ふ。鼓を叩いて貰ひに来る。

○田螺どの〜、あすは、春田に遊びませう。いやで候、昨年の春もさう云うてだまされた。鷹と鳥と梟奴とあつちや、かいころばつからかいて(龍轉ば)、かいこづく、

猿廻し

○お猿が山行は、熊本の爺さん瘡瘡のお拂ひ、五穀長者お俵こかし。(三井郡)

節季候

乞食の物品金錢を乞ふとき唱ふるもの、以下數節皆同じ。大抵節季正月に限る。

○そら又御祝ひ目出度いちがはん。こつちのとん様お馬が御好きで、お長屋三十六軒よーやる。あの間の隅から此間の隅まで、ざらりやざつとつながせ、そこそこ賜へばお馬の別當にや、でこ内(な)でこ助とべんの休三はかたやはやまやぬるまがわつたるほーねり、びんつけびんたにべつたりぬり付け、後は秋月元結でちつくり豆をりゆうたか、おうばさんの……堅糟大根のほやほや煮えたと食うたか、お馬はどんばうふとさに、一どきかけだす。ひーん。

○目出たいない、目出度いない、大黒さんな一が大黒二が布袋、三で三人御兄弟や、四つは萬の世に狸々、五ついつもの若惠比須、六つは福祿清淨天、七つ何事

正月に、新平民太鼓を叩いて貰ひに来る。
○年改る初には、白銀の年玉、齒朶もろもろには、もろへんじ、當年正月春來れば、水で若やぐ木の芽も蓄むたづの葉、鶯の初音をゆだえて、のをもんない(此の言不明)この面白くも候てん。(以上序)北方天に造りし倉は、虚空藏の銀の庫、東方天に造りし倉は、大豆小豆の御倉なり、南方天に造りし倉は、大黒天なる錢倉なり、西方天に造りし倉は、辨財天なる米倉なり。四方や四面に倉を建て、中に泉かめんでたさよ。酒と造りし泉とたたへ、七つの泉がた、へたり。酌めどもれど盡きもせねば、長者様とは御祝ひ申す。(三井郡)

長者の君

倉祝の一流れ

こつちや、かいころばつからかいて、かいこづく、其疵が〜雨さよふれば、うづきます、其疵薬を云ふなれば、山の峠の法螺の貝、海のだ底の丹波栗、虱のあばら骨、一夜作りのから酒と、煎じ合せて妙薬なり。(三井郡)

聞く人は、吉祥辨する辨財天、目出たいな！大黒。

○目出たいな！大黒さんがあなたの御家に舞ひ込んで、舞ひ込んだ。チヨイトナ、チヨイトナ。

○親も代々、子も代々孫ん子末代孫子の末まで、ほだいほだい福はどつさり。

○紀州はなぎさの郡たかがうら、淡島大明神様第六番目の乙姫様、腰から下の病なら、直してやらうとの御誓願、男女の隔てなし。

○西のせまちがだいせんじよー、東のせまちがだいせんじよー、中のせまちが三反七畝、七畝所に隠居家立てて、祖父と祖母との別れ家立てて。ヤツコラマカセノヨーイヤマカセ。(福岡市)

乞食四ツ竹を握りて、門に立ち、別に小さき子供を踊らしめ、左の歌を謡うて貰ひに来る。

○アラ目出度いな、お家繁昌と祝ひませう。(踊子) アーチヨイトナ。

○アラ目出度いな。大黒が、あなたのおへや(室)に舞ひ込んだ。(踊子) アーチヨイトナ。

萎れ草。萎れた花をやぐらにかけて、上から見れば牡丹の花よ、下から見れば八重櫻、八重櫻。(宗像郡)

○關の御茶漬出がけに一寸あがれ。人の悪いが門司田の浦よ。大里長濱會根利田、行事大橋や極樂世界、うはさばかりで行て見りや地獄、椎田鳥に八屋の鳶、小祝堂から目をぬかれ、中津吉吾さんから又もだまされた。

○蘆屋道満大内鏡、狐かりうど致した時に、悪に門から身を狩り出され、保名様から身を助けられ、保名様に御恩が御座る。御恩ほどきに女房となりて、女房なりしが先づ七年よ。間に童子と云ふ子が出来た。子から寝姿見届けられて、どーせ此屋に住ひが出来ぬ。母が見たくば信太にござれ。母は信太の森に住む。(築上郡)

○ひよくと鳴くがをしどり、小池に往むがをしどり。

○五文さしぐしはな紙一帖、アラーヨイマカーヨイ、こひがかなはにやそんそりゆーもどせ。アラーヨイマカーヨイ。

2 舞踊歌

盆踊歌

○盆來れやうれし、正月來れやうれし。うれしの花はどここに咲く、どここにさく。山にも咲かぬ、川にも咲かぬ。石山寺の門に咲く。

○あら美しの、つまぐろの花よ。一枝折りて、たもとに入れて、一枝折りて、ふつくらに入れて、亦來る盆に水祭る、水祭る。

○今年の盆は、盆とばしおまぬ。紺屋が焼けて、かいたが焼けて、盆かたびらも白できる、白である。白でも着まい、淺黄でも着まい。今こそ流行るべにかたびら。

○紺屋の裏にきりぎりすがないた、紺屋の嫁になろと云うてないた。紺屋の嫁になそなたなそが、墨すれ、ごすれ、ごの豆はかれ。あひだにや形もつけ習へ、つけ習へ。

○盆々とてもけふあすばかり、あすから場合の萎れ草、

○空の星の数かぞへて見れば、九千九つ、百七つ。(田川郡)

○今の世までも盆踊りとして、傳へ残りし其もといへば、お釋迦如來の慈悲心深き、數多の亡者が地獄に落ちて、苦けん受くるを是御覽じて、苦けんをまぬき喜ばせん、地獄の門の戸開かせ給ひ、數多の亡者を呼び出しあれば、それを預る獄卒共が、お釋迦如來に申せしやうは、これは私預り物よ、早く地獄に御返しなされ。閻魔大王の叱りを受ける。えようくと、しりければ、お釋迦如來は方便手だて、二百餘人のお弟子を呼びて、鐘や太鼓を打ちならしてぞ、地獄踊りを致せとあるに、皆のお弟子が御受けを申し、直に踊ぞ始まりにける。阿難尊者に目蓮尊者、うら盆經の音頭があれは、われもおれもと皆踊り出て、餘り音頭の面白ければ、尊者くと受聲上ぐる。踊る手づまにちよつとさど手打ち、後の受聲にやあとせいよいな。是はいよいよあと榮ゆると、かいた文字で目出たきはやし。餘り踊りの面白いゆゑ、これに見惚れて獄卒ども、我を

忘れて皆踊り出る。今は地獄にせめ人もなし。數多の亡者は悦び踊り、地獄のがれて極樂となり。こんな目出度い踊りになるは、是ぞ佛の追善供養、こんないはれのある其故に、末の世までも盆踊りとして、勇み進んで踊りしものぞ。(三瀨郡)

かりとつばめ

○かりと燕はどちらがかはい。やゝを育つる燕がかはい。はなをみすつるかりがねならば、文のたよりもまた頼もしさうかいな。エーソーヂヤイナ。

○梅と櫻はどちらがかはい。只實結びしお梅がかはい、仇にさくらはあらしにもまれ、曇る心も亦頼もしさうかいな。エーソーヂヤイナ。

○戀の源尋ねて見れば、神の昔の二柱、君おのころしまにましましてより、賤が伏屋のわれくまでも、恥かしや。エーソーヂヤイナ。

○東名所は名もなつかしく、春の初めはうめわかまうで、都鳥浮くあの隅田川、戀風そよそよ吉原櫻なびきそめ。エーソーヂヤイナ。

いじ、きみに思ひの深見草。

○千代八千代御代も榮ゆる常盤木の、松の葉色はなほことほきて、茂れる枝のそのなかに、鶴のつがひのすごもりや、きみがよはひはながからん。

○吳竹のよごと千代のかすこもり、色付く稻も初雁の聲、行方思ひの花すゝき、民も豊に天つ空、祝ひ壽き天が下。

○年毎に榮えて村の賑ひの、三味の音たかもよもすゞしさに、踊りめぐるや盆の月、稻も白露引き受けて、弓張る實のりゆたかなり。

○なんのいんぐわで百姓習うた。夏は田の草、秋や夜白な、秋や夜うす、田の草、秋や夜白。(鞍手郡)

いろは口説

○イヤークには、オホーホーイ、ハー國は日本日向の國よ、こけつ和尚の造りし功德口説カ、四十八字のいろはの功德、幼なき子を愛して通せ。老はうやまひ無禮をするな。腹が立つても皆まで云ふな。憎み受くるも我心から。譽めてもらふと高慢するな。遠慮ないもの一人

○思ひ深草少將さまは、小野の小町の色香にまよひ、百夜誓ひて通ひし内に、露と消えしまたどうよくさうかいな。エーソーヂヤイナ。(鞍手郡)

花句 ぶ

○花句ふ山の端出づる月影に、光るの君にいつあひ染めて、思ひ明石の浦波に、立ちおくれつゝ見る目かる、あまのみながら戀ひ忍ぶ。

○梅薫る東や春の軒の端に、早くもなれて鳴く鶯の、初音しをらし娘氣の、たけの思ひを一すぢに、まつのよはひを契りけり。

○戀のたね誰いつの世にまきそめて、なさけのみばえけふ咲き染めて、いとしかはいの花盛り、男盛りや色盛り、遊びこうじてするとなる。

○豊年は民も榮ゆる萬代に、七福神の舞ひすがたこそ、恵比須大黒始めには、鯛つりこんぶまきするめ、末は鶴龜五葉の松。

○秋の夜のいとゞ月かけさやけきて、露にわが身を世にうつせぐさ、姿うつろふ鏡草、わけてやさしきひめつ

もないよ。隣り近所に不都合するな、近き中にも又垣をせよ。理屈あるとも皆まで言ふな。主に於ては大事が起る。流浪人をばいたはるやうに、親に對して不孝をするな。若き間の其道々を、家業大事と心に掛けよ。善きも悪しきも人事云ふな。例令高きも又卑きも、禮義正しく浮世を渡れ。そこつものよと言はれぬ様に。常の身持を大切に持ちやれ。寝ても覺めても只正直に、何がなるとして世を恨みるな。樂な暮しは一人もないよ。報い報うて貧窟となる。歌で必ず身を亡ぼすな。今の難儀は思へばいとゞ、後の親をば又本とせよ。終り果てねば我身がしれぬ。國に於ては大事が起る。役をするとも驕らぬ様に、眼くらみて貪慾すれば、劔の地獄は此世に落ちる。富強千歳と備はるやうに、心靜めて詫するやうに、榮耀過ぎては貧窟となる。手前好いとて自慢するな。悪しき事なら誰でも言ふさ。酒を飲むとき過さぬやうに、きりやうよいとて自慢するな。夢に苦勞は貧するものよ。目にも出さな、色にも出さな、耳に聞いても聞棄てにせよ。次第くゝに顯れます

る。縁のなきもの一人もないよ、一人行く道冥土の道よ。物の憐れを思へばいと、世上あるけば宿屋が大車、すくのすかんのと人事云ふな。上下段段に皆押し並べ。(三瀨郡)

○いとけなきをば愛して通せ。老はうやまひ無禮をするな。腹は立つとも皆までいふな。憎みうけるも我心から。褒めてもらは、高慢するな。距てないとて遠慮に思へ。隣り近所に不通をするな。近い中には又垣もいへ。利口者ぢやと高慢するな。主のある人不義共するな。るらうするのも我心から。親に不孝の妻なら去れよ。わかい時には身を謹めよ。可愛子供にや又旅もさせ。慾にきりある我慾をするな。たかい低いの差別をするな。禮儀作法をよくわきまへて、そさうした時はよくあやまれや。辛い務めものんで通しや、願ひ通りに事成就する。ならぬ者ぢやと言はれぬ様に、樂がしたけれや辛抱なさい。昔がたきの人にはしたへ。浮いて繁るは水草ばかり、いやな事とて色には出さな。後は其身の樂しみとなる。親の意見を忘れぬ様に、國

れば、弓の天下を許してやると、あれを射おとす人とてもなし。與市ならでは射落しやすまい。與市御用と御前に召され、與市御用ときくより早く、茶色袴のも、だちよ取りて、御用如何にと伺ひあれば、與市あれ見よ沖なる舟に、まことに扇が立ておいてある。あれは源氏の試みのまと、あれを一矢に射落すなれば、弓の天下を許してやらう。那須の國どま當座の褒美、君の發命一と間に下り、一間くだりて仕度にかゝる。下にきるのが下ねり小袖、中にめすのが萬年ぐさり、帯は流行の京博多織、駒はどこよと尋ねてきけば、駒は奥州かんと育ち、あけて六歳鹿毛なる駒よ。金のふくりん鏡鞍おいて、淺黄手綱を七へにとりて、急ぎくして屋島が浦の、小松小かけに駒引き留め、遙か向うを透かしてみれば、其の日屋島が大西院で、波が高うて風烈しうて、そこで與市が氣聲をかけて、此處にまします明神さまよ、南無や鞍馬の大神狗様、弓も刀もあけますからは、暫し留まれ波風二つ、神の力が波風靜か、中をねらふか要をねるか。中は日の丸大紋扇、要處を

のおきてをよく守りつゝ、屋敷塙をきびしく守れ。貧し暮しも心を富ませ。けしの種子でもぬすみはするな。富者貧者は時世と時節。心よく持ち油断をせねば、えらい人にも成られる浮世。照らす鏡の曇らぬ様に、悪しき友達遠ざけて行け。咲いた櫻に駒繫がれぬ。貴顯方とてへつらひするな。由緒ある人粗略にするな。愛づる心は下目につかへ。身分相應儉約せよ。死後の笑ひを受けてはならぬ。會者定離と心をかけて、貧も富貴も世を怨むるな。もとの赤子が裸と思ひ、世間世上を下から眺め、進みゆく氣をこだてにとれば、人の開くる寶の文と、末の世までもかたみに残す。じやうが文せしいろはの口説。(京都郡)

那須與市口説

○手柄づくしは那須野の國よ、那須の與市といふ侍は、男小兵で御座候へど、積る御年の今十九歳、残し置かれし處をきけば、お國讃岐の屋島が浦の、源氏平氏の御戦に、平家方なる沖なる船に、九郎判官之れ御覽なれ。あれは源氏に試みのまと、あれを一矢に射落す

射たべしやんせ。ひとつ放てば扇の要、扇はちりちり海にとおつる。沖の平家は舳ばりたく、陸の源氏は御旗を立て、したりくと褒めあふ聲に、弓は袋に刀は鞘に、納めおきます、鞍馬の山に。(京都郡)

後生くとき

○命あるうちようき、なされ。老少不定の身を持ちながら、花見月見は樂しみならず。逃げよう道ない。未來の道は。ほんにうつかりしてゐられんと、へんじのぶれば永劫のそんよ。兎角我身の後生をおもや、智恵もいらねば學問いらす。りこう發明やくにはたぬ。ぬけた者程ぬかさぬ御慈悲、流轉くまよひし道を、己が願業はけむに足らず。わしは本願信するばかり。若い妻子を捨てよぢやないが、よくも捨てよと言ふのぢないが、たつた如來の仰せを聞けば、れんけ世界に生るゝ人は、そりようばか、へだてはないが、常に本願信する許り、ねてもさめてもなむあみだぶつ。永い迷も此しやばかぎり、樂でうとくで暮した迎も、むざんなるかなみのりを聞かや、うるの都に行く事出

來ぬ。今も無常の風吹きくれば、野邊の煙りとなり果てぬるぞ。思ひ見なされはかないものぞ。久遠劫くをんごふより作りしつみも、やまひなほるも信心一つ、まこと他力の信心得れば、けしの種ほど疑うちやならぬ。佛に我身の罪とがまかせ、こんなつまらぬいたづらものが廻心懺悔まごころのみにりによりて、てんがはれての極樂まゐり、あきれ果てたる果報ぢやないか。さればまことの信心得れば、昨日今日までこのはなさして、行くに極まる我身の上が、あこちかへばちかうたものか。彌陀に我身の罪とがまかせ、自由自在の淨土のさいど、縁にひかるゝ法ぢやないか。人をうらみに思はぬやうに、まふけだすのもひんくの人も、せめて國恩報せぬ人は、少しや報する思ひになりて、京も田舎も皆おしなべて、上の規則をいよく守れ。(田川郡)

花句ふ

○恥かしや、君と寐た夜の手枕を、つゝめど顔に紅葉も見ゆる、互に今はよそと見る、深き想ひを、水のまた

各々手に扇子を持ちて舞ふ。樂器は横笛、鉦、鞆鼓等を用ふ、歌詞は凡そ四十八番あれど、其の中には後世歌ひ加へたものもあらうといふ。「下郷、横廻、中通、上郷」とあるは星野の地名である。

さきに出版の俚諺集にも一二載せてあるが、次のは同地出身の下川淳氏の報告で、この方が正確と思はれるので、重複を厭はず其のすべてを掲げる。

思のます

○ハンヤおもひのますは誰ゆるか、ハンヤをりくによそまごころあるふりみれば、そひねしながらまごころチントもとなや。

○ハンヤおもひのますはたれゆるか、ハンヤこひしさにあたりの空をながむれば、戀しき人のこゝろチントとはる。

松にも

○ハンヤ松にも風はおとづるる、ハンヤ、いかにやなまぢ人の、心はくれなるの、うつろひやすきうらめしや。

も、遇ふ夜のよ一かぞへ。

○引き窓に、月影さすや吳竹の、うちは夜ごとよごとに契りをかめて、解けて寐た夜の亂れ髪、こんなるにしを二世までも、かはすまいとや戀の常。

○通ひ路や、人目を忍ぶ袖頭巾、夜なくごとにかはせし枕、思ひのつきせぬねまの中、月夜鳥にだまされて、路次の駒下駄ふみたがひ。(鞍手郡)

星野の反哉歌

福岡縣八女郡星野村に反哉歌舞の起りしは、いつ頃であるか今明かに其の起原を知ることを得ないが、同地麻生池神社に於て、風流反哉と稱へて、往昔より里俗の舞樂を演じ來つたのであるが、此の社の開基も定かでない。社傳には貞應元年、領主黒木氏再建せし由見えて居るさうである。又興國年間西征將軍の宮此の社に御祈願ありて、土俗風流反哉舞をなさしめ給うたことである。船曳鐵門氏の説によれば五百年以前のものである。今猶舊八月十八日同神社に於て、毎年此の舞を演ずるのが例となつて居る。舞は一組を二十人乃至三十人を以て組織し、三組四組に分か

○ハンヤ松にも風はおとづるる、ハンヤいかにやな、まちてぬるよのとの音は、いづれもあかぬうらめしや。

○ハンヤ曇ればあたりもみえぬうらめしや、君があたりの風ならば、つらからじそではぬるとも、そではしほるとをしからじ。

○ハンヤくもればあたりも見えぬうらめしや、君があたりあたりにたちそひて、つゝめども君になさけをかはしたや。せめて見る目

○ハンヤせめてみるめはうらくとなさけなや、我にこゝろをおく人の、みればよそにはうちとけて、うらみくつわきりぎりす。

○ハンヤせめてみるめはうらくとおもひをもうろにみせばやくれなるの、よそにちりてはなにかせん、我身ひとつはいかにせん。

○ハンヤしのべどあはぬこゝろはくやし、かきやるふみもたゞいたづらに、みわけてやらぬことくやし。

○ハンヤしのべどあはぬこゝろはくやし、きよたき

川も雨降れば水にごる、うき世にすまばにこれ君。

ひと目が戀

○ハンヤひと目がこひのながきく、あはで浮名のたつたがはく、わたらでぬる、我がたもと、いかにせんく。

○ハンヤ、ひとめが戀のながき、あけて浮名のたつた川、わたらでぬる、我たもと、いかにせんく。

○ハンヤひとめがこひのながきく、聲ふりたて、すむしの、おとづればかり松むしの、いかにせんく。

思ひしのばれ

○ハンヤ、しのびしのばれて、深山の奥のほととぎす、君をうらみて夜をあかすく。

○ヤーラ、うつなや、やるせなや、くれなるにこごほどそめておもへども、君の心はうらめしや。

○ヤーラ、うつなや、やるせなや、我が君とかりなぐさむあけほのに、とりのこゑうらめしや。

○ハンヤしのびしのばれて夜をあかすく、まつよひに更け行くかねの聲聞けば、逢はでわかれの鳥が鳴く鳴

○ハンヤ忍びしのばれて山の奥のほどはさぞやたびねのものさびし、鳥もうらむまじその古をおもへ君。

變る心

○ハンヤ、かはる心はたれゆゑか。わがなは水ももらさぬなかなれど、たれゆゑ心がかはらんく。

○ハンヤ、かはる心はたれゆゑか。わがなはあいちちたてひもせで、つきよはなどよみたばかりく。

君が心

○ハンヤきみが心は忘れずく、むかへこやまの鹿だにも、つまをもとめて夜をあかす。

○ハンヤ君が心はわすられじく、ござれわたらう松島に、さぎとばかりはみはならし。

忍ぶ心

○ハンヤしのぶ心はあぢきなや、月さへかくすねやのうちく。

○ハンヤ忍ぶ心はあぢきなや、つれなの君はみえもせずく。

その里人

○ハンヤその里人のつらうてもく、かのつきにふかれしすがたはよそに、君みえてうきよにまさるく。

○ハンヤそのさと人のつらうても、かのまつにはふかれしすがたはよそに、君みえてうきよにまさる。

月さへ 横廻

○ハンヤ月さへかんかくせ、うきくも、君まちてまへの柳のしたにたつ、ハンヤそのおもかけの見えぬほどかくせん、ヤハうきくも。

○ハンヤ十五夜の月は山端にさえかゝる、ハンヤわれはつまどにいそぎける、ハンヤそのおもかけの見えぬほど。

○ハンヤ月さへかくせむやうきくも、なかくにとけぬなさけのいつはりを、ハンヤわかれてのちの物思ひ。

河 風

○ハンヤ君は川風われは舟く、ハンヤおもひますよしのこがれこそすれ。

○ハンヤ船のうちでも上藤はよぶ、ハンヤとまをしきね

にノチかぢをまくらに。

○ハンヤかほと目とは櫻花、ハンヤふりと心は青柳のいと。

○ハンヤ我はゆかばやせきこえて、あとに思ひはつゆものこさじ。

○ハンヤ文はやりたしせんかたなや、あとにおもひはつゆものこさじ。

○ハンヤとりてくやしきこのふみを見れば、名の立つ、せんかたなや。

秋の野

○イヨ秋の野はつまこひはねるしかのねに、よこぶえによるおとのねにしむ。イヨこぬ人をいまよくとまつかけのヒヨまつよの枕そばだて、きけば、おどろくかねのこゑ。しらでわがなにおほゆるハンヤ君ゆるにおもひ入江のみをづくし、涙に袖もくちやはてなん。

しだれ柳

○ハンヤしだれ柳に春風せめん。いと、タン心のみだる、ほらくほろくとインいつるたかなみたかは、む

らさめ。ハンヤしだれ柳に春風せめん、せまいせうしにふみをえてみればなのたつたまづさよ、はらくほろくといづる。たが涙かはむらさめ。

まちふかす

○ハンヤまちふかすくみやこ出てはよしの山、うき世わする、花盛くヒフヒヤンチャラコ。

○ハンヤ待ちふかすくいせのようらに吹く笛は、みやきこゑするものはにヒフヒヤンチャラコ。

○ハンヤまちふかすくなにをうらむるくづの葉の、みやまねく尾花のやさしさやヒフヒヤンチャラコ。

みるたび

○ハンヤ、見るたびごとに戀ぞます。はづかしや、さぞやたびねのものさびし。いまはさかりのしほすぎて、秋の野原のきりぎりす。

○ハンヤ、見るたびごとに戀ぞます。このほどはさぞやたびねのものさびし。とりもうらむな、うらむまじ。そのいにしへを思へ君。

しちく竹

○ハンヤせめて見る目はうらくと、なさけなや、いろにみせばやくれなるの、よそに散りては如何せん。

○ハンヤ我身ひとつは如何にせん。

○ハンヤせめてみるめはうらくと、なさけなや、我心をおく人の、みればよそには打ち解けて。

○ハンヤうらみくづばな、きりぎりす。

月はまづ

○ハンヤ月はまづみねのすまに照らすより、まくらに落つる山水のこゑやさき。

○イヤかくあらば契るまいものなかくに。

○またはもうへのつゆのはをうへやさきく。より人の行く手にひかされて、明石の浦に住ひこそすれく。

八調子

○ハンヤ見たいものや日にいちど、けふの日もはやみてくらすく、イヤきみにをだまきあさのいと、こゝろあはせて夜ばかりく、イヤながくしき夜があけた、うらみもうそ、にしひがしく。

○イヤけさの夜明けの雲見れば、われもあのむきちりぢ

○しちく竹イヨしちく竹かや、はなさをひとつ、綾やしきのかけ竿に、イヨしちくだけはなさを一つ、うきなもらさぬかごかきよ。

春の景色

○ハンヤ春のけしきはおもしろやハンヤ花にきて、物思はする鶯のやどはいづくかおもしろや。ハンヤはるの景色はおもしろや、おきなめし、岡のかはべやどにきて、やどはいづくか面白や。

戀をするが

○ハンヤこひをするがの富士の根のヒヨけむりくらべん浅間嶽イヤうらめしや、さてもくさのみにものな思やせむ。

○ハンヤ戀を駿河のふじのねのイヨおもひたえつ、ねむる夜の、ゆめをたのめしチャラうらめしや、枕にうときゆめよ。さのみにものな思やせむ。

○ハンヤ戀を駿河のふじのねの、すゑもとやかぬちぎりこそヒンヨうきなたつべしものいかに。

せめて見る目

りとく。

六調子

○うぐひすが、はなのこすゑにひるねして、

おどろくたびに花がちるく、アレハヨイ、コレハヨイハソレハヨイハツクくイチチャンくノヨイ

○イヨこひしさに、こなたの空をながむれば、ゆふぐれはなみだなるく、イヨ十五夜の月のいるまでまちつれどつれなのみみはまだみえぬくアレハヨイ、コレハヨイ

豊後國

○ハンヤぶんごのくにのならひには、かさにほひのとめやるハンヤ豊後踊をひとをどり、ひそかにおよぶたびのとの、忍び車の輪がまはる。

○ハンヤ豊後をどりをひとをどりハンヤ豊後の國のならひには、ひとのじよろしのお手をひく、ハンヤ豊後踊をひとをどりハンヤ豊後の國のならひには、せきやせきやで帯をとくハンヤぶんごをどりをひと踊。

花四せつ

中通

○ハンヤ春は花咲くこの里にハンヤたちものかれぬ花のももハンヤ夏はすゞしき木のもとにハンヤたちものかれぬ木のもとに。

○ハンヤ秋はさやけきお月さま、ハンヤ心さえねばやみでそよ。

○ハンヤ冬はゆきみのふじの山、ハンヤそでにふる雪しみじみと。

君はきせる

○ハンヤ君はきせるよ、みは煙草ハンヤいまは人べつたばこ召す、ハンヤくすりとも、毒ともしれぬかるもぐさ、ハンヤのどに烟のよく絶えぬ。

君 ゆゑ

○ハンヤ君ゆるゑにこそ身はほるれ、ハンヤ君と我との言の葉を、神やしるらん頼母しや、ハンヤやるせなや。

○ハンヤ君ゆるゑにこそ身はほるれ、ハンヤ今は月のよやみでそよ、人目しけきのかどたちハンヤいやでそよ、ハンヤやるせなや。

月のくれ

○月のくれハンヤ月のくれヲントまよハンヤまつよのマンまくらそばたて、ヒヨきけばおどろくソラかねのこゑ、しらで我身のふけゆくハンヤ、ウラ、ハンヤ、ヒフヒヤンチャラロ、ハンヤミヤラニチヨンナルロ、ハンヤ月のくれ、月のくれヲントまよハンヤ今は月の夜、すだれのうちのゆかしさよ、ヒヨたつたのケン煙立ちそひて、知らで我が身のこがる、ハンヤしらで我身のこがる。

長者四せつ

○ハンヤ長者さま、おほけれど、ハンヤみなみつ長者と申するは威徳な長者でおはします、ハンヤ大地にこがねをゆりはめて、ハンヤ白がねはやしを七はやし、こがねのみくらが七みくら、ハンヤ四方に四せつをあらはせり、ハンヤ東を遙にながむれば春のけしきと打ち見えて、日月はんじやうかやかに、誠の春とは見えにけり、ハンヤ南を遙にながむれば夏のけしきとうちみえて、池水までもぬるうして、みいのかま

八代

○ハンヤ肥後の國ヤアラしろがねの、門の戸びらをおしひらきヤアラミンごとからのごしよかな。とほざむらひを見てやれば、うつほ千こうゆみ千ちよヤアラ見事のからの御所かな、なかざむらひを見てやれば、飾りたてたる槍が五萬穂、五萬ほの槍の數さへあらば、くま八代はこれの御所かな、みやまのていを見てやれば、かざりたてたるめいば七ひき、七ひきの中にたちたるくろの馬せじやうまるれと前搔きぞする。

月さへ

○ハンヤ月さへかくせんや、うきくも、君まちてまへのやなぎのしたにたつ、ハンヤそのおもかけのみえぬほどハンヤ月さへかくせんや、うきくも、なさけなや、とけぬなさけのいつはりよ、わかれてのちの物思ひ、ハンヤ月さへかくせんや、うき雲、十五夜の月は山端にさえかゝるハンヤわれはつま戸と急ぎ行く。

四國舟

○ハンヤ四國ふね、おきをばこがで渚こぐ、靜かにお

どをみがきたて、誠の夏とは見えにけり、ハンヤ西をはるかながむれば、秋のけしきとうちみえて、十二のほさつをまるらする、誠の秋とは見えにけり、ハンヤ北をはるかながむれば、冬の景色とうち見えて白がねついちをお築きやる、築土の上に松うゑて、松に白ゆきふり掛る、ハンヤ誠の冬とは見えにけり。

ちよ女

○ハンヤ肥前の國のうちやまは、さえた在所でなければ、目につくちよ女はたゞひとり、ヤアラみごと、うしろほたんに前は梅、裾にちらしの花づくし、ちよ女のめしたるかたびらヤアラこがねの鳴子を八つつけて、みよとひかしよ家君の、ちよ女みやけはなに、かもとゆひ十八花ふうで、びんのかみまできりそへて、それちよ女のおてきらす、あすはちよ女の船が出る、いとまごひには出たれども、餘り涙がしけくして、手やり目やりのいとまごひ、目やりきまりのいとまごひ。

せやなかのりの、せんとどの、足がしどろで、ろがろ
でろがろで、おーされぬ、ハンヤさかひ舟く沖をば
こがで渚こぐ、静にせよなかのりの船頭殿、あしがし
どろで、ろがろでろがろで、おーされぬ。

わくの糸

○ハンヤ我に物をや思はするわくの糸、いつくるくと
ハンヤ待ちつれど、まだめにみえぬうらめしの我が身
や。

○ハンヤ我に物をや思はする櫻花、いつよくとハンヤ
待ちつれど、まだ目にみえぬうらめしの我が身や。

松の風

○ハンヤ松の風に夢さます、ゆめにさへみぬ人になけく
なよ、ヒヨなかくくに、みもきえよや、ヨンきえよ。

○ハンヤ松の風に夢さます、ながらへておもふ人にそは
れんな、ヒヨく／＼なかにみもきえよヨンきえよ。

太刀はならへ

○ハンヤ太刀はならへどももの、ゆはれぬ、ふじやあさ
まのけむりとも立ちゆけど君ゆるならばをしからぬ。

はせのはなはらき。

○ハンヤうきふししけき松のはの、ちりうせすおもしろ
や、しのべども、ひと夜も逢はぬ君ゆるに、あの山か
けのすぎのむら。

とよひとよ

○ハンヤとよひとよなせや君、君はこつづみひたとなら
さで、こまがはなれたというて、やるく、ハンヤ
とよひとよなせや君をらおらはのは、我はしらねど、
かはをへだて、ねにおりやるく、ハンヤとよひと
よなせや君、おもひたえたにふみをえて、その我々に
思を二度つくすく。

やら戀し

○ハンヤやら戀しなつかしと、春は花見てとりもやす
とりのね聞くもうらめしき。

○ハンヤやらこひしなつかしや、秋になれば、月を見て
とりもやす、鳥のね聞くも恨めしやく。

○ハンヤやら戀しなつかしや、冬にもなれば、雪を見て
とりもやす、とりのね聞けばうらしめや。

○ハンヤたちはならへどももの、ゆはれぬ、津の國の難
波の煙と共に、せにふして、かへるあしたの袖しほる
く。

物おもふ

○ハンヤ物おもふみひとりか、春さく梅も秋さく菊もヒ
ンヨ我がこのほどはいろまさじく、ハンヤ物おもふ我
が身ひとりの我が刀栗田口をもさいつれど、あはで戀
ぢおもひきるな。

つゆのま

○ハンヤつゆのまよたゞなびけ君、つらき心をふりすて
く。ハンヤひかばなびけ君、なるこ繩ハンヤつゆのまよ
ただなびけ、君引かばなびけよ、糸すき、ハンヤ枯
穂になれば、いらぬみを、ハンヤ露の間よたゞなびけ
きみ、空行く月の曇れかし、ハンヤしのぶまつまの、
見えぬ程。

浮ふし

○ハンヤうきふししけき松の葉の散り失せずしておもし
ろや、こひしくば、尋ねてござれ我宿にく、姿はや

かどに松

○ハンヤかどに門松ろぢつ、じ、みつほの八重菊はらり
とさいた、秋風をまつ、ハンヤおもて七けん、うら八
けんの中のまに、千代女のそばに、かたな忘れたれど
も、しのむでたもれ、はなの千代女にやるたまつさは、
こひでこのつ、なさけで七つ、十六のんし。

五くはんをほけ

○ハンヤごくはんをほけにしらかけこ、まどは西窓にし
あかり、こ、でうむせてみだらに人に、六つ布我しか
おちや女は十九布、十九九よみの布おりて、八月さら
して、せひのはよたんたかうやに入そめて、うしろ牡
丹に前は梅、腰にやこひふなこはまぐり肩にりんちよ
鴨の鳥、裾よ柳のうちみだれ。

池の山風流舞歌解（船曳鐵門講）

○ハンヤ肥後の國ヤアラ白がねの門の戸扉をおしひらき
ヤアラミンごとからのごしよかな。

肥後の國の白金の門の扉とは、八代御所の門扉に貼せし銀
の金具どもを持來て此度新造御所の門扉を飾れるを云へる

なり。唐御所とは小野なる唐谷にあるを云へること本文に論ぜるが如くハンヤ、ヤラは拍子に添へたる詞なり。是故に土俗にハンヤ舞とも云へり。

○とほざむらひを見てやれば、うつほ千こし、ゆみ千ちよヤアラみごとのからの御所かな。

遠侍とは侍所を云へるなり。此句以下は武備のよく整へるを稱せる詞なり。

○なかざむらひをみてやれば、かざりたてたるやりが五萬穂五萬穂のやり——のかずさへあらばくま八つ代はこれのごしよかな。

中侍とは寢殿と遠侍との間にあればなり磨き立てたる槍が五萬穂とは所謂菊池槍にて、菊池が始めて製せる大利器なり、此御所にて數多製せられたることは唐谷に接近せる地に鍛冶屋と喚ぶ字あり、今も鐵屑を地底より掘出せることまゝあり、近き頃までは、星野谷に菊池槍多かりし由云へる五萬穂の槍の數さへあらば云々とは此大利器の數さへ不足なくば凶徒を打取らんこと掌中にありて世に名高き要害の球摩八代御所は即ち此の御所なれば、更に彼の肥後の鏡を羨み慕ふべきにあらず、此の新造御所にて不日鎮西一統

の御成功をも奏せられんこと何か疑はんと祝ひ奉れるものと聞ゆ。上に肥後國のこと歌ひ出でたるを見れば、八代御所を稱揚せるが如くに思はん人もあらめど、此球摩八代はこれの御所かなと云ふ句にて、新造御所を祝し奉れるを知るべし。

○みまやのていを見てやれば、かざたてたるめいば七匹の中にたちたる黒の馬せじやうまるれとまへかきぞするく。

御厩の體を打見れば花やかにかざり立てたる名馬が七匹ある中に太く逞ましき黒駒は殊に大將軍宮も御氣色に適ひたる名馬なりと思ひ誇れる狀にて容易に人に見ゆべきものにあらず軼障持來て覆ひ隠してよと前撞をするぞと云へるなり、軼障とは衝立の如きものにて物語書どもにも此の歌詞あるを此社にも傳へたるなるべし。本文に論ぜる如くに前征西宮の御魂を齋き奉れる社なればなりけり。然らずんば何とて由もなき征西宮を祝し奉れる歌舞を奏すべき。此歌舞數十曲あり、最も古雅にて五百年外のものに違ひあらじ。中には後世歌ひ加へたるものもありつと見えて、鄙俚の詞交れども金玉中の瓦礫にて具眼の人一見して知るべし。

3 雜 語

風 流 歌

秋稻の收穫の後、豐熟祈禱の餘興に用ゐらる。

太 鼓 歌

○金神のまします酒に、はやよえて、ヤー錦をはへて、うれしきかなや。いざさらば、この松蔭に立ち居して、風まうて吹く寅の年、神のつけをぞ待ち居たる、神のつけをぞ待ち居たる。

○みわたせば長生れんの木をならべ、年はゆけどもおいせざる門の松、ヤー白とうの鶴と龜とは天上に舞ひ遊ぶ、ヤー此身を守るものみちきたり。

○一天四海なみをうち、治め給へば國も動かぬあら金の、土の車の我等まで、みちせばからん、君のおんみかけの國なれや。

○みよしの、千もとの花の種とりて、ヤーあらし山、あらたなる神や遊ぶぞうれしき。

○おいせぬや、薬の名をも菊の酒、ヤーあらしやあそぶ

此の他吉野山四國船など南山に由緒ある歌曲ども、彼此見えたり、かゝれば歳時の祀典に此の歌舞どもを奏して、神靈を慰め奉れること、誠に深き由緒あればなりけり。此の御所新造の時菊池氏より貢獻せるに因りて令旨を賜ひし、其下案は本文に擧げたる爲め新造賀燕 刀一腰鎧一領鷲眼萬疋到來候畢眞神妙候云々とあるこれなり。かゝる徵證どもあれど、前征西宮の我筑後の城内に御動座ありしは、疑なく正平の始めにて本文に引きたる肥後國正平文書なる筑後宮の御稱號こそ、一定動くまむき千古の明書にはありけん、大袖御所の遺蹟に歌ひ傳へたるは、公卿歌と云ひても數曲あり。今序に一篇を擧げて温故の一端に備へんとす。

○こちの御殿のやのはな見れば、鶴と龜とが舞ひあそぶ。鶴と龜とはなにして遊ぶ、するは繁盛と舞ひ遊ぶエイヤナ。

此歌意調明瞭にて解をまたず、所もこそ多かるに、矢部星野の兩山中に前後征西宮の御在世の時より、歌ひ傳へたる歌謠五百餘年の今日に存せるは、誠に稀世の事にて山民淳厚の風俗嘉尙すべきにこそ。

明治九年六月三十日

奴人丈弊振口

○江戸橋京橋日本橋、日本橋から足揃へ、あとを見返しよし原の、吹きくる風のなつかしや。波も静に品川や、軒端ならぶる神奈川や、こゝならよらしやれお江戸様、お茶もちやんくわいてゐる。江尻のうらの朝ほらけ、晩のとまりは小倉ゆき、あすはするがでおつたてろ。かちでわたるはさつさつ川、かはづなくなら小田原や、その名も高く藤澤の、うるりようみせや菊島、のほれば箱根のおひるぞや。麓に下れば伊豆の國、三島の里の神垣や、……頼むはなさけありがたや、とけてふきだす袋井の、さむる鳴海の花しほり、かたからす其色絞り、買うてくだんせお江戸様。

○花のお江戸はかしまたち、品川大木戸藤の濱、八つ山崎や川崎や、越えて戸塚にとまるなり。あくれば藤澤遊行寺の、お寺は大磯とらが石、少將坂を越えゆけば、鳴立澤や西行の、よにみしあとを打ちすて、小田原うるろさまくゝに、せりふで上る曾我兄弟、宮居で昔思

サー」と「アソソレハイサーソラサノサ」とを交互に唱ふ。(三藩郡)

炭焼又吾

○之は京都の御大納言、くにの娘に玉代というて、ぢたい玉代が不器量な生れ、ひろい都に添ふ夫がない。からみやす明神に、七日七夜の斷食籠り、七日七夜のあたへし(満す)晩に、枕上にて御告げがござる。われが添ふつま九州豊後、ぶんごみね内炭やき又吾、わらでかみゆうた小丈な男。そこで玉代がありがたがりて、内にかへりて金子を取りて、小判五十枚肌にとつけて、あすは日もよし旅立ちせんと、九州豊後と急いで下る。いそぎほどなく九州豊後、柴の戸口をのぞいて見れば、わらで髪ゆうた小丈な男。又吾さんとはおまへの事か。わたしやおまへの妻にてあるぞ。妻に取るこいと易けれど、貧な暮しをさてるからは、米がないから味噌までないが。米がないなら米買うてきやれ。小判一枚又吾に渡す。又吾受け取り米買ひに行く。だんく、いくくゆくのが原に、ゆくの原にて大池小池、

ひ出す、箱根権現これかよと、賽の河原の地藏さん、故郷戀しと塔を組む。えいぐのほる峠越え、下れば三島権現の、道中安息災に、祈りて伊豆の宿々を、振りて富士川船渡り、由井蒲原や田子の浦、三國一の富士の山、沖の白波立田山、こゝを見上げて清願寺、見下す三保の松原を、眺めは月のさすた山、富士淺間を廻りきて、宇津谷の山の遠山宮、鳶の細道たどりゆく、富士へ度々袖をひく、程なく之ぞ大井川、さつさと越して金谷の宿、小夜の中山せい願寺、八町鐘や夜鳴石、道坂こしてヤツシツシ、天龍川を打ちわたり、遠州濱松舞坂より、船拍子そろへて荒磯を、急げば程なく吉田の宿、赤前垂れや、玉襷、贈もるやらお茶を汲む。……池鯉鮒鳴海熱田の宮や、七里の渡り帆をあけて、桑名につけば參宮人、ばはつく中を押し分けて、關の地藏を伏しをがみ、音はきくさや鈴鹿山、瀬田の長橋踏みならし、琵琶湖の海づら八景の、大津の宿につきにけり五十三次残りなし。

池についたるをし鳥一羽、あれを玉代にみやけにせん、をしを見かけに小判をなける。をしはまひたつ小判は沈む。さきに行かれぬあとにぞ歸る。内にかへりて玉代に語る。だんく、ゆくの原に、ゆくの原にて大池小池、池についたるをしどり一羽、をしをみかけにこばんをなける。をしは舞ひ立つ小判は沈む。又吾さんともいはれる人が、あんなたからをしらいですむか。あんな小石がたからであらば、わしが峰内炭やく山は、東御山が赤金の山、西の御山が黒金の山、南御山が白銀の山、北の御山が小判の山よ。四方山をば取りよせまして、まのの長者と仰がれまする。

(朝倉郡)

今 様

今様は筑前の國歌なり。藩時士人の之を朗詠する、黄鐘と盤渉とを分ちて、絲毫も亂れず。人をして平安朝の盛時を追懷せしめたり。今は舊時の如くならざるも、尙流風餘韻の存するものあり。

○皇御國の武士は、如何なる事をか勉むべき、只身に持

てる真心を、君と親とに盡すまで。

○夜須の朝日の彌四郎は、親に孝行つくしつゝ、牛馬にむちをあてざれば、受持ちの田は作りどり。

○酒はのめ飲めのむならば日の本一の此の槍を、飲みとる程に飲むならば、是ぞ眞の黒田武士。

○こまのあたりの瓜作り、瓜を人に取られじと、もる夜あまたになりぬれば、瓜を枕につい寝たり。

○春の彌生のあけほのに、四方の山邊を見渡せば、花盛りかも白雲の、かゝらぬ峰こそなかりけれ。

○花橘もにほふなり、軒のあやめも香るなり、夕ぐれさまの五月雨に、山ほとゝぎす名のるなり。

○秋の初になりぬれば、今年も半は過ぎにけり。わがよふけ行く月影の、傾く見るこそあはれなれ。

○冬の夜寒の朝ほらけ、ちぎりし山路は雪深し。心のあとはつかねども、思ひやるこそあはれなれ。

○峰の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か。駒をひかへて聞く程に、つま音しるき想夫戀。

○花よりあくる三芳野の、春のあけほの見せたらば、唐

土人も高麗人も、大和心になりぬべし。

○園生の梅の追風に、わがすむ山ぞ春めきぬ。門田の雪もむら消えて、若菜つむべくなりけり。

○古き都にきて見れば、あさぢが原とぞ荒れにける。月の光は隈なくて、秋風のみぞ身にはしむ。(福岡市)

吉井冷泉歌

○一つなほれば廣がる噂、(詞)「一方ならぬ神明の御利生厚き黄金湯の、きかぬ病はなき故に、人は日に日に、ヤレコロラ、貴船森。

○二つふしぎの病がなほる。(詞)「夫婦のなかに子がなくば、早ばやごんせ、ふたり連れ」すぐれぬお方も浴る内に、工合吉井の、ヤレコロラ、中村に。

○三つ三つ子のたいどく類や、(詞)「分けてのほり目斬りきづも、不思議の現があるほどに、来て見なさんせ湯の場所は、海と山とを、ヤレコロラ、右左。

○四つよこく(他)に噂がありて、(詞)「深き病の人々は、尋ねきぶねの黄金湯に、入りて癒りて嬉しさに、心浮き嶽、ヤレコロラ、氣はとんほう。

やつちよこ節替歌

筑前の儒者龜井家の塾生が戯作に係るものにして、現今之を唱ふるもの殆んど稀なり。蓋し七八十年前のものならんか。歌は左傳の人物を詠せり。

○晋侯有莘の墟に登り曰く、少長有禮可用也、七百乗、ヤツチヨコ、けんしんおいはん鞞鞞靴靴ぢや。

○衛の野人に食を乞ふ。重耳、天の賜と載せて戴く塊を、ヤツチヨコ、ちゆうじ鼻犯ぢや。

○吾が墓には櫛を樹るよ。櫛の木、櫛の木太ると國の亡ぶる、一時ぢや。ヤツチヨコ、かのみ忠臣ぢや。(伍子胥)

○武夫が力めて原に拘へ婦人、婦人暫にして國に免すと唾はく。ヤツチヨコ、ふじん軍實墜いた。(先軫)

○鎧ぬぎすて註をする、左傳。帥やめても武斷心はまだやまぬ。ヤツチヨコ、かざり傳癖ぢや。(杜豫)

○是は左傳の作り替へ、歌の、歌の文句は七つ讀せにや解りやせぬ、ヤツチヨコ、な解りやせぬ。

えんとこ節替歌

○彼の山に髻髻乎たるは、月か星か螢か。月ならば

○五つ妹脊の仲睦しう、(詞)「親子まめにと思ふなら、保養にごんせ中村に、めでたき黄金の湯をかかり、命長きが、ヤレコロラ、怡土の濱。

○六つ昔の言ひ習はせと、(詞)「今度夢想のわりふ故、堀り出したる黄金湯は、其名も高き浮嶽の、麓の吉井、ヤレコロラ、中村に。

○七つ泣くく来る病人も、(詞)「風呂は打たせや湯壺にて、つめて入りあひ居る時は、如何に難儀をする人も、やがて笑顔の、ヤレコロラ、吉井村。

○八つ宿も新たに出来て、(詞)「旅籠木賃はお氣まかせ、それでお金がきぶねもり、黄金花さく山吹の、色をふき出す、ヤレコロラ、其の湯に。

○九つ苔をおこして見れば、(詞)「下はか々やく黄金石、吹き出す其湯は萬病の、なほる病のかずかすは、怡土の濱邊の、ヤレコロラ、砂の敷。

○十尊き我が日の本の、(詞)「榮え治まるしるしには、こゝに噴き出す黄金湯の、汲めども盡きぬ幸ひを、分けて貰ひに、ヤレコロラ、木船森。(糸島郡)

拜しませうか。螢火ならば、掌とこ焉たり焉たり焉。

姉さんまちまち替歌

○足下に待す待す蚊帳外、蚊に食せられ、五更の鐘の報ずるまで、僕不關焉。

○足下と知らずに閉戸した。憐すべし屋露點々身を汚す、余不知矣。(福岡市)

博多節

○オツキササガチヨイトデテ、マツノカゲ、ハイコンバンハ——、博——多——帯——し——め——筑前——絞——り、筑前博多の帯締めて、歩——む——すが——た——は——柳——ヤレドツコイシヨゴ——し——、オツツキササガチヨイトデテ、マツノカゲ、ハイコンバンハ——(福岡市)

○百萬石の合知行とりより、あなたのそばで赤い襷をちよいとかけて、合手鍋さけてもいとやせぬ。會ひたさに見たさに來たわいな、オヤ今晚は。

酒は飲むべし、飲むなれば、日の本一の此槍を、のみとる程にのむなれば、是ぞ誠の黒田武士。(福岡市)

○來いと云ひなさりや私や何所までも、蝦夷や千島の果までも。

○梅と櫻と兩手に持てば、どちが姉やら妹やら。

○わしが友達や去年までア島田、今年や鬚結て花嫁女。

○摺鉢伏せて眺むりや三國一の、味噌を駿河の富士の山。

○私ごと、さんな川舟船頭、嗚や寒かる川風で。

(遠賀郡)

○電信にとまる雀はありやふた心、あちらこちらの噂聞

く。

○一夜くが度重ならば、切るに切れぬ壺柳。

○戀のやみやすりや親達や知らぬ、薬飲めとは親心。

○思うちやるれども、まだ親がかり、親が許さにや籠の鳥。

○命がけならわしや行きはせぬ、命あつての戀ぢやもの。

○あれ見やしやんせあの子の寝顔、様とわたした瓜二つ。

○盃洗の中にうつりし其盃は、どなたが水あけなさるや

ら。

○朝咲いて、晩にしほる、身を持ちながら、垣にもたれて思案顔。

○所詮によんほにや持ちやなさるまい、せめて御側の下女なりと。

○勘當されても世界は廣い、ころびや助くる人もある。

○お前さんから何よ云はれても、水に浮草根にや持たぬ。

○山は焼けても山鳥や立たぬ、子程かわゆきものはない。

○野ともなすまい山ともすまい、あとは似合の妻ござる。

○七ころび、八起き世界に何くよくくと、枯木に花咲く節もある。

○思ひ切れとは死ねとの事よ、死ねりや野原の土となる。

○泣くな嘆くな浮世は車、命長けりや廻り逢ふ。

○男持つなら片目を持ちやれ、覗き見る時や手が要らぬ。

○石の五徳に破れ鍋かけて、様と暮しがして見たい。

○惚れられて、待つも辛かる辛抱なされ、惚れた私が身のつらさ。

○わしが思ふにやあの山のけて、様の出入が見とござる。

○千兩持ちより一文無し、思ふ殿御と添ふがよい。

○三井寺の、釣鐘下して雞寝せて、様と話がして見たい。

○新築通るなら眞中通れ、兩はしや狐の穴ばかり。

(三井郡)

○破れ袴に破れた羽織、心錦の書生さん。

○書生可愛や海山越えて、花の三月は旅の空。

○古郷戀しや我が故郷の、柴の庵がなつかしや。

(筑上郡)

○お月様さよ黒雲次第、わしは二人の親次第。

○秋は夜長し、ござる様遅し、明かし兼ねたる今宵かな。

○お江戸通ひの殿御を持てば、結びや解けるよな帯もろた。

○たとひ傘柄もりはしても、殿御一人は濡らしやせぬ。

○風は西風、思ふ様東、風の便りに文をやる。

○去年七月うら盆までは、様の涼しい蚊帳にゐた。

○心やさしや螢の蟲は、人目忍ぶに火を照す。

○そよりくと吹き來る風は、様の便りがなつかしや。

4 童 謠

手鞠唄

○ひでふで、みでよで、いつもで、姉さん友がないなら、お休みなされ、友は丹波の吉次郎様よ、吉が土産に何々貰うた、一に簪、二に挿櫛よ、こゝで流行らんお江戸で流行る、お江戸新町、新五郎さんの宅で、庭ぢや餅搗く座敷ぢや碁打つ、中の座敷ぢや二挺三味線、引立てく、さつさごべく、ごべが娘は六兵衛が貰うた、七兵衛が媒酌、八兵衛がお容、九兵衛十兵衛が取る、さつさごべく。

○一の木二の木三の木、ごえ松柳、柳の上に、鶯がとまつて、鴉もとまつて、鴉の首がねぢれて落て、お寺に申さう、お寺はかちく、奥様お駕籠、お駕籠の下に、喧嘩がでて、槍もて来い、棒もて来い、棒のさきやすつほんほん、槍の先やすつほんほん。

○田螺殿、愛宕詣りはなさらぬか、可憐で候、去年の春

しない。

遊 戯 唄

○向ふの山にお茶摘む女郎が、十七八の嫁盛りく、彼方から貰ひ、此方からもらひ、貰うた帯が十三七ツ、一筋もろて皆戻すく。

(二人にて手を合せ或は打つて拍子を取つて唄ふもの)

○手つんなんがう、つんなんがう、博多の濱までつんなんがう。

○盆来りや嬉し、正月来りや嬉し、嬉しの花は何處に咲くく、山にも咲かにな、川にも咲かぬ、石山寺の門に咲くく。

○一にや橘、二にや杜若、三にや下り藤、四にや獅子牡丹な、五ついやまの千本櫻な、六つ紫鹿の子の散しな、七つ南天、八つ山吹な、九つ小梅な、十で殿御さんは御馬にお乗りんか、御駕籠にお乗りんか。(遠賀郡)

○あのひたア馬鹿だい、瓢箪だい、生豆腐などうふのすひもんだい。

谷で懲りました、泥鎗殿から誘はれて、しよろく川を渡る時、鳶と鴉と梟奴と、あちらへ蹴ころばからかしてかいこづく、其疵が四せち四土用冬来れば、つくりづゝくりくくと、うづきます、何か薬は御座らぬか、薬は色々あるけれど、先づ一番の妙薬は、海のもの、この勝栗と、山の峠の法螺貝と、それを練り交ぜ用ひれば、く、功能一時にあらはれるく。

(久留米市)

子 守 唄

○寝んねエなされ、こんちやんなされ、朝の六つから起きなされ、よいよう。(糟屋郡)

○ごりよん聞けく、旦那ども聞けよ、守を非道すりや子に當る。(三井郡)

○ねんねこく、寝んねこよ、ねんねが守は何所へ行く、あの山越えて里へ往く椎の山通れば、椎がばらりくよ、栗の山通れば、栗がばらりくよ、勝栗一つ拾うて、勝栗カンと噛み割つて、片つらは蟲食らひ、蟲食ひは誰さんに、よか、た某さんに、それ持つてねんね

○泣くもんなあ口やかう、あかりやかから、口やかう。

○坊主ほつくり、山芋、煮ても、焼いても食はれん。

○頭百斤、尻五斤。

○お山の人形で振り上げたばかり、く。

○こゝまできらん薬人形、薬で造つた生人形。(筑紫郡)

二 大分縣

1 祝 賀 歌

萬 歳 樂

○一々億々彌勒の出世、三夜の暁、濱のまさごが峯に登りて、大磐石岩をかたい故郷、やはねをや寶の君千代迄、千秋萬歳とほめたてまつる。白ぎがたろー五萬の城しいの山をおし頂き、伏し拜んで候も誠に目出たう候ひける。春景は面白や。年の始めの年男、ゆづり葉をくはへて、五葉の松を手持つて、らいしやーは太刀を佩いて、がくやのはちゝみの刀を腰にさいて、さて南殿についたつて、源氏が門を推し開き、おし拜

んで候も、誠に目出たう候ひける。法華經は一部八卷二十八法文字の並びは、六萬九千三百八十餘字が中にも、さてこそ御祝、殿の御屋敷をほめ奉つて、御祝には萬歳くくくくくく樂よと、舞つたる其舞なる。昔は後白川法皇の御時、座上や宰相大臣、春日の社に集り給ひて、萬歳だぶりかぶりなされて、何ん前殿カでが小坪につるくつ、立ち給へば、是れ又目出たし。(萬歳)扱又浮世の實を申せば、一には御命、二に又福徳、三には幸ひ、世に又御繁昌の實は、金銀ぜにかね、田地田畑、御武家の實は、武具馬具弓矢に鐵砲、御百姓の實は田畑牛馬などよ。(萬歳)馬ではどこ馬、日向や薩摩の名馬が、あき方のかたより耳をば振り立て、鼻をばいからし、ひんくひんと御座れば、猶又目出たし。(萬歳)牛では何處牛、五島か平戸の名牛、角をばふりたて、もんくもんくと御座れば、又々目出たし。(萬歳)一家の實は祖父こそ實よ、祖母こそ實よ、父こそ實よ、母こそ實よ、坊こそ實よ、嬢こそ實よ、孫こそ實よ。一番かはい、か、こそ實よ。其歳御家に

難なくひがなく、恙つがなければ、猶また目出たし。(萬歳)さきではどこくくく、頭でははけさき、羽織でぶつさき、刀できつさき、御槍の穂のさき、國で申せば肥前の長崎、豊後の鶴崎、薩摩ではけさき、高田のまつさき、鋤さき蹴さき、御家の坪さき庭さき。野菜にとつては大根に人蔘、牛蒡にわけぎにちもとに蒟蒻、おりが様なほほんのほうぶら壽命の長いが、お萬にお千に太郎(のちが)か、次郎ぐか、番尻のおりがか、なんどがようこれや、をかしや。尻をばからけて、山田も迫田もちよほちよほちよほりと植ゑたる、其の田の實入りのよいこと、一町で一萬、二町で二萬の、秋上げなざる、大福長者と、諸人に仰がれ、鶴は千年、龜は萬年、祝うて早稻植ゑ、やれやれ目出たし、今年の稻はやへ穂が八石、むけ四郎どん、もーよかろ權平どん、もーいーかや、日よりやいー手は揃ふなり、五丁八反六畝六歩、おまんがまつほり迄、ちよほちよほ植ゑて仕舞うた。(下毛郡)

2 舞踊歌

盆踊唄

○こひぢは京の柳町、よしある人の娘子に、おかねさんとて十五歳、まだ振袖のまるびたい、今度は信濃のおあしがる、かみさき氏の彌右衛門のひとり息子に、あさの助ふりよな飛脚があたり來て、登らにやならぬ其の時に、夕立雨に降りこまれ、おかねが茶屋に宿を取る、一夜の宿が縁となり、夜もほのほのとあけぬれば、あささんお立ちか、なさけなや、おかね變るなかはるまじ、かはるまじとのせい文は、小指を切りて血をしほる、血判を押して取かはす。(直入郡)

○先の大夫さんな京都な江戸な。ヤレシヨ、江戸ぢや見なれぬ、京都ではない。ハーヤソレサ。
○猿丸大夫は、ヨツシヨイ、奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の、サヨイヨイヨイヨイヨイヨナ、サトツチン、チンリン、トツチン、チンリン、さるまる大夫は、チリン、奥山の紅葉ふみわけ鳴く鹿の、アラヨイ……

：ヨイヤナ。

○東山からさえ出づる月は、ヤレサンサ、車の火の如し。東山からくくくさえでる月は、アーヤレサンサク、車のわの如く。コチャく、みるがほんくるまの、サンササンサ、くるまのわの如く。

○エーへーわしはさいきのざるほーせがれ、ざるはほけざる、さかなはくされ、ヨヤヨイ、ざるはほけざる、さかなはくされ、エへー、ざるはほけざる、さかなはくされ、へー、ざるはほけざる、さかなはくされ。ハーヨイトマカセノヨヤヨイ。

○あねのみやきぬ、妹のしのぶ、中に立ちたる志賀團七。サマヨイサノサ、ヨヤサノサ。

○うすにな、ドツコイ、おこめをいーれ、サマヨヤサノヨイく、ごーしりーな、ドツコイ、からざが、サマヨヤサノヨイく、こーざれゆくえー。

○さまよーあれ見よ御嶽に、ヨイトナーク、みかん賣子があさま火をまとほす。ヤソソレヤソソレサ。

○あれせにやならぬ。せにやならぬ、ヨイく、一つの

のこのせんたくを。ソレ／＼、ヤートヤンソレサ。

○はやのかんべが、し、打ちにや、みのきてかさきてつほを持ち、一谷越ゆれどし、や居らぬ、二谷越ゆれどし、や居らぬ、三國峠といふ峠、あれに見ゆるはししかいな。はやごかへして二つ玉、二つ玉にて打ち止めな。火なほの火をふり、いで見れば、し、と思へば旅の客、きつけはないかとふところを、さぐりあてたるしまさいふ、金なら凡そ四五十兩、死したるそちはいらぬ金、はたはなければならぬ金、かしてなアラクれいとの、ヤレたんで一をさめ。キニヤ／＼、ヤートこそナンデモセー。

○さどーで弓ひきや白杵がもとよ。白杵もとなら「さいき」がうらよ。

○イヤ大夫さんちよとめた。ソレ西行法師のほんさんが、四國西國廻るとき、豆腐の四角につつまづき、こんにやく小骨を足にたて、れんぎでほれどもほれはせず、杓子でこぬれどまだぬけぬ。いろ／＼お醫者いしやにかけたれど、薬のきゝめのなきために、山で取つた貝が

邊の煙となりぬれば、七日七日が七七日、三十五日も打ち過ぎて、四十九日にあたる日は、あすは花園寺まゐり、寺のごえんに腰をかけ、つく／＼と花をながむれば、開けし花は散りもせて、つほみの花の散るを見て、若しや我子もあのとほり、吾子がかはいと思ふなら、地藏ほさつを念すべし。(宇佐郡)

米屋一米 (六拍子)

○國は筑前博多の町に、米屋一米と云ふ町人は、もとは米屋で威勢な暮し、今は世に落ち哀れな事よ。ここに不思議なお六部様よ。そこで六部が申せし事にや、若し此の家の御亭主様よ。今宵一夜の宿かしたもれ。そこで一米が申せし事にや、宿を貸すのはいとやすけれど、ごだりませんよお六部様よ。そこで六部が申せし事にや、亭主悔むな浮世は車、命長くば福にも出逢ふ。負ひのけだんを早取り出で、數多小判を早抽き出でて、米がないなら米買うてござれ。味噌が無いなら味噌買てござれ。今宵一夜は長者の暮し、明けの朝にと早なりぬれば、知らん顔して夫婦の者が、そこで六部

らと、磯邊でとつた松むしと、氷のくろやきとかきまぜて、馬の角にて、エヘンヘン、ますれや、ハリヤリヤコリヤアレイワイセー。(直入郡)

念佛和贊 (鹿ヶ谷)

極樂淨土

○極樂淨土に願かけて、助け給へや彌陀如來。

人間和贊

○人間僅か五十年、朝咲く花のあさがほの、露の命を持つ程に、一時の後生を願ふべし。

天竺和贊

○是より空の天竺の、彌陀釋迦川と申せしに、ぐぜいの舟をうかしたて、舟は白銀ろは黄金六字の名號みやごうに帆をまいて、觀音勢至がちをとり、地藏ほさつがせんとして、西へ西へと急がる。

花田和贊

○そも／＼都のかたはらに、るる子と申せし女人あり。世繼に男子を設けしが、無情の風にさそはれて、時もまたすしやばを立つ。死すれば野原におくりすて、野

が申せし事にや、一米そなたに寶をやるが、寶やるのは外ではないが、寶やるのは打出の小槌、米がないなら米ぢやと打たれ、錢がないなら錢ぢやと打たれ。そこで一米が申せし事にや、六部六部はままだけれど、こんな六部は今度が始め、そこで六部が申せし事にや、私を唯なる六部と見たか。私は唯なる六部ぢやないぞ。私は高野の弘法大師、いうて六部は消えうせました。一米口説は先づこれ迄よ。(宇佐郡)

唐芋踊

○これから暫く唐芋やろよ。(囃)「サノサー」。うらべの唐芋いむ(囃)唐芋いむ踊らうえ。(囃)浦邊の唐芋踊や、踊る片手に稗餅いかりこぶる。こぶる稗餅や蟻が運ぶ。餅も運べば踊も運ぶ、踊も大分運うだ。(宇佐郡)

まつかせ踊

○まかせー、ヨーマかせをー、しばらくーやらうなー、ソレマツカセ／＼、まかせまかせを、ソレヤ、しばらくーやらうなー。ヤートハリハリ、ヤーノエーエー。

○こひしーこがはーの、うの鳥ゆー見やれ、ハソレマツ
カセマカセ、あゆをくはへて、ソーリヤ、ヤーレ、せ
ーをのーほる。ヤートハリハリ、ヤーノエーエー。

(宇佐郡)

○エー、どなたも、ヨイく、まつかせをやらうな。ド
ツコイく、いやさやらねば、ノヤー、夜が明ける。
ヤートハリく、ヤヤノエー。

○今夜行くぞと、ヨイく、目で知らすれば、ドツコイ
く、竹にやつぎほで、ノヤー、木がつかぬ。ヤート
ハリく、ヤヤノエー。(西國東郡)

れそ踊

○れそを踊るならしなく踊れ。サヨイヨイ、れそは、
ウンドスコイドスコイ、踊りよい品がよい。レソーヤ、
レソーヤト、ヤンソレサ。

○中津こいの丸米屋のおやへ、サヨイヨイ、廣津、ドス
コイドスコイ、小川に身をはむる。レソーヤ、レソー
ヤト、ヤンソレサ。

○私とお前は道ばた小梅、サヨイヨイ、ならぬ、ドスコ

(速見郡)

やんそれさ

○(音頭)イヤサ、是からやんそれさをやるではないか。
(囃)「オトシヨイく。」「アーそぢやく、やるではな
いか。アーヤン、ソレー、ヤンソレサ。(西國東郡)

さんごや

○(音頭)エー、さんごーや、四十目の相撲取様を見や
れや。(囃)アラドスコイく。(西國東郡)

相撲取踊

○(音頭)エー、豆腐の口説をやるなれば、私程因果な者
はない。(囃)「オイく、」九丁の箱にぞつめられて、
上から重石かけられて、一丁二丁と切り賣られ。友達
ないかと尋ねれば、「オイく、」友等お花とあるけれ
ど、一文二文のつかみ賣り、「オイく、」親はないか
と尋ねれば、親は野山のエー豆の木よー。オシヨカ、
シヨカ、シヨイ。(西國東郡)

それ踊

○これーかーら、しばらくー、それーを踊らう。(囃)

イドスコイ、さきから人がしる。レソーヤ、レソーヤ
ト、ヤンソレサ。(宇佐郡)

○(音頭)イヤサ、皆さん踊ろぢやないか。コラサノサ
(囃)「アー、ヨイトコ、ドツコイ、」「アーそぢやな、踊ろ
ぢやないか。ソーレーソーレーヤートヤンソレサ。
(西國東郡)

六調子

○(音頭)ヨー、輪にやなれ。片輪にや、(囃)「ヨーヤナ、
ヨヤナー、」片輪にやなるな。アーシヨイく。
(西國東郡)

三拍子

○(音頭)エー、かところ餅受取りました。(囃)「ヨヤセ
く。」「アー、そぢやく。」ソーラヨイヤ。
(西國東郡)

○よんべ山がのをどりを見たら、おほこかたけて鎌腰さ
いて、踊るかた手に稗餅こぶる、こぶる稗餅ばらく
あゆる。あゆるそばからいやりが運ぶ。運ぶいやりは
達者ないやり、いやりやなにする雪の下の覺悟。

ソレーヤ、ソレーヤ、ヤトヤー、ヤトヤー。

○それをの、踊るなら品よく踊れ、品のよいのを一嫁
にとらうよ。(囃同上)「入れ子」一寸私わたしが一番入れま
せうか。(囃)「入れませうか、」私の隣の其隣、(囃)「其
隣」(凡て唯には移の)一軒隣の其の側に、やんそれ坊主が
あつたけな。やんそれ坊主は荒坊主、米の飯を七しよ
うけ、粟の飯を七しようけ、小麦の餅を七しようけ、
残さず餘さずやりつけた。それでも足らぬと云ひまし
て、八反畑の大根を根ながら、葉ながら喰つてしもた。
鹽氣がほしいと云ふ時は、尾永井の鹽を十五駄ごん、豪家
の鹽を十五駄、水がのみたいと云ふ時は彌々やま(山毛)の
御許につんばつて、乙女の浦を飲み干した。(それ節)
これーも七ーつーの、入れ子の内よ。(囃)ソレーヤ
く、ヤトヤーヤトヤー、わたーしの入れ子ーは、
これーでーおーしまーひ、(囃同前)、そろうたくくよ踊
子がそろうた。(囃)誰れか音頭を頼む。(囃)私の音頭
はこれかぎり。(囃) (宇佐郡)

いろは口説

○國を申さば日向の國の、古傑和尚の作りしくどき、四十八字のいろはのくどき、いとけなきをば愛して通せ。老は敬へ無禮をするな。腹がたつとも過言をいふな。にくみうくるも我心から、ほめてもらふも自慢をするな。隔てなきをもゑんりよな思へ。隣り近所に不忠をするな。近い中にも亦かきをいよ。理屈あるともみなまぢや云ふな。主によつては大事がござる。るらうも流浪のをも愛して通せ。親につねく不孝をするな。若い時分のその道々は、家事大事と心にかけてよよしもありきも人事いふな。例へたかきも又卑しきも、禮儀正しく此の世を渡れ。粗略のものぢやといはれぬやうに、常の身持が大事ぢやほどに、ねてもさめてもたゞ正直に、なにがないとて世を恨むるな。樂なくらしはどこでもないぞ。むくい／＼でひんぶくをする。恨みかひなく此の世を渡れ。今のなんぎを思は、此に、後の世はまたうとくにくらす、終りはこねば我身はしれぬ。苦勞する身が富貴の本よ。役をするなら正當にさばけ。まなこかすめてどんよくすれば、け人な地獄で此世で

おつる。ふしやうふらちのそのあるときは、こゝに一つの恨みがござる。榮耀えいぎょうする身が貧する本よ。手前よいとて人事いふな。あしきことをば眞似にもするな。酒を飲むなら内ばでのみやれ。聞いて樂しめ世界のことを。油斷するのがおちどの本よ。めつたむしやうに我欲をすれば、身をばほろほす人ほろほすよ。眞の心を此世でとれば、榮耀えいぎょうい花は冥土へござる。日頃心をつくして見れば、ものをいはねば口おほども、世界しらねば此世を知らざる奴よ。すいたことをば尋ねて習へ、京も田舎もみなおしなべて、上下貴賤のへだてをするな。いちに神明諸佛を守れ。二世の旅出に赴くならば、三世諸佛の誓をうけて、死出の山路を赴くよりも、五字の如來の悟りをうけて、六字如來の悟をひらけ、しちくじやうぐわん極樂世界、はつくとしのじよけいのみちも、九ほん淨土におめぐりありて、十方世界を難なく通れ。千秋萬歲せんしゅうばんざい。(西國東郡)

二つ拍子

○(音頭)昔京都が奈良なる時にや、(踊子)サノサイ、サ

ノサイ、(頭)太政大臣鎌足公よね。ヤーンソレソレ、ヤンソレサ。(頭)蘇我の大臣蝦夷と御坐る。(子)サノサイ、サノサイ、(頭)御名を貰ひしけんじよう太郎、(子)ヤーンソレ、ヤンソレサ、(頭)今の假名はしば六さんと、(子)サイサイ、サノサイ、(頭)それが女房にやおきじというて。(子)ヤーンソレソレ、ヤンソレナ。(以下反復するなり) (西國東郡)

六調子

○(頭)國は奥州巴の橋で、(子)サノヨイ、サノヨイ、(頭)敵打ちたる由來を聞くに、(子)ヨイソーリヤ、ヨヤヨイ、(頭)頃はかんほー四年の事よ。(子)サノヨイ、サノヨイ、(頭)南部殿様御家中に於て、(子)ヨイソーリヤ、ヨヤヨイ。(以下反復) (西國東郡)

しんめい口説

○一つしんめい矢口の渡し、二つふなよのとんべるこそは、三つみのせの六郎殿よ、四つよしみねうてなをつれて、あちらこちらとかたきの中を、五つ稻荷の社の中に、入れてかこまふ道念坊主、六つ娘のお舟がこ、

ろ、七つ難なく我君様よ、八つ矢口の渡しにむかへ、九つ此の川そこに、沈みたまひし兄義興と、十よ頓生菩提のために。(西國東郡)

みつほし踊

○肥後の熊本、ソーリヤヨイヨ、なんごの手永、ヨイヤセ、小村申さばソーリヤヨイヨ、杉山村にや、ヨイヤセ、つかさ千石、ソーリヤヨイヨ、庄屋がござる。ヨイヤセ。庄屋其か名を、ソーリヤヨイヨ語るぞならば、ヨイヤセ、伊兵衛惣助、ソーリヤヨイヨ、はんのじゆ殿と、ヨイヤセ、小供ばかりが、ソーリヤヨイヨ、兄弟ござる。ヨイヤセ、して又、ソーリヤヨイヨ、うとくにやくらす。ヨイヤセ。(西國東郡)

牛若丸

○一で白木の御舟作り、二では錦の帆をまき揚げて、三でさづなを手繩にとりて、四では島々早乗り行きて、五では五畿内攝津が浦よ、六で艦舵を一度に揃へ、七で白木の御帆柱よ、八で箱根の權現様よ、九では鞍馬

のゑい山のこと、奥州日の本常盤が前にや、小供ばかりが三人ござる。兄の今若中乙若で、弟牛若年六歳で、明けて七歳鞍馬にや登る。鞍馬登りて権現様にや。申し聞かんせ権現様よ。父の敵が討ちたい程にや、弓矢劍術軍の道を、教へ下ぬせ権現様よ。(下略)

(西國東郡)

庭借歌

○東西南北静まり給へ。抑も今晚の踊りといはば、先達亡者へ手向の爲、世を去りて、めいどの旅に趣けば、佛果成佛うたがひは無けれども、昔佛ほたいせの其時に、目蓮尊者のおん母君へ、長く無限の苦を受け給ひしが、目蓮尊者の供養に依つて、天上の果を得給ひしと聞く。賤山がつの吾々が、目蓮尊者の古禮を念じ、珍しからぬ、ばんば踊、一踊をどらばと存じ候。御庭の御所望、如何く。(速見郡)

同返歌

○こは事がましき。御仰せにや及ぶべき。誠にしゃばの縁早や盡きて、めい土の旅に赴けば、佛果成佛疑ひは

願はんせ。なむあみだ。十とや、西はさいはうみだの國、皆さん後生を願はんせ。なむあみだ。十一とや、西方淨土に赴けば。皆さん後生を願はんせ。なむあみだ。(速見郡)

やすなくぞき

○あしや道満大内鑑、やすな葛の葉やかなの身なら、悪衛門から身は狩り出され、やすなさんから身は助けられ、ご恩送りに女房となりて、まるく添うたが十年あまり、あひにどう次と云ふ子が出来た。頃は三月上旬頃に、花見頃ぢやと皆さんまるる。花に心のうつりし折りに、子から姿を見とられました。どうで此の屋に居る事出来ん。早くしのだに歸らにやならん。戀しがるなら尋ねてござれ。ぬしは篠田の森に住む。障子裏にかき置きなざる。之がくぞきの流しでござる。

(北海郡)

比丘尼くぞき

○肥後の熊本竹田の城下、竹田本町山寺ござる、寺和尚さんにや比丘尼でござる。比丘尼あたまを丸髻結う

無けれども、なき跡の弔ひとして、御踊り催すこと、庭むしは見苦しくは存じ候者、何より安き所望かな。早々庭に渡り候へ。(速見郡)

後生歌

○一つとや、一度は死なねばならぬぞえ。皆さん後生を願はんせ。なむあみだ。二つとや、二たび歸らぬこのしやばに、皆さん後生を願はんせ。なむあみだ。三つとや、未來の土産に御念佛、皆さん後生を願はんせ。なむあみだ。四つとや、えうじやもきじんも御念佛、皆さん後生を願はんせ。なむあみだ。五つとや、何時まで此の世にをりとも、佛になりたけや御念佛、皆さん後生を願はんせ。なむあみだ。六つとや、よ人が無理をいふとても、佛になりたけや御念佛、皆さん後生を願はんせ。なむあみだ。七つとや、何ほど此の世にをりとも、一度は死なねばならぬぞへ。皆さん後生を願はんせ。なむあみだ。八つとや、容赦はないぞへ御念佛、皆さん後生を願はんせ。なむあみだ。九つとや、之ほど尊い御念佛。皆さん後生を

て、銀の簪持たんきささん。植ゑん茄子が千本ござる。茄子を手なしが腕ぎとりました。目くらさんから、それみつけれ、いざりさんから追ひつけられた。之がくぞきの流しでござる。(北海郡)

豊後踊

○今まで待ちだが、雨故か、時雨故か、入ろや、いざいとらや、いのいぐち後なる若衆と、急いでござれ、白菅笠に、露が立つ、皆一様に、お習ひあひて踊りて、振りて、御目かけよ、田舎ならひが、面白い、笠のほひが戀となる、豊後の踊は一をどり。○笠の下から、一目見た、一目見たさへ、面白い、ヒンヤ肌そうたら、しゆみませうかく、豊後の踊は一をどり。

○西が曇れば、雨となる、深山時雨は水となる、豊後の踊りは一をどり。

3 雑 謠

ちりりん節 (一名きじのめんどり)

○雉子のめんどりや躑躅がもとので、妻よ戀ひしとほろ、うつ。(唯)よこ町まち權太かたちんば、それでもせきだは十五足。チリリン、サトチリリン。(玖珠郡)

都地節

○朽網名物あみだが池に、小かきつばたに、ふきねせり、椎茸つゝじに、しやくなんけ、山の城ではねば柳、一目に見おろす蕎麥の花、嵯峨の天皇御陵の、さつぱりおされぬ菊桐の、花の都ぢやないかいな。

○ほらの肴で飲むさゝは、都ではやる保命酒、鶴のむすんだまさごえん、むすんでとけぬ夫婦縁、こんれいさかつきは松に鶴。

○正月の二日の夜の初夢に、白い鼠が三つづれに、又三つづれに六つづれに、小判くはへてかねはこぶ。

○四海浪風治まる御代は、心しづめて身ををさむれば、國もをさまるときつかぜ。

○縁の初めは出雲の社、年は三五のみだれ髪、そよとふきくる神風は、それはまたどーした縁ぢやいな。

○春永絲のいかのほり、落つる處が住處なり。りやうの

ば、どーであなたがよいわいな。

○さてもみごとなまへだけつゝじ、枝えだはゆかわじ、葉は市村に、花は竹田のぬめりせに。

○田舎ものぢやとおなぶりやするな。藪に花さく田舎も名所、ところ相應の花もさく。

○今夜こなたのお取持ちは、金のしまだい黄金こがねの銚子、下さる御酒は保命酒。

○貫ひうけたる花嫁様は、そーそにしませぬ大事にします。氣づかひなさるな親御様。

○あなた御近處お隣さうな。梅のわか木をうゑおきました。萬事よろしく頼みます。

○臺のまはりから菊うゑて、それに花さき實のなるまでは、たがひにこゝろをかはすまい。

○梅の若木を植ゑおくからは。もしも若木でちりゆくならば、おさへて下され八重ざくら。

○千秋萬歳思ふこと叶うた。末は鶴龜五葉松。

○いとしかはいと育てた娘、こよひこなたに下さるからは、さぞや御里は淋しからう。

親様大切に、つれそふ人はなほ大事、お村のお若い衆とこほふーたのみます。(直入郡)

よいやな節

○朽網名物七里田の湯、かまちゆまくらに前だけながめ、花の七里田ぢやないかいな。ヨイヤナ。

○蝶てつや花やとそだてたむすめ、こよひあなたにあけますからは、萬事よろしくたのみます。

○蝶や花やとそだてたむすめ、そめてあけます今むらさきに、かはらぬやうにたのみます。

○君のもたしやるきせるのふくろ、うらはもみ、おもてはこいちゃ、見ればこひます思ひます。

○花になりたや梅の花に、あなた御庭にうゑたてられて、散りて御袖にまかりたい。

○あなたのくろかみ一もとほしや。紙につゝんでわがみにそへて、此の世だいしよのまもりがみ。

○わしは谷川そこいくしみづ、うへにやみえねどながれはつよい。わしの心をくんで知れ。

○宮の拜殿腰うちかけて、たばこすひつけかんじて見れ

○さても見事な祖母山つゝじ、花は南郷に、葉は熊本に、枝は野しりの川上に。

○君は御嶽の白雪さまよ。わしはそのすそ流の水よ。とけてきなされ流れ合ふ。

○君はきれいなきん裡の牡丹、わしは野菊でおよびはないが、垣かきごしながめて日をくらす。

○思ひまするぞ、あなたのことを、山で木の數、かやの數、千里が濱の砂の數。

○砂の數とは愚な事よ。てんぢやてんてんにんじんまたほしのかず、地では世界の人の數。

○人の數とは愚なことよ。妾が思ふは世界の田のかむかむ、稻穂の數思ふ。

○わしは奥山こくぶの梅よ。またはわきでこくばる斗り、花さく春をまたしやんせ。

○思ひそめ川渡らにやならぬ。深い浅いの瀬をふみわけて渡りかゝりてもあんじ。(直入郡)

白熊歌

宮の立

○鶴がをかでの、し、ん殿、あまたかぶとのあるなかで
どれ義貞のかぶとやら、かほよが、目き、ではないか
いな。ヨイサヨイサコリヤマタドースルナ。國はどこ
ぢやと、こまかに聞けば。

後日本宮の立

○御先おともで、かへります。二番のやつこが、もんで
んの、かみをいさめて、かへります。
○音に名高きはまの宮、御出御歸りゆるくと、御供申
す真物は、作るこう作はく迄末の末迄繁昌に、守り下
さる有難や。

門口の立

○柳ばの流の末はいづくとも、まつもつきせぬ思ひなり。
品川近くのおきつさん、花の都は、お江戸ぞえ。
○宵の管絃くわんげんの笛ふえのとき、のちにぞあれし浅言葉、今生後
生の形見かえ、來世では又末長う。
○なみだにひたす袖そでの海、引くしほ時とひくいきは、知
し死期と見えてたえはてる。熊谷さんはばうぜんと、ど
ちらを見てもつほみかえ、花の都の春よりも、今玉し

か天降る。

○ひなに降りて無きあとを、とふ人もなき須磨すまの浦、な
みくならぬ人々の、なりはつる身のいたはしや。

○ひたんの涙にけれけるが、ぜひもなくく玉織たまおりが、お
んしがいをも取りをさめ、こまをいさめて歸ります。

○か、みな月とゆふだちは、はりまをここに松のかけ、
向うよりくる、小提灯、あれは昔のゆみはりで、やか
ち先さんならまちなされ、ともしび、消さじぬらさじ
とかつばのすそに、おく雨か、しのぎで走る夜の道、
勘平立ち寄り火を一つ。

○曉諸方打見れば、紫むらさき横雲よこぐも引き渡り、そのよこぐもの
其上に、るい申す女立ち。

○こくどの事を傳ゆれば、神大切にする人は、ごうん、
ちよ頂上ちよ頂上繁昌に、基となりとかたりたや。(直入郡)

○土手の蛙の鳴く聲きけば、過ぎし昔が忍ばる。

○竹に短冊七月七日、思ひくの歌を書く。

○坊主山道破れた衣、行きも戻りも氣にかゝる。

○戀の手習ひ炬燵かまどの櫓やぐら、習やせねども手があがる。
○松の木蔭からお日様見れば、逃げつ隠れつ面白や。
○久し振りぢやと柱で頭、あいたかつたと目に涙。
○あけて砧たたきの音かと聞けば、初音聞かすか時鳥。
○障子明くれば卯の花にほひ、お月やさえたか時鳥。
○たつた一聲思はせぶりに、義理で啼いたか時鳥。
○腹が立つならねんねこなされ、寐ればお腹が横になる。

大神樂

○謹上再拜々々と祓ひ清め奉る、上はほんでん下は帝釋
閻魔法王、五道の冥官なん界、下界の内には伊勢は神
明天照皇太神宮、天の岩戸にこもらせ給へば、日本な
常夜の闇とならしめ給ふ。伊弉諾伊弉册尊之を悲しみ、
天に向ひ地向ひ、日に代り夜に代り、萬々役々に守
らせ給へば、辰の一天空より貴人な天下り、御幣三本
さし卸し、白き御幣は神と名をつけ、赤きは人界、黒
きは三界、き中ぞ眷族、けだものと名をつけ、三本の
御幣を岩戸の前に納め給ひ、三日三夜七日七夜の御神
樂を、岩戸の前にてあけさせ給へば、日本はあきらか

にならしめ給ふ。それより末社が立ち始まりて、内宮
の御宮四十末社、外宮の末社八十末社、合せて百二十
末社、中にも貴き荒御神と祝はれ給ふ、雨の宮風の宮、
月よみ日よみ、北にさいほう高野の權現、磯部の權現、
川島とさがりては、竹生島の辨財天、愛宕に鞍馬の大
天狗、坂本山では伊王權現、祇園牛頭天王、九州の地
に渡りては、日本第一宇佐八幡、并に大貞八幡神社、
彦山三社大權現、求菩提は二社權現、一社はこもり水
とかや、松野檜原等覺寺山、椎田に綱敷天満宮、門司
にくだりてはめかりの明神、筑前の國では香椎八幡、
宇美八幡、沖のをんご鹿大明神、宰府は自在天満宮、
薩摩の國では霧島法華崎山、日向の國では生目八幡、
鶴戸が岩屋と申するは、鷓鴣草葺不合尊、并に天の岩
戸は太神宮の御本社なり。荒神高神一社も残らず、今
月今日只今此處に勸請申し奉り、てんけいには火事を
逃れ、ばんがいには悪事を逃れ、火難水難盜賊盜難、
やもやく難、七つの災難が降り來るとも、この神々
の御方便の功力を以て、多方千里が外に拂ひのけ、御

家繁昌春の御祈禱(下毛郡)

方言 唄

○昨日見ちエ、きふ見んしいか、悔いしいに、二日と見
ずばうどうどうせう。

○おれもわりうむむひはすれど、どうしらろ、終に逢ふ
得じ、しんき何じやり。(大分市)

4 童 謠

亥子歌

陰曆十月上の亥の日、子供は藁の束を作り、村落中をばた
り／＼と叩き廻る。其の際に歌はる。

○亥の子の餅搗かんもなり、鬼う生め蛇を生め、角の生
えた子を生め。ウンウエー、亥の子さんと云ふ人は、
生竹うひき割つて禪にかいて、しきしいで、それでも、

お尻は痛まん。向の山には火があがる。月か螢か山
下坊主の寝た五郎か。ウンウエー。(北海郡)

○山の焼ける彌三郎、田井が迫の彌三郎、道に玉(又珍寶
ともいふ)を落して、水汲どんから拾はれて、御地藏さ
んかと思つて、のつたり、そつたり、拜んだ。

右の童謠は豊後地方に於て古より兒童の歌ふ所なるが、鶴
峯戊申翁白杵小鑑卷の三、田井迫村の條に曰く、「昔より白
杵の童謠に田井が迫の彌三郎といへる事あり。由あること
なるべし云々」。又春藤倚松氏白杵小鑑の補に此の童謠を載
せたり。

右の意は或夜明るき事あり。彌三郎山を焼くならんと思
ひ、立ち出で見れば、山の焼かるるにはあらで、彌三郎の
持ちし夜光の玉の光なり。彌三郎玉を持ちて他行の時ふと
落したり。家に歸りて見れど見當らず。玉をば水汲の拾ひ
たるを知らず、その處に地藏立ちたれば、恐らく地藏の拾
ひたるならんと思ひ、三拜九拜して返されよと、願ひたり
となり。(大分縣)

手鞠唄

○受取りたくお三が盃受取つて、是からどなたに渡さ

此處はしなどのさかいなどん、御吉原の吉藏さん駒藏
さん、とうきて流行るは音八さん、白木屋のお駒さん
才三さん、煙草の烟は二、三、四、五つに六、
七に八、九の十まで返して。(大分市)

子守唄

○寐ん／＼ねんころよ、ねん／＼お守は何處へ往た、山
を越えて里へ往た、里の土産は、何土産、でん／＼太
鼓に笙の笛、起きたら叩かしよ、笛吹かしよ、坊や寐
ん／＼ねんころよ。

遊戯唄

○こかこかご、どの子が欲しいか、中の子が欲しいぞ、
中の子はやらん、端の子をやらう、おつともらつた、
綱に骨なし鳥賊こそ食はせう、それでも蟲の毒、とう
かん三切それでも蟲の毒、千兩箱三つ、それなら行か
う、御姫様の長持や何時來るか、三月櫻の咲く時分、
いまきで飛んで行かう。

○かん／＼盡しを云はうなら、蜜柑金柑酒にかん、小供
にようかんやりや泣かん、親のせつかん子が聞かん。

○坊さん／＼あなたの御裏に梅が三本、櫻が三本合せて
六本、唐梅唐竹へで渡しました。

○向ひのぢやあほんの梅の花、朝はつほんで晝開く、晩
にしほれて門に立つ、門に立つのは仙松か、まあだ七
つにやならんとて、御馬の上から飛びおりて、腹だち
やく／＼、夫れ程御腹が立つならば、五尺の身體にや、
うけて猫が嫁入いたつが媒介、二十日鼠が五升樽さけ
て、裏の小道をちよこちよこ走る、何ほ走つてもあの
山越えぬ、越えぬ座頭さん金だと仰つしやる、金で御
座らぬ小石で御座る、小石よう来た上茶々飲めふす
ほり煙草飲めとはよう云うた。(速見郡)

○一の木二の木三の木櫻、櫻の木にはちいらもとまれ、かあかもとまれ、何故そんななしそけ啼くか、ひもじい候、ひもじけりや田に行け、どぢよとつて食へ、足が汚る候、流れ川で洗へ、流る候、けすの木にとまれ、足を切る候、紙持つてくびれ、ほめく候、ほどいて冷やせ、蠅がむしる候、其蠅殺せ、罪なる候、御寺に参れ、傘がない候、借つて参れ候、錢がない候、取つて参れ候、ぬしどになる候。

○つるてんつるてんはぎはらてん、破れた前垂あててんてん、夏は寒天心太、島々辨天手を拍ちや合點、一天合中六天、それで私のもとでこてん。(大分市)

○お正月

○正月様ア何處から来る、橙の木の根から来る、白杵ヨ擔いで、重箱エ餅ヨ入れて、蠨螺ボキイ(穀)酒ヨ入れて、藜の杖ヨついてひよつこりくくやつて来る。

○正月様が来たならば、おてんてまにお茶かけて、おこんこ添へてさぶくと。

ヨ眞赤ウ焼いてやろ。

○仕舞のカンハチ、精靈様、鱧の來んよに、又來て呑まんよに、大般若經ツ。

○コーコーモリく、よんべ猿が子を産んだ、見舞に來んかコーコーモリ。(蝙蝠)

○烏々、高松ア火事ぢや、早ヨ往んで水ウ掛け。

○後ン烏が先イなれ、先イ烏が後エなれ。(南海郡)

三 宮崎縣

1 舞踊歌

盆踊唄

○沖の鷗が友達ならば、文をやるもの我が夫に。

(宮崎郡)

○施餓餓のお庭に詣りて景を見て居れば、お庭にだんだん植木が御座る。その又植木は何々か八重梅、八重松、八重櫻、お庭の御景で面白い。

○お庭に参りて見てやれば、四方に植木を召されたよ。

雪降り

○雪よこんく、霰よこんく、寺の梨の下に積りこんく。

○やれ寒む小寒む、小作方祭、旦那殿ナ呼うぜ、己共ア呼ばず、善工事ア善エワ。

○百枝ン餅と、本海崎ン餅と、食ひ較べて見たら、百枝ン餅が甘エ事ア甘エが、アレン粉(米の粉)が足らず、喉アぎツくりくよ。

○指切、金切、金屋のお萬が指ヨ切つて死んで、俵一杯錢ヨ百貫目。(約束の時)

○泣く者ンの口にあ、ぢうく虫(蝸牛)が吸ひ付いて、三日も四日も離んど。(子供の泣くのを見て)

○子供と子供が喧嘩して、親々が出てからに、他人さんの摺揆ぢや、中々濟まんと仰つて、紅屋で治めた。

○彼のカ(子)何處ン子、因尾(山間の村)ン爺が子、爺の錢ヨ盗うぜ、鯛を買うて食うて、鯛の骨ヨ引つ掛けて、喉アぎツくりきつくりよ。

○彼のカ何處ン子、因尾ン竹ン子、藁一把持て來エ、尻

植ゑたる木の名は何々か。牡丹に唐松、松に藤、八重菊、八重梅、八重櫻、三十二間の板椽に、十二や三の稚子たちが、唐木の机をもちするならべ、黄金の硯を取り出し、油煙の墨をすり流し、蒔繪の筆を染め卸し、おもひくくの文字を書く。書いたる文字を見てやれば我子によかれと書いてある。

○ちゆうくさいこら節や、どこでも流行る。肥後も肥前も長崎も。

○向ひ小籤にや鶯鳥が、親を大事と法華經よむ。

○天下泰平穩に、國常立の尊より、おりしよ正しく水神宮、五穀成就のさ、踊り。末には五穀の成就して、一同家内安全のふどうも願ひ奉る。天の岩戸は昔より幾萬年の末迄も、變らぬ今のさ、踊り。(宮崎郡)

○物の見事は吉田の城、後は山、前は大川。

○神の田なれどお田植ゑなれど、清めの雨がはいく。

○神の御庭の南天燭よ、一枝折れば八枝榮ゆる。

○やまたろがには川の瀬に住も。焼野のきじは岡のせにすむ。

○つほや七九郎様な同役を殺して、御金を盗んで、末は捕へらへて、竹鋸にさゝれ。イロシヤノスイソデキハジャン。

○殿の御庭にごま植ゑて、ごまが榮えて五萬石。

○道樂馬喰の云ふ事にや、焼酎はのみたし、赤牛やうれす。牛がうれすともかけのみに、ぐつと云うちやしやんと飲め、ぐつと云つちやしやんと飲め、河原なでしこのしく、しやうぶはわれわれとわれとさつ。

(西諸縣郡)

○稚子は遠國の旅の殿、稚子が下け緒と我が帯と、結び合せて、今朝見れば富士の白雪や未だ解けぬ。

○姉さんえあなたは寐惚けちや居らんかよ、臍の下はや何んぢやいな。(西諸縣郡)

○鹿兒嶋の館、情ある館。御盃賜る、琉球で話す。山河の池は千尋。夫より賤が思ひよぬ。

○琉球と鹿兒嶋が地續きなれば、馬にくらして、行たり來たり。(東諸縣郡)

六 調子

○なかを遙に眺むれば、しほ^{四ガカ}のじせつがうつろひて、雲が五色の色を出す。(西白杵郡)

極樂

○はなづ、はよはさかさまのものなれど、たこけのそーはぎの花。

○ごくらくの前を流る、水なれど、たこけの水はのむにのまれぬ。

○油火のきえう滅えずに生れ來て、おやをばとはで、おやにとはれる。

○ごくらくの前の小川にふみ入りて、わたらぬ先きに濡る、袖かな。

○いにしへの神の子供が集まりて、やまとのことばでひをぞさみしさ。

○ごくらくの橋の上なる人々は、かねやたいこで日を暮すなり。

○わかいとて末を遙にたのむなよ。無情の風は時をきはぬ。

○七日の五日の五日の今宵こそ死したる人の後を弔ふ。

○焼酎は昔の主様の末よ。飲めば昔が偲ばれる。

(西諸縣郡)

おち、どの

○ごしよでん造りを眺むれば、おほはつちやうのそのやしき。そのやきにしよの色を出す。(西白杵郡)

春

○東遙に眺れば、東は春の景色にて、うぐひすがのきばの梅に音を出す。け、んほろ、のきじの聲。

夏

○南を遙に眺むれば、南は夏の景色にて、つ、じの花咲き亂れ、とりの一聲おもしろや。

秋

○西を遙に眺むれば、西は秋の景色にて、きくにむらそめおもしろや。

冬

○北を遙に眺むれば、北は冬の景色にて、山に雪ふりしぐれ、鶴の一聲おもしろや。

中 央

白太鼓歌

(西白杵郡)

背に旗を負ひ、前に太鼓を着け、足を揚げ手を振り、鐘に合せて踊る。中々勇ましきものなり。

○大將軍の宮に、しちぶしのこーまはり、天より下つた駒なれば、三月しよーにて影をさす。之れこそじやうみとうち見えて、大將軍に奉る。へーにてもの、よきには、御庭のみあそびおもしろ。(兒湯郡)

○神の御前の二本松、神の植木か、落て松か。四方にさかえてやら見事。下る小枝を見てやれば、黄金の花が咲いたよな。さて其花をつまうとて、露に袖ぬらした。お日さへ照らし給はれば、露の袂をほそや。

(西白杵郡)

四 季

○さて春のはじめに梅と櫻はちりぢりと。

○夏は涼しき瀧の水、水に心のさそはれて、水に心のちりぢりと。

○秋は色よき紅葉葉のちるに心のさそはれて、ちるに心のちりぢりと。

○冬はあられに雪と霜、雪に心のさそはれて、雪に心のちりぢりと。(西白杵郡)

梅の小木

○東を遙に眺むれば、東は春の景色にて、梅の小木に花咲いて、春の景色が面白や。

○南を遙に眺むれば、南は夏の景色にて、池の眞菰は生ひ茂り、夏の景色で面白や。

○西を遙に眺むれば、西は秋の景色にて、紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲、秋の景色が面白や。

○北を遙に眺むれば、北は冬の景色にて、松の緑に雪つみて、冬の景色で面白や。

○四節の草木おもしろや。人の心が花に似て、よそに心のちりぢりと。(西白杵郡)

さかへくだり

○さかへくだりのこわかしの、手には牡丹のゆかけさし、足には黄金のくつはいて、腰には虎毛の犬をつれ、

○あかぎれ足でよーめー申すばい。(西白杵郡)

○夫の留守に人寄せらぬは、さても見上げた花嫁子。

方言詞

○昨日見て今日見んシヤガケヤーシカイツチゴミズハ死なふナシンジ。(日向)

新地節

○今年はじめて御新地に出たら、ハラヨー、ぶりののないう道やまだ知らぬ。

○ぶりの荷ひみち知らんなら教よ。ハラヨー、腰をかゝめて歌で立つ。

○故郷戀しや我古里の、ハラヨー、笠の庵りのなづかしや。(囃)「來る時や寄りやれ。茶沸けて待つちよれ。道ばたたるけん、ひや豆腐醬油かけ。」(西白杵郡)

的射歌

○向うは金の的、手前白木弓、手先き悪かれや當りやせぬ。ハラヨイソラホンニー。

○内の男とまゝ的射で暮らす。あとの女子のまゝ泣いて

十二ふまた十の弓、十三はいた鳥の羽、あまたにかくらをせききれば、十二つれたかのむれを、一つのまぶしにせき出し、一つももらさずいとめた。さてそれほどの弓とりは、みやこの方にもよもあらじ。(西白杵郡)

○しよてんの前に参りて見れば、あら見事。庭なる松の枝々に、しんじよしやくじよのほじがなる。庭の櫻の枝々に、鶯がとまりて琴を引く。さても鶯音を出す。ざれ石や小石や。(以上を前歌と云ふ)

○先づ春の始めに梅と櫻と散りくよ。音羽の瀧と申するは、夏は冷しき瀬の水、秋は色よし紅葉ばよ、冬はしーめいしーら雪、雪に心がさそはれて、よそに心が散るばかり。(東白杵郡)

2 雜 謠

神樂囃

○師匠立て習うて、あの位にやまはず、師匠どんが恥ぢやらう。

居る。ハラヨイソラホンニー。(西白杵郡)

3 童 謠

手鞠唄

○昨夕恵比壽講に呼ばれて行たら、鯛の吸物、鯨の焼物、一杯おすゝろすゝろ、二杯おすゝろ、三杯おすゝろすゝろ。

子守唄

○ねんねこく寝いやの、ねんねのお守は何處行つた、お山を越えて里に行た、お里のみやぎやなんくかん、でんく太鼓に笙の笛。

亥子餅搗歌

これは舊曆十月の亥の日に、五六歳より十二三歳の子供、楕圓形の石を繩にてくまり、繩の兩端を各五六人宛にて握り、人家の戸口にて地につけては上げ、上げてはおろしつゝ歌ふ歌なり。

○るのこくゝるのこのほちやつーかなか。つけぬもんな鬼なれ、蛇になれ、角の生えた子を持ちやれ。

○ゆるましよ沖を通る大船はいなる大工の造り初め、船は白銀で船は黄金、こがねのせーびをくままして。サ
ーヨーナ。

○エートナ、るの日に祝はんものは鬼になれ、蛇になれ、角の生えた子をもちやれ。

○向へのおばさん茶のみにおじやれ。今は鬼が居るからどもならん。鐵砲かついで、どんくいはせて、おじやらんか。(宮崎郡)

正月十六日子供が家々を廻つて唄ふもの

○もぐウエー、とんとこせ、餅を一つくれんにや、汝が家うちん雪隠叩きこわすぞ。

○座頭どんほくく(駄目ぢやの意)北東風ぢや、雨ぢや、そこは溝ぢや、ぴよんと飛びやれ。(南部郡)

○法華嶽みやけに鶉をもらうて、啼かんがアと思ふたらめんどりく。(東諸縣郡)

乙 肥筑地方

一 佐賀縣

1 祝賀歌

酒宴

○海老殿は、酒ものまに赤くなる。年も寄らずに腰曲る。胸にはわぐさの波をうけ。腰にはいくさの弓を張る。目の出たや、目出たさや。

○此の盃をグンバ(なみろと受ける意)とうけて、かけ見れば、四方や四面に四つの藏、末は長者と仰がる。

(佐賀地方)

ザンザ節

肥前川上村では毎年舊三月五日から十五日(近來は新四月十日から二十日)まで實相院で如法經會を行ひこれが終ると其翌日から春祈禱、一名『サカモリ』とて豊年を祈る宴が各部落に張られる、ザンザ節は此時歌はるものである。

○祝ひ目出度の若松さまよ、枝も榮ゆる葉も茂る。アレ

ハヨイくく、マタドーシヤンス。

○一ちやう、のうでくいごさい、ノー、(一杯のんで下さいの意)これはお江戸の菊の酒。

○兼てあがらんテエチヤ(かれて酒飲まんと云つても)此の酒あがれね、あがりや此御酒縁となるノー。

○歌へ歌へとせめかけられて、ノー、歌の字知らず文字ぢや知らぬノー。

○たとへあなたは御太守の身でも、唄の半口どま(半口出)出そうなもの。

○酒でさかもりや、度々御座る、お茶でさかもりや、今が初。

○茶園畑で約束しても枯木茶園で縁がなか。

○たとへ木に成る蜜柑でさへも、色で我身を丸裸。

○八百屋お七と國分の煙草、色で我身をやきはつる。

○わしが身持言て世間の噂、腹にない子のおろされぬ。

○あなな故に白齒でみもつ、笹に降る雪葉かくす。

○富士の山程通はせて置いて、今は釣べのさか落し。

○わしが思ふごとあなたと思ふが、三度やる文二度です

む。

○ござりや莫薩ひくござらにや戸せく、戸せく間のおもしろや。

○承知ないのに承知をさせて、無理に咲かせたもろの梅。

○シヤンス(相思の愛人)持つなら北から持ちやれ、たとへ來んでゑちやきたとなる。

○シヤンス可愛もの親より子より、親のもたせた女房より。

○義理につまれば鶯さへも、梅に離れて藪で啼く。

○あなた泥橋かはらばかはれ、わたしや石橋かはりやせぬ。

○竹に虎とは昔の事よ、今の若衆は鍋にドラ。

○りんきするく羽織のしわを、のぶる火鬘斗があてこすり。

○こなたお庭にごまの木植ゑて、御知行まします五萬石。

○飲うでみなされ甘草よりあまか、あま茶甘草な、あまさ。

○山で○○○すれば木の根が枕、木の根はづせば石枕。

にいく、もう一つ造つて錢倉にいく、鐵も金も湧くくわくノ、下には何を啜る。(川上郷)

釜蓋被せ

該釜蓋被せは、婚禮祝儀の時、花嫁の初めて其の家に入り、裏所より上らんとするところを、側に待ちかまへ居たる花婿の友達、之を引きとめ、其中の一人釜蓋を右に持ち、高く花嫁を覆ひ、左は嫁に觸れ(背或は帯の後部)唱ふる口上なり。

○あれござつたる花嫁様、お手引きばさんもまちなんせ、しづかにござんせ、よめござん。私江戸の者、長崎通りがけのものでござんすが、一寸こなたに立寄りましたれば、此家荒神様より釜ふたかぶせにやとはれまして、私名は何と申すかなれば、ほさぎ又五郎と申します。又五郎は初めてのことなれば、どちら様によめござんやら、おてひきばさんやら知らねども、櫛笄のまけあんばい、べにおはぐろのつけあんばい、帯はずつかいするたけなば、こしのもやうはねずみたけ、道は七ぶみ四ぶ六ぶとふみわけて、お通りなされる御方

○雪に白鷺とばねば知れね、わしも通はねば人知らぬ。

○あなた蠟燭しんから燃ゆる、わたしや炬明うはの空。

○野越え山越え草ふみわけて、うわの空では通はれぬわ。

○堅い約束はしてさへおけば、たとへ半年しや逢はぬとも。

○しだれ小柳なびくなよそに、わしが上りて下るまで。

○飲めや大黒唄へよ夷、酌にたちたるは福の神。

○思うてるれどもまだ親がかり、親が出さねば籠の鳥。

○お客うけても年若ければ、お客もてなす道知らぬ。

○たて、下され土橋のはしに、男ゆるしのかけ札を。

○辛いつとめ諸富若津、まだ辛いのが下の關。

○親が親さまで世が世であれば、こんな寶來豆うりはせぬ。

○酒もよう飲むさしやくなお方、粹興なさるが玉にきず。

○堅い約束石山寺の、石の證文に岩のはん。

祝 唄

家が新築した時又は屋根の葺替へ終つた時屋根へ登つて。

○造ればせばく、もうせばく、もう一つ造つて金倉を、花嫁さんと見受けまして、私釜蓋かぶせるみち知らねども、あさぎでざらいざつとかぶせます。(さて松盡してほめませう。松盡してほめようなれば、江戸で播州高砂尾上松、近江八景唐崎の松、桃の川では五葉の松、提げの川では達磨松、藤の川では観音松、むこさんなよめをまつ、よめさんなへやをまつ、へやをまつて何をまつ、そこまではんで吉野松、ま一つたへて申すかなれば、駒をつなぐはなびき笹、牛をつなぐは柳かぶ、舟をつなぐはかないかり、よめはこなたのごしうと様に、二つながせませう)たとひ石が饅頭にならうとも、ところてんが拍子木にならうとも、赤兒に白髪が生えうとも、枯れ木に花がさくとも、出て行きなさんなよめござん。こ、はあなたのをり處、もし萬一不縁で出て行きなさんときは、表の口はていすのもの、裏の口はいふまでもなく、部屋(窓)のさま(窓)から六寸角のひらものかたけて、入夫そろへて箆筒長持荷はせて、蛇の目の傘さしひろけて、出て行きなさい。それもなりますまい。親に孝行たのみます。鶴は千年

龜は萬年、浦島太郎は八千年、東方朔は九千年、此の夜こなたに入りこんだる花嫁様は、釜蓋かぶつて五百七八十年とは申すれど、千年萬年萬萬年の御逗留。所望となればまだもござんす、ありやんす。この小庭の梅のこほくにうぐひすが晝寢して、今まで少々よつほど（花もさいたれば今さく花がたのしみでございませ。）下手のなが口上仕れば、こんやごこんれいお客のさまたけ、きみのめぐみぞありがたき、きみのめぐみぞありがたき。

注意 括弧の中の文句は、釜蓋かぶせる人の思考にて千種萬別なり。又最後の一行は、參列の友人總て諺曲にて諺ふ。
(西松浦郡)

○やあれござつた花嫁さん、あき方より取くんたるは福嫁さん。しばらくくお止り下しやんせ、御手引婆さんもお止り下しやんせ。さあて私こそは江戸日本橋あたりのものでござんすが今度長崎とほりかけ、だぶす（大酒樽のこと）が茶屋に腰おきまして、遙か向ふを眺むれば、庖丁、俎板、眞名箸の音高く、こは何事かと

尋ねれば、阿蘇の宮のふもとにて、總領息子に嫁とりて、はじめて喜ぶお姑さん、立寄り見れば臺のまはり松植ゑて、一の枝には龜遊び、二の枝には鶴が舞ふ、三で榮えるその枝に、一分小判に嫁がなる。さて私こそは荒神様の下に、三年三月三日半日住うて居る、田舎つそだちのやくすけで、名は穂崎又右衛門と申すもの、此や荒神様から釜被せを頼まれて、おき、なはんせーざあつとあさぎに（普通は此處で一寸切る。他の者より所望の聲をきき先をつぐ）さあてこの釜蓋被せと申するは、唐の國はさておきて、天竺國にも始まらず、日本は六十四州と申すれど、寄り集りたるは稻荷、毘沙門、辨財天、は、きの神に至るまで、神となつたら籤神まで、出雲の國に寄り集りおむすびなされた縁ぢやもの、さあて牛をつなぐのは柳株、鳥をつなぐはなびき籠、舟をつなぐは大碇、嫁さんつなぐはお姑さん、鶴は千年龜は萬年、桃栗三年柿八年、此の家に入りたる嫁御寮は、かまぶたかぶつて一百万年の御逗留。さあて濱の眞砂はつきるとも、石がくだけで成らうとも、とこ

ろ天が拍子木にならうとも、なめくぢが一散がけを致さうとも、出たり入つたりなさんすな。嫁御さん一生一代そこがお前の居り所、若しも不縁で出てござるなら表口からなりません、裏口から尙ならん、部屋に四寸四方の窓がある。其窓より簞笥長持から傘ひろけて人足そろへて出てござるには及ばねど、向てばんは兩となり、親に孝行子に孝行、夫婦の仲は睦うして下さんせ嫁御寮。さして下手の長口上は、御婚禮のさまたけ、御祝言は次のま、さ、御通り。（東松浦郡）

2 舞踊歌

佐賀縣神埼郡仁比山村大字的鎮座縣社仁比山神社大御田祭 舞唄

囃

○七社の社の誓ひとて、いんさや、さらば、とうのばら、ひゑい山に參らんと、實にも、さいよう、さいよう、かりもうよふ、いんやほうは。

田 打

○あんまの川原をせきあけて、神の御田にかくる水、いんやほうは、はる田打こそやさしけれ。

種 蒔

○吉祥天の御室より、福を追ふ男も参りたり、種蒔く男もまへりたり、つふうん、きがさきて、ゑよおん、たねまくやようかり。

田 打

○卯月の空のあけほのに、かんだといひし男の打や初めところようしやよかれはいひ、いんさや、われらもあらたひらかんやよかれ。

代 踏

○あさんどろ、苗二葉のさいて。

タウ童囃

○三葉に根はどぞんの榮え。

ハヤシ

○祝ひには田をこそうれ。

タウ童

○みるべけれ、もとうゑて、ちんもこのよ。

ハヤシ

○田作らは門田をつくれ。

タウ童

○門田より入りくる富は藏の下づみ。

ハヤシ

○川岸に根じろの柳あらはれて。

タウ童

○いつかは君と枕さだめん。

ハヤシ

○夏山の峰の尾のみどり。

タウ童

○木の間より初音をもらす、ほととぎす。

代踏ハヤシタウ童

○大空につゞみもうたす、かりもせず、されども月は、

もろてこそいれいんやほうは。

鬼舞

○ゑんや、ほうは。

盆踊歌

ヨく。(西松浦郡)

あら踊

○こーひのこーころ、おわか^別れゆ^故るそーろの、(ソコ

イナ)のーまつぢよーろの、ふりかーかーる、(ハ

ヨイく)ねーても、さーめーてもわーすーれがーた

ーな。(サイトーく)ヨイくへーヨエー。

○ふぢーはせーどのあるみはいつまでも(ソツコイナ

ー)さーけーのすゑーえはことのも(ヨイく)な

ーごりやわーすーれぬ、ふなばまでも、わすれーがた

な。

○さどーと、イヨナンサー、(イヨエーくソラ)佐渡

とわかーさはすぢー向へなう、橋をかけうやら、船^{かふね}の

ばしばなう、(アレヤくへーヨく)橋の、イヨナ

ンサー、(イヨエーくソラ)橋のー下^{した}には鶺鴒^{あひま}の鳥がな

う、鮎^{あひ}をくはへてはにやしやんとのとひあるだんな

う。(アラへーヨく)

○ふじーは、イヨナンサー、(イヨエーくソラ)富士が

裾野^{すその}にやー鶺鴒^{あひま}がふーけるなう。なんとーふけるか立ち

○おそよ今來た。えすー早かつた。草鞋^{わらぢと}解きませうか、すそ湯^かをやらうか。草鞋やわしが解く、すそ湯はいらす。お爛^{かん}つけませう。御膳^{ごぜん}出ませうか、一膳なれど。御膳たぶればあたまへ上^{あが}る、御茶漬^{ごぢぢ}けまなら一膳あがろ。おそよ。このま、毒^{どく}ではないか。なんのあなたに毒出^{どく}ませうか。わたしとあなたは夫婦^{ふうふ}の中で。

(西松浦郡)

盆綱引歌

明治三十二年頃迄、陰曆七月十五日の夜には、松浦村山形部にて、老若男女を問はず、盆綱引とて歌を歌ひつゝ、綱引をなせり。今其歌を左に記す。

○こ、は石原小石原、かねをのせきだもたまりやせぬ。

エートく、エーくトコリヤ、サンヨく。

○きんのまきだる、こがねのひしやく、いはひいづみの

御酒をくむ。エートく、エートく、コリヤサンヨ

く。

○さても見事なだるまの松よ、枝はながのに、葉は山形

に松の縁は皿山に。エートく、エート、コリヤサン

より聞けばなう、(アラへーヨく)ごよーは、イヨナ

ンサー、(イヨエーくソラ)ごよーはめでたの天

下もよけるーなう、ことに我國やーなほよけるなう。

ヒヤールーダンノー、(アレヤへーヨく)。

○ごしやくー、イヨナンサー、(イヨエーくソラ)五

尺手のーごりやなな染めわーけてなう、たれにくりゆ

やらー、やどに置きやりやなう(木の木ーヒヤルタナ

ンノーアリアへーヨく)やどーが、トイヨナンサー、

(イヨエーエーソラ)やどがよーけーればなは立たぬ

なう。(ヒヤールイダンノー、アレヤ、へーヨく)。

(杵島郡)

3 雑 謠

角力歌

○二月初午旗が立つ、三月三日ひーな立つ、四月八日に
甘茶の中に釋迦が立つ、五月五日に幟立つ、六月祇園
に山がたつ、七月七日は七夕様が笹に立つ、八月九月
は秋風吹いてほこり立つ、十月出雲に神が立つ、十一

月に天長節で國旗立つ、十二月廿九日の其晩に、借錢取りが庭に立つ。其人目がけて腹が立つ。あけて元日には門松がねー。

○一で一のせ日雇とり、二で二割もさけられて、三で皿山をられたん、四つ他處も同じこと、五つ何時までかうあらうか、六つむりな銀つまり、七つ難儀をして見れば、八つ屋敷を賣拂うて、九つ故郷にをられうか、十東京差してにけて行く。(西松浦郡)

錢太鼓節

○神戸俵ーよ北前圍へよー、今は大阪の川圍ひ。アトサイー。

右の歌を歌ふときは、竹筒の中に青銅錢を入れ、打ち振りつゝ舞ふ。故に此の名あり。(西松浦郡)

またら節

○十七八なるあねさんが、あかねのたすきあかまいだれ、こなを摘むやら洗ふやら。たごがもるやら名を流す。誰を思ひになを流す。シヨンガイ。(西松浦郡)

紀州まだら

榮えしその枝に龜が囃して鶴が舞ふ。なんと舞ふぞとたちより見れば、御家御繁昌と舞ひ遊ぶ。シヨンガイ。

(西松浦郡)

地方特有歌

○肥前の國東のはてなる豆津村、船橋ぎはなるお玉茶屋。上をながむれや水天宮、いとも景色がよいところ、アー名所。

○中津隈えらい處、祇園さんに參詣する。裏は山の中、表はみゆと松たて賣り、米屋があたり坂、いきやたりが池の島。(三養基郡)

岸川節

○きしがは萬五郎さんな、腰にこんこつさーけてなう、足のといこのふーしや、あかーだーらけーの。サーサ、ゼツテコイ、ゼリマケヤセンタン。(三養基郡)

方言詞

○佐賀名物ア、にやあごこつきやあ(何事を云ふか)こんつくしようが(此畜生が)あらいやばんたア(アラいやですよ)どうしゆうかい(どうしませう)どうたんしん

まだら中老以上の男女、酒宴の座に諺の次に歌ふ。

○鶯のく、今度初めて伊勢の參宮、伊勢より廣き町なれど一夜の宿を貸しかねて、濱の小松の二の枝に、柴かき寄せて巢をくんで、十二の卵を産みそろへ、十二しよに目をひらき、親諸共にたつときは、黄金の銚子を取り揃へ、又白銀の盃で、飲めや大黒歌へや惠比須、中の酌取は福の神。シヨンガイ。(西松浦郡)

いもだね

○いもだねのく、もと二千餘の子を育て、ふきたちのべて葉を開き、黄金の露をうけそめて、孫子さかうて末繁昌。シヨンガイ。

○昔の人のやさしさに扇のかなめに池をほり、池のみぎはに田を作り一もと刈りては千石、二もと刈りては二千石、三もと四もとの數知れず。穀に積れば富士の山、酒につぶせば泉酒、その酒頂戴する人は、命も長し徳もある。とくと參らんせー、御座の客。シヨンガイ。

○盃のく、臺のまはりに松植ゑて、一の枝には金なる。二とも榮えしその枝に、白銀黄金のよねなる。三と

○

○思て泣くく泣いては思ひ、様は草葉のきりぐす。指を切らうと云うたは嘘よ、金が無いなりや手を切らう。

○お寺柳は風が吹きや靡く、様も靡きやれ戀風に。

○浅い川ぢやと小棲をからけ、深くなる程帯を解く。

○泪こほして氣を取り直し、瘦せはせぬかと水鏡。

○富士の山には西行の晝寝、歌を枕に田子の浦。

○寺の門口峰が巢をかけて、坊主出りや齧す這入りやさす。

○花活の水にだまされ咲いたが因果、早く散りたい床上。

○論語讀みく、廓に通ふ、女郎も格子のうちぢやもの。

○泣いて涙をこほさぬものは、千兩役者と時鳥。

○狭い様でも廣いが袂、戀の仲立辨のやど。

○ながの辛苦を一枚紙に、封じ込まれた身の辛さ。

○戀しく月に月日を忘れ、鶯が啼く春ぢやさうな。

○夏の木の下霜夜の炬燵、離れともない主のそば。
 ○虎は千里の藪さへ越すに、越すに越されぬ大井川。
 ○おやまア大變だよ出雲が焼ける、結ぶの帳面ち、や
 くもくちや。

○お伊勢様ほど金持はないが、なぜに御殿は茅葺か。

(西松浦郡)

4 童 謠

手鞠唄

○八幡太郎が袴を穿く時は、助けて下され高野山、高野
 のお方は知らねども、昨宵貫うた花嫁御、奥の座敷に
 坐らせて、金欄緞子を縫はせたら、ほろりく〜とお泣
 きやる、何の悲みあらうか、私が弟千松は、七つ八つ
 から金堀に、金を堀らずに死にました、一年待つても
 未だ見えず、二年待つても未だ見えず、三年三月に状
 が来た、状の表書読んで見よ、徳庄に來いと云うて來
 た、徳庄は何着て行かりよか一重木綿長小袖、上から
 越後の帷子、帯は博多の三重まはる、しつかと締めた

へて立つときは、黄金の銚子七銚子、銀の銚子も七銚
 子、しよんごろく〜の婆さんは、牡丹餅好きで、よ
 んべ九つけさ十、そこで一貫。

○ちんこ坂どこへ、甘木の手前へ、商賣何え、びんつけ
 膏薬つけ油、ねだんいくら一錢八厘、つけて見なさい
 芋饅頭。そこで一貫。

○人は通らん山路を、通れ〜と折角に、一枝折りてお
 手に下げ、二枝折りて腰に下げ、三枝折るまに日が暮
 れて、伯父さんがてや泊らうか、伯母さんがてや泊ら
 うか、蒲團が短かし夜が長し、向の納戸を開けたれば、
 十七八の姐さんが、びつちやんはつちやん機織いやい
 (織りなさい)、機織りみち知つとんか、今なるうて
 (習うて)忘れた。そこで一貫。(川上)

子守唄

○ねんねが守は何所往た、あの山越えて里へ往た、里の
 土産は何々か、簞笥に長持、鉄箱、鉄箱、こしらへて
 やらるもね、いこでも、くでとも云はしやるなや。

○お月さんは幾つ、十三七つ、七つの歳から京に上つて

ら四重廻る、足袋は白足袋、京雪駄、馬は白馬飾り馬、
 シャンコ〜と行く時は、あとから日暮の雨が降る、
 さきにはちら〜雪が降る、牡丹芍薬罌粟の花、一枝
 折りては髪に挿す、二枝折りては腰に挿す、三枝折り
 ては日が暮れる、弟の宿に泊らうか、姉の宿に泊つて、
 一番鶏から立起きて、かねの茶碗に水汲んで、一ばん
 あがりの御茶屋さん、二ばんあがりの酒屋さん、三ば
 んあがりの盃さん、酒の肴は何よかん、江戸の金柑江
 戸の茄子。(西松浦郡)

○お天とさアお天と一千さま、じゃうせんじ、あかせの、
 こまくり、あけて、一百ばいえこせ。(東松浦郡)

○山のけん〜雉やなぜ鳴くの、親が居らずに子が居
 らず、たつた一人の坊さんが、山から轉んで経讀んで、
 なぜかと思へば四十九日、四十九日が過ぎたれば、れ
 んぎで味噌すりやお豆でござる、人が一寸くりや一寸
 匿す。そこで一貫。

○一つ二つ三つの鶯が、ことし初めて伊勢参宮、伊勢よ
 り質屋の金借りて、十四の卵を生みそろへ、生んで揃

學問さいた、七どん八どん、源七どん、さう云ふて喧
 嘩してくいやんな、浮立の來つけん飯たきやい、をり
 や飯やすつかん〜。

○かんかんかごじや上らんか、上らう支度はしたれども、
 あんまりあの女が泣く故に、かの女泣かすな土産くり
 ゆう、かの女土産は何々か、一で香箱二で鏡、三で薩
 摩の板買うて、板屋根葺きして門立て、門のぐるり
 に杉さいて、杉の縁に鷹すえて、鷹の羽子に香焚いて、
 香の煙は西東、西と東と鳴く鳥は、雁かすいしよか鶴
 の鳥か、さいて見たればちよせん鳥、ちよせんめー
 女たちや髪けづり化粧して、観音さんに参らした、を
 どまー(我等は)何著て参らうや、笹色のべんべん著て
 桃色の帯して、しやーらいしやつと参らうか、裏の金
 剛橋やどぎやいして(如何して)渡らうか、雪駄お手に
 持つてしやーやつ参らうか。

○鴉じやう〜、なし(なせ)首抛けたか、ひもしかけん
 のこと〜、ひもじかこんの田作いやい、田作れば汚
 ねつたん、汚るるこんなありやいやい洗へばつめたかた

ん、冷たかこんなあたいやいあたれば熱かたん、あつかこんなひざいやい、ひざれば響つく立てば頭つく、きゆつと云ふて死んだ。

○一のけんじよ二けんじよ、三けんじよ四けんじよ、しこまのもとひで物食はん鳥は、ちーちか千鳥まさゝが花を、苔んだか咲いたか、け々のけん車でぎゆつと云ふて是を引け。(小城郡)

雷の鳴る時

○しら山のく、松のこかけでかたられて、安らにおつるらいの鳥かな、桑原こんじやうこんじやう。

聴に道をきられた時

○いたち道、ち道、ちかひ道、鼯はかへる、我は返らん。

土龍打の唄

○なれく(實を結べの意)柿の木。ならずの木をばなれどと云うた。千なれ萬なれ、億萬なれ。蔓落するな、空花咲くな。人のちぎる時(人の採る時の意)は濠の岸になれ。おどん(自己の意)がちぎる時は畑の真中になれ。去年よりは今年は世間がようして大うして長うし

て、ぶらくとなれ。十四日の土龍打。(二月十四日竹竿に藁を束れて槌の如く造り童子之ヲ持、部落内に集合し、このうたをばやしつゝ各戸毎に一齊に之ヲ打ち其家を祝ふ)

(佐賀郡)

○なれく梨の木、ならずも梨の木、なれとぞいはふ。千なれ萬なる億萬なれよ。よその物ちぎるときや、堀のなきやぢやほく、うちの物ちぎるときや、はたけんまんなきやほてく。十四日んもぐらうち、おからんなよんごうでも、ふとかとからおくんさい。(神崎郡)

大樽區夏祭歌 (甚九郎)

○細名山を下る時、豆腐の角にけつまづき、菟藟小骨が喉に立つ。きねで掘つてもほれはせぬ。向う通るねーさんに、薬をないかと問うたらば、薬はだんく御ざいます。海鼠の白玉に章魚の骨、山に立ちたる蛤と、海にたちたる松茸と、夏降る雪に寒茄子、氷の黒焼火にといて、つけて見なんせよくなほる。(西松浦郡)

亥子歌

舊十月初亥日は男兒、第二の亥の日は女兒。

座る。

「夫れ久方の空澄みて、四方より告ぐる初鷄の聲ほのく」と明け鳥、住みや古るさん松むしり、サレバ松ヶ崎なるも、千鳥、盡さぬ春と呼ぶ子鳥、呼び合ふ枝の鶯は、もぐらの衣や照り(不明)その、麗かに粧ふ顔とりを、包む霞の山きす、速き日脚を駒とりの、音を諸共にあけ雲雀、誘ふや五位の青嵐、青田が中の青鷺や(メケ)水鷄啼く夜のヤレ薄明かり、それともつかぬ卵の花の、月ほと、ぎす水莖の、宮も翡翠の深みどり、柳の絲やよしきりの、群れを鎮めし閑子鳥、忍ぶ山路の山どりの、尾越の鴨や秋さびて、來つ、馴れにし雁がねの、しらべも早き絲竹に、通ふ音色も立つ鳴は、サレバ實にや床しと夕鶉、露深草の稗鳥も、ひへてぞ渡る宮どりの、いろも(不明)ふ赤頬白や、錦するてふ野のますの、心地もよけに啼はらす、霧のあしたのも山がらや、ふがらにつくく稻雀、品をつくして四十雀、五十雀なる壽に、(メケ)ますらをこのヤレ鳩杖の、九十九の名さへ白ひけの、白きを見れば秋の夜の、圓

○ヨイトンナく、權兵衛さんの餅つきぢや。銚子出すか、餅出すか。一番目によむすこんこ、二番目によむすめんこ、そりかるさきや、でふーでや、でふーでや、(拍子)へーとーへーとー。(西松浦郡)

二 長崎縣

1 祝賀歌

祝事唄

○これのオ、座敷イ、は、ア、祝ア、ひの座しイ、き、アイソライコレ、黄金まざりの雨が、鴉ぢやなけれどがくがあ、降る。(南高來郡)

2 舞踊歌

五島藩の奉納踊 (長崎縣南松浦郡)

○蓮菜山のエイトナ、その雛鶴がエイ、巖に、龜イガ、ヨイヤサ、オーさて目出度いな、エイシユンタリく、な、踊しゆんたり、踊子の若い衆、爰に一つの話が御

かに澄める望月の、放つや鳥の聲々に、すゝしめ申す
○神垣を、老の松風梟や、流るゝ年を鴛鴦衾、春待つ樹
々や巢籠りの、その雛鶴と唄ひ重ねんく。

盆踊歌

催馬樂

○どこへ行かうかあの山陰に、小笹を枕、扇かなめのと
らまのものよ、小笹を枕。

○年は十七、今こそ盛り、あのわれよさまになびこよ、
袖こひのそうもこんかよ、日もはや西にいそぐなよ
く、日暮しの間に袖をひく。

○むこどのよ、一つこしめせ、そらせき酒のつほそこ、
つほそこは、いつものみそよ、姫君くされ(下され)抱
いて寝よ。

○姫君はおさな子でさよ、來年そだてて參らせう、てら
てらのせんすい花かよ、來年までも、またうや。

(西彼杵郡)

○見て待つ聲は柳町、柳櫻は多けれど目につく女郎は只

○人に心をつくす夕暮、わが君のわがおもかけをさする
もはかなし。つま思へどもいかにせん。

○人に心を盡す夕暮、よしや吉野のわが面影を、すつる
もはかなき、つまおもへどもいかにせん。

○心うかるゝいかにせん。君はおろかに三月月のかつら
のごとして、手にはとまらで、名はたちてゆらりく。

○心うかるゝ如何にせん。頼むいはます、岩ますの見る
度こととして、あまのたく火の夕煙なびけく。

○みるもはかなきゆめや夢。さく花の一枝を手折りて、
はかなさて妻もち行方くく。

○いそかにおよぶ旅のとの。しのび車の輪のうちに、豊
後のをどりはひとをどり。

○國のならひのおもしろや。しやくくに匂ひの音でやる。
ぶんごのをどりはひとをどり。

○高雄紅葉は散るかちらぬか、闇にこそ知る。宇治の螢
は飛ぶか飛ばぬか、月にこそしる。

○ゆきしろのこともたちや、やつかせにそめは村さめい
ことにこりやとこへあおとに伊勢いせをどり。伊勢の

一人。

○思ふ方より文を得て、手に持ちながら忍ぶかな、そな
た故、文見る心の面白や。(北松浦郡)

○いざや若い衆ござるまいか、よひる狐なんの化さうよ、
とんとう化けよ。

○いらね煙草の羅宇が長うて、様と話す夜の短かさよ。
(對馬)

○家野はよかよか昔からよかよ、サンタ、カラウで日を
くらす。(長崎)

○文かきやらん、夜のひまがし、待來る月夜、日影をあ
らたかに、心ぞうすきかつらきの神。

○文かきやもよるのひまなし。餘所になびきて、物やお
もはする。契りぞうすきかつらぎの神。

○笹の葉のごと露深きまるに、かつぎの宵の間に、何と
まはせと水車、川のなごれてまはさる。

○笹の葉のごとつゆふかき、吾はひまなし、思へども。
何とまはせのみづぐるま、川のなごれてまはされた。

わがいしゆは、しやむりしよとおしやる。こりやどい
へあさこへ、櫻いいことに、櫻花川のせはひやく。
(以上催馬樂)

○名残りは更につきせまし。船は出て行く、我はまた、
君をそひねの梶枕、をりふし、をりふし袖の露や、つ
ゆや。

○なごりはさらにつきせまし。鳥は古巢にかへるとも、
君をもどさぬ、みよなれば、たつよにたつよに、そで
のつゆや、露や。

○しをれがちなる、たもとかな。山をへだて、きよく
もなや。ゆき、をしける、さゆる月草、葉もなびく、
道のつゆ。

○しをれがちなる袂かな。川を隔て、曲もなや。ゆきき
をしける、わたしぶねさへ、さをに、しづくのかずか
ずと。

○かねは聞えて、鳥もはや、しのべども、ふたりある身
のはかなさに、なにとまはせどまはされぬ。サーサ、
うつなよ、うつなよ。

○鐘は聞えて鳥もはや、うき事の、うすくふけゆく。秋のよの人まつ人こそ、おもふ君、サーサ、うつなよ、うつなよ。

○人目の關ぞ戀路をへだて、まれにあふよも長かれとおもへども、君まぢうけて、鳥ぞうらめし。

○人目のせきぞ、こひぢをへだて、なかなか、なれなれ、きみなれても、其いにしへは、しらすしられず。

○戀路をなびく、むねのくるしみ。わがむねに、思ふまゝいとと思へども、おもふまゝも、身にかへて。

○戀路をなびく胸のくるしみ。むかしより、思ふまゝとは思へども、思ふまゝもな氣にかへて。

○くれなるの打緒の色は變るとも、變るなよ、君かはるなよ、ちぎりそめにし中々に。

○ぬればゆめ、さむればうつ、とにかくに、しのぶなよ、君しのぶなよ。せめてまくらに、のこせ、おこせ。

○寺に参りて御門を見れば、やれやれ見ごとのまきばしら。

○寺に参りて、御寺をみれば、ひはだのせぶき、やれ見

事。

○寺のまへなる、ちりちり小草、たがふみちらした。松若ちごの、ふみちらした。

○松わかちごを、やぐらにのせて、下からみれば、ほけの花。

○おくなるのは、どなたでござる。おんある山にたがすゑた。

○佐渡と越後はすん筋むかひ、橋をかけうかよ、船ばしを。

○佐渡のみさきの、かん鐘きけば、ゑちご、こひしや佐渡こひし。

○佐渡のみさきのごん御所櫻、もとは越後よ、葉はさどしまよ。ふかばなびけよ、枝ともに。

○殿はもたいで、かなかねつくる。笹にふるゆき葉をか

くす。

○との一人もちたれど、親にしらせぬ殿なれば、ひさし柱よ軒にさす。

○われは十七まだ殿はもたぬ。なに、つけても、とのほ

しや。

○とのがほしくばきよ水にこもれ。十七八なるとのたも

れ。

○とてももらば、京女をたもれ、京女とりわけ、しな

やかに。

○かちんまへだれ、ひをどしの緒の、しめてござれや夜

はよ中。

○鎌倉の御所の御庭に植ゑたる松はから松。その松の一

の小枝にようあるたかが、すをくむ。其鷹がたとへた

ゝすばしらのよねのはなはな、其よねを酒につくり

て、はんどう、ひしやくで、くまうよ。(西彼杵郡)

黒丸踊

○入羽今年よりしてみろくどし、金の斗がきに、こがね櫛、

白銀たはらに米はかる。御所に参りて御門を見れ

ば、白銀御門に黄金の扉。やら見事、やら見事。

○小踊曇らば曇れかしまさき、晴れたとて、くしきがみ

ゆるではなし。

○三味線 そなた思へば身がほそる。三味線の糸より身がほ

そる。さまはけんきで白木のゆみよ。はりがつよ

きではなされの。そなた思ひで身がほそる、三味

線の糸より身がほそる。(東彼杵郡)

須古踊

○へ場笛目出度き御代の始めかな、めでたき御代の始

かな。千代に、八千代ませ國重りて、御代久しか

れ、久しかれ。御代久しかり、久しかり。めでた

き御代の始めなる。千代に八千代ませ國重りて、

仰がれやるぞめでたかり、あをがりやるぞめでた

かり。

○笛 祝ひ目出度の若松よ、祝ひ目出度の若松よ。枝も

榮ゆる、葉も繁る。千代に八千代も幾久し、千代

に八千代もいく久し。祝ひ目出度の若松よ。いつ

もかはらぬ常盤木の、梢榮ゆる縁かな、こすえさ

かゆる縁かな。

○笛 月は東の山端をいそぐ、月は東の山端をいそぐ。

なびげや谷の姫小松、なびげや谷のひめ小松。東

なびげや谷のひめ小松。

窓より月うちさえて、東窓より月うちさえて、ふ
たりの枕はづかしや、ふたりのまくらはづかしや。
黒丸及び須古踊は、共に文明十二年（今より四百餘年前）
他國人來り教へしとの事、郷村記にあり。

（東彼杵郡）

角力歌

○目出度い、此の屋の屋方は、金と銀との、つぎ柱、
とまは小判の重ねぶき、内にはいりて、奥の殿間を見
てやれば、あいの建物、金障子、鶴が拜すれや、龜が
舞ふ。龜が拜すれや鶴が舞ひ、七福神の、御見物、末
は鶴龜、五葉の松。

○種子になるまい煙草の種子に、苗床されて、なほされ
て、物のひとたけ、なつたなら、下葉をかいで、しん
とめて、繩の間に、はさまれて、高い天井に釣り上げ
られて、色のつく迄、ながめられ、色のついたら、お
ろされて、雨降る風間に、四十しわまでのべられて、
大骨小骨はなされて、七分五厘にきざまれて、一錢二
錢の印紙をはりつけて、八百屋おせつ（七）ぢやなけれ

ども、色で吾が身を焼き殺す。（南高來郡）

六調子

○アラヨ、桃様よ、夢なと見せれ。夢で浮名が流されう
か。ハヨイヤサー。かあいぢやと云うて、捨言葉にも
云うてくだしやんせ。ハヨイヤサー。今此處で松が榮
えて御城下が見えぬ。なぜに御城下は島の影。ハヨイ
ヤサー。いやと云ふのに得心させてむりに咲かせた、
室の梅。ハヨイヤサー。城の岳から野島を見れば、野
島家のかちや四十五けん。ハヨイヤサー。

○目出度き御代の初めかな。千代に千代まし（ませ）國か
さなりて、御代ぞ久しき、久しかれ。

（備考）此歌詞は此踊に最も重きを置かるゝものなり。

○なにも思はじ蟬の聲。秋はまされと歌ごるぞなす。

○千代よろづのやどなれば、何事もおもひのかなふは猶
うれし。心まかせになるわいな。

○ふりわけのかみ誰やらん。にしきぎは只其まに立て
つらね、ぞなみわすらぬおもしろぬ。（意義不明）

○ヨイヤノヨイヤノ、見渡せば、四方の景色もしけく

○これのお庭の花見れば、いつも變らぬ黄金色。咲くぞ
目出たい。ゴーヒョーエ。

○これのお庭を見渡せば、これこそ殿子のごしよ櫻。

（北松浦郡）

先き踊歌

入羽

○松の千年を掛「宮居に占めて掛「確と「ヨイソレサー
しづまる大神の「靈の丘として「其の名も高き重ネ「仰
ぎし恵みこそ「里の榮えと「幾千代迄も「祝ふ「心を
しろしめせ。

（掛聲）掛聲神も勇みし大踊。

地

○國の礎「定めし君を「齋き祭りし靈の丘「千代の秋と
て「五穀も實り「民も豊に腹鼓「戦ぐ神風「勇める人
氣「集ひ賑ふ大祭り。

（掛聲）いつも變らぬ松の聲。

出羽

○神の御靈に「あゝ捧けしものは、

と。

○御國長けれ、御代の松。御代ぞ久しき、久しかる。

○今迄は地獄の種をつくれども、彌陀のお慈悲のてづよ
さに、参りて見れば極樂の、數多の佛をがみあけ、う
れしなみだのその聲に、南無阿陀佛とをがみあけ。

○千早振る神のめぐみでいのちのび、あくまをばらひ、
田はみのり、海よりあがるさかえをば心に喜び、神々
に歌ひまつるぞ目出度さや。

○治まれる御代を祝はん盆踊り。今年も四海治まれり。
笛や太鼓の調子にて、なき人までもいさみたり。有り
がたや。

○生月は南上りに北下り、いつも大漁で浦繁昌。
○戀しくばたづねてござれよ、この浦に。鮪も鱈も金山
も。

○住吉の松の影から月みれば、曇ることとして又冴ゆる。
○花よ花よ、向うの山の岩つゝじ、せは細けれど花は咲
き揃ふ。

○鈴虫の秋の小稲に巢をこめて、ほさつ枕で月ながめ。

先づ活花よ「オ、ソレ〜」水揚げすまして床の上。

○相撲や「ア、勝負が付かぬ。

試合は弓張月よ。「オ、ソレ〜」顔をかくして居合腰。

○若い御方は氣も競ひ馬「オ、ソレ〜」、駒も勇みてよかり聲。夜は「ア、仕掛けて置いて、サ、ヤリ、枕の夢の「オ、ソレ〜」もゆる思ひを揚花火。

○芝居狂言能番組と「オ、ソレ〜」數の中にも大神。千秋萬歳目出度さや。

備考

一 島原藩神事祭に用ふ。

一 町人中階級を論ぜず壯丁より小供に及ぶ。但し舊藩時代は古町を主とせしが如し。

一 踊は數十名木刀を佩び采を手にし、一定の服装をなし、音頭并に歌方等あり。

一 此踊は島原の亂時代、凱旋踊より起りし物とも傳ふ。

一 先踊の名稱は他の踊より必ず先立つに依るなら

くり、かごだとの、おれやどーしゆいろー。

(意義)「自分は如何せうか、自分は如何せうか、腰がちつくりかゞんだが、自分は如何せうか、自分は如何せうか、如何せうか、腰がちつくり、かゞんだが、自分は如何せうか」との意にて、雨乞浮立の爲め、或る海峡を渡りて小島の池邊に浮立に行く時に、其海上を渡る際、此の譜を笛にて吹きたるなり。

鐘太鼓言葉 (かれ太鼓をうつ時の形容語なり)

○おりけん(自分の家の)とつちやんな(父さんば)こらりんぢやつたんかん(来られなかつたか)ちんこらりんとん。

(つい近頃は来られないが) (西彼杵郡)

よいさかにや節

○やがめいぶつ、宿ではどぶ酒、中尾でにんじんごんほ、現川のからいもに、観音、木場ん瀧の水。ヨイサカニヤ

○矢上言葉は、往たいろ、來たいろ、遊すばんにろ、あらおとろし、やつせんなさ、あんじよ(自分より以に彼れ等)たちや、なんばさりゆか(何をさるゝであらうか)。ヨイサカニヤ

ん。(南高來郡)

3 雜 謠

雨乞浮立の笛の譜

○ほーほーぐわんどーんのー、たーてーゑーほしーし。たーてーゑーほし。アー、まーたーはーけたーろーばー、ぬーりなーはせー、ぬーりなーはせー。アーヒョーロ、ヒヤーラ、ヒョーヒヤリロー、ヒ、ヒョーヒヤーロ、ヤーヒヤリロー。

(備考) 判官どんの立烏帽子、またはげたるばぬり直せ。

○おーおーおお、おれや、どーしゆ、どーしゆいろー。おれやどーしゆいろー、こーしの、ちつくり、かごだとの、おれやどーしゆいろーお、おれやどーしゆいろー、どーしゆいろー、こーしのちつくり、かごだとの、おれやどーしゆいろー。

(備考) おれやどーしゆ、どーしゆいろー、おれやどーしゆいろー腰の、ちつくり、かごだとの、おれやどーしゆいろー、おれやどーしゆいろー、どーしゆいろー。腰のちつ

〜。

(備考) 宿、現川、観音木場等は矢上村内の一部落の名なり。(西彼杵郡)

金崎の光原さん

○金崎の光原さんの、御泉水にや、嘴の長か鳥の、浮うちよつたちふー(浮いて居つたといふ)。あちやろば(そんなら)其鳥どま、横穴けーちよらるーべー(横穴はつてゐるならん)、こもつちよらるーべー。(籠って居るならん)

(西彼杵郡)

波佐見節

○習うた習うたーよー、波佐見節やー習うたー。習うたー波佐見ぶしや、アラわーすうれーえぬ。

○ばらーばらー松ヨー。まつでー持てーたる、アラ、釜の浦ー。

○サツサ降れふーれー、板屋にーあーられー。あられーふーらねば、アラ、物さーびし。

右は中流以下男女酒宴の節一齊に唱ふ。(東破杵郡)

肥前仁比山神社御田植神事唄

○七社のやしらの誓ひと打て、いんざやさらば、殿の原
ー比叡山に参いらんとは實にも、さあよ、さんようか
り申しやう。

○天の川原をせきあけて、神の御田にかくる水や、よう
かり。

○吉聖天王の御室より種蒔く男参りたり、福負ふ男も参
りたり、月かんさあ(笠)へー御種蒔くやよう。

○神田と言ひし男も打やはじめて、ところよしや、よう
かり、はア去ぬざや、われらも、荒田ひらかぬや、よ
うかり。

○あさんどろ、苗へ二葉挿いて、三ツ葉には、根は、と
ろぞの榮え。

○川端の、ねじろの柳あらはれて、峯の尾の山に啼く時
鳥。

○田作らば門田を作れ、門田より入りくる富は藏のした。

○大空に、太鼓も打たず樂もせず、されども月は舞てこ
そ入れ。

年の始の繩なひ歌

○右の御手を見給へば、大黒様が引きなさる、左の御手
を見給へば、お蛭子様が引きなさる、川のはたまで引
きなさる。茲をくめとのおほせつけ、一杓くんでは一
分小判をくみとらせ、二くみくんでは金子小判をくみ
とらせ、三くみくんでは一六八千貫もくみとらせ、く
みとりしまうて内にかへれば、ばいさ子供はよろこん
で、おかつさんのよろこびや限りなし。またおだんな
様は白金の長柄の盃をとりだし、のめや大黒歌へや
蛭子、中でおしやくは福の神、目出度いな御祝。

○目出度いなー。此處のおかつさんを見給へば、何
時来て見ても通れーと仰やるが、私が通る身分なら、
大小袴で通ります。私は貰うてかへらねば、うちの鍋
釜總明きで、棚からしやくしがまねきますぞや。目出
度いの御祝。

○ヤレヤレ、めれたいなー、めれたいなー、サこれなる
やかたを見たまへば、お百姓さまとぞ見受けますー。
お百姓様なら祝ひませう。倉が七棟七戸前ーナ、東の
倉には、かめ七つ、その又かめには、大判小判を積み

○ねんの始めに繩なへば、エーつるにもろもく。

○多良岳に霞かけたなら、エー雪の初雪。

○目れたさや、年の始めに繩なへば、エー鶴にもろもく、
もろもくの左の小枝には、黄金花咲く。

○目れたさや、今年のおね、穂は八穂で八石。八石が九
石にもなるならば、二十の二の倉、二の倉の中なるつみ
ものはー、エ、鳥のはがさね、エーヨ一鳥の羽がさね。

○諫早の町をば通る時や、せんとうとほす。エー米を踏み
ます。其米は何にするかと問ひ聞けば、亥の正月の頃、
エー酒の元米。其酒は何にするかと問ひ聞けば、元米
が元米であるならば、エーだしやれ姫様。(南高来郡)

目出度いな (大黒まはし)

○めでたいなーサ、めでたい處を祝ひませう。先づ正月
の祝ひには、ふじもろの木一杯で、ゆらりと受けて、
かけ見れば、倉が七軒七とまへ。倉なる中をも祝ひま
せう。米なる俵が萬々俵、大豆小豆も萬々俵、粟麥俵
萬々俵、ひよ口そろへて、納めこんだが目出度いのー、
御祝ひ。

重ね、西の倉をば見給へば、大豆小豆は限りなし。目
出度いなーごいはひー。

○めでたいなー、めでたい所は祝ひませうーナー。
こゝの屋形を見給へば、南さがりの北上りナー、東下
りの西上り、入船屋敷ぞ祝走りこむぞや。めでたいな
ー御祝。

○ヤレー、めでたいなー。サ何が又ぞめでたいな。
めでたい所は祝ひませうーナ。こゝの屋形を見給へば、
お百姓様とぞ見受けますナー、倉は七軒七とまや、十
一めぬぎに五いなはに四ほどめな米の俵が千俵、粟が
萬俵なー、大豆小豆は數しれず。山に積れば富士の山
ナー。酒につもればいづみ酒。ひゆうで揃へて御積み
なさるぞよ。めでたいな。ご祝ひー。(南高来郡)

○ヤラヤラ目れ度い目れ度いなー。サ目れ度い處は祝ひ
ませう。チヨイサ、之れなるお家を見たまへばー、ナ
お百姓様とぞ見受けたり。お百姓様なれや、粟の俵が
萬萬俵ー、ナ米の俵の萬萬びゆー、ひゆぐち揃へてお
積みなさると、オー目れたいのご祝ひー。餅ばしちと

あねがいもとにーしやくをとる。エーサ。

○港の沖に蜜柑船、一つちや一文、八つちや八もん、九つちや九文で、ヨイササのつたく。(南高来郡)

松高節

○正月二日になりぬれば、十七八の姉さんが、布を洗ふやら晒すやら、晒し上げた、みこむ。紺屋を指して急ぎ行く。御免なされや紺屋さん。御上りなされや女中方。染物一ツ染めて下され紺屋さん。えん車に御所車。アー七ツの年から紺屋なれど、そーいふ染物染めたる事なし、覚えなし。覚えなければ、ためしなし。脇の紺屋に頼みください、女中方、染めねば紺屋が名が下る。染めてやりませうか、女中方。之では紺屋も名が上る。

○祝が祝でかさなりて、私しが一つ祝ひませう。飲めや大黒歌へるびす。中でおしやくは福の神。

○歌へくと、せめかけられて、わたしは、舟子の身分なら、歌みち知らぬ、節知らぬ。十四のとしから舟に乗り、やぐらの上で、苦勞をする、艀舵を、にぎりて、

朝鮮へ。ほんーにーそなーたーはーつみーなーおかた。

○羽織きせても、洋服きても、ほどのよいのがこちの人。ほんにあなたは、いきなおかた。

○長い羽織のすらせにすがり、ねずみがいきにねこがすく。ほんにわたしが氣がもめる。(南高来郡)

砂糖まはり歌 (ヨンゴ節)

○よんごーよんご節やーヨオオ、だがはやらーアアせーたーよ。ハキタコラ、おんのいけの、じつさんがー、アヨーオー、はやーらーせーたー。へへんノへ、ハキタコラハハハンノハ、ハ、コイコイ。

○ハアアー心こーやにいーねーエエエ、身はーたかーじーイイイまーによー。ハキタコラ、おちるーなみだはーねーエエエ、なかーのーしーまー。

○ねぶいちんたまに胡椒すりこんで、胡椒がそんだなら、ねぶはない。

○島原男は、あをもちもてば、一升榊一つが、せきのやま。○車まへく、だんごもたまれ、もにへーまはつたら、

目をさまし、潮風ふかれて、聲がない。

○むこうの野原に、かりうどが、鐵砲かついで、猪うち、猪と思つて、たまをこむ。ねらいすまして、どんと一はな、はなせば、二つたま人にあたらぬ宿の客。きつけはないかと、ふとくらに、けふにかぎりて、きつけない。あの谷川に水がある、くはへて口にふく。(南高来郡)

しよんがいな節

○むかしのしとのやさしさーは、扇のかーなめにいけーほりて、池のみぎはに田をうゑて、ひーともーとかりては千石よ、ふたもとかりては二千石、三もとかりてはかじやしれの。石につもれば富士のやーま、酒につもればいづみざーけ、其酒頂だりするしとーは、いーのちもなーがーかれとーくあーれ。とくどまいらのせ、おざのおきやく。シヨンガイ。(南高来郡)

長い刀節

○ながーいーかたーなーのー、さけーをーにーすがり、チラチララツタンシヤン、つれーてー行かーのーせー、

はよ、やみゆで。(南高来郡)

流行歌

○蝦が子の年は取らずに腰まがり、酒は飲まずに赤くなり、祝の座席に据ゑられて、品の善さ見よ、蝦が子の。

(南高来郡)

鳥さし

○鳥さしや見さいな。とーりをさしてみーさいな。三日の日は又三笠の山に、とーりをさしにいつたら、目白が一羽、鳩が一羽、ばさくいふのが、貂か鼬か土龍か、ちもちか、けつきよーかまつさいちゆう。一のき二の木、ア三でさーくら、やーなぎ、柳の下の、ごんごもつたえーだに、鳩が一羽、雀がとーまつたく、あのとーりをさして見ろ。さーうと思たら、ほつとゆつて、ひつ飛んだ。つけもつけた、あら信濃の國の善光寺山の、御堂のうーへーに、とーまつた。勢多の唐橋や、くるけーたをるが、竿三間竿、御堂の高さが三十三間堂。とづつくか、とづかんか、投げ竿でさして見ろ。ねばるかねばらんか、今年ことしの鳥とら、去年の鳥とら、

それでねばらんなら鼻糞までこぢつける。一つさして見ろ。寺のこつけら小僧坊主がゆふ事にや、此の鳥をさしたなら、罰がーあたらうく。ばあたれ一つさして見ろ。其の鳥さしたなら、一貫しゆ二くわんしゆ、五六貫にうち賣つた。頃はなん時か七つ半ごろ、鳥さしやこれまで。ばさく。(南高來郡)

鳥とたにし

○上の榎の木に鳥が一羽、下の田原にたにしめが一つ、たにし取つてくれうと、チョンチヨウチヨントおれて、そこでたにしめが云ふ事聞けば、鳥殿とは此の鳥の事か。水晶眼に天鷲絨の羽織、足にやびろどの脚絆まで着せて、シカンコカンと云ふ聲聞けば、昔御釋迦さんのしやつばの様な聲よ。それで鳥ちよと打喜んで、元の榎木にチョン、チヨラチヨンと上る。あとぢや土の中三尺堀つては入る。土の中からざん訴ばはたす。鳥殿とは此鳥の事か、めぐぢり眼に墨染の羽織、足は金火箸の様な足持ち乍ら、シカンコカンと泣く聲聞けば、深山奥山其奥山までも、飛びこゑ持ち乍ら。之れで鳥

コチャ構ひなさぬな。

○島で名所はかづさの岩戸、根からはえたか浮島か。
○道行き岳にエ、岳に白雪や朝日で解ける、ヨイヨサテナア、解けてエ、解けてながれて八島に下る、ヨイヨサテナア、コリヤサコリヤサア、八島エ、八島女郎衆のヨイく化粧の水、ヨイヤサテエナア。

(南高來郡)

○對州立が嶺、御番所がなけりや、連れて行こぞや長崎へ。
○文は片手に目に溜め涙、月を詠めて思案顔。
○兎角邪見は風ゆる波も、船に思はぬ氣がねする。
○櫛はとれども心のもつれ、云ふにいはいはれぬもつれ髪。

(對馬)

○釣鐘おろして鶏伏せて、様と話がして見たい。
○磯の鮑を九つ集め、ほんに苦界の片思ひ。
○指を切らうと云うたは嘘よ、金が無いなりや手を切らう。

ぢよはしやんと腹かいて、わしも驚の様な身を持ちたなら、田原たにしめは一つも置かん。(壹岐郡)

方言 詞

○長崎の山の端に入る月はよか、コンゲン月はエツトナカバン。(長崎)

○螢虫、晝は草葉に身をかくし、夜は小道に火を灯し、

忍び男の月となる、さてもやさしの螢虫。

○櫻花、菖蒲に似たる杜若、私しや御前に水仙の、外に殿御は梨の花。

○竹になりたやしちくの竹に、もとは尺八中は笛、うらはそもじの筆の軸。

○芝になりたや箱根の芝に、諸國諸大名のしき芝に。

(長崎市)

○嫁御持たるば多比良から持ちやれ、多比良土産にや蟹貰ふ。

○温泉岳の横ツびれ、穴ンほけたア、構ひなさるなコラコラ、お前さんさ、する穴ぢやなし、コチャエ、く、

○好きな殿御と夏吹く風は、明けて入れたい蚊帳の内

○論語讀みく廓に通ふ、女郎も格子の内ぢやもの。

○矢上書出しや諫早とまる、あすは多良越え濱とまる。

(肥前)

○長手(崎山村長手郷)しほ女(美女)は鹽竈さくら、花はさけども實はならぬ。

○家中のトント達や(士族の若様)猫鳥(梟)鼻ぢやろか、晝はかくれて夜歩く。

○宇久島女の泣くのも道理、灘は三十五里浪の上。

○戸岐の能瀬は白浪や絶えぬ、わしの胸うちや苦が絶えぬ。

○戸岐はよいと朝日をうけて、前に辨天松茂る。

(五島)

五島すいとこ節

○今年しやへんな年、いざりが木登る、つんぼが立聞く、ゆし(唾)が物言ふ、ざとさんが川渡り。

○今年しやへんな年、脚絆紐なし、股引はせなし、じばんのすそつぎひとへの表換へ。

○世の中で淋しい物は日のまぐれ、しんぶり雨、山の中には一人旅、鳥の聲、鐘の音、ドン／＼川の水音。

五島三井樂よいやな節

○よいやなでさや、はや夜が明けた、話す間もない、ごよの風、いろじあなア。

同 追分

○海津觀音崎網敷くよりも、金を枕にねるがよい。

同 ごゑん節

○御縁ござらば又逢ひませうで、御縁ないなら暇ごひ。

○わしを思は、線香杖してじん(燈心)の緒をたて、豆腐下駄して通へさま。

よいさかにや節

○矢上名物、宿ではどぶ酒、中尾でにんじんごんほ、現川のからいにも觀音木場の瀧の水。

脇差さして、小鳥やねらは姉さんねろて、ねろた姉さんは糸屋のこゝしよ、糸屋一番伊達者でござる、かもじ九つ小枕七つ、入れて結はせて立たせて見れば、立てば芍薬、すわれは牡丹、あゆび姿は百合の花。○大事なく御手鞆様よ、金で包んで金紗でしめて、しめた所はいろはと書いて、今日今晚雨風吹けば、御手の下から、御手の上まであのや向ひの——さんへ渡しました。(長崎市)

○お天とさア、お天と一チさま、じやうせんじ、あかせの、こまくり、あけて、一百ばいこせ。

(北松浦郡)

○ろんほと／＼、舟は出て行く帆かけて走る、茶屋の娘が一寸出て泣かる、えつと泣かしやるな土産があるぞ、土産何々化粧箱七つ、それで足らんなら帯買うてあける、帯にや短し襷にや長し、一貫かしました。

○といた八幡まるまの子、若しも此子がむすこなら、八幡太郎と名をつけて、八幡太郎の袴には、梅の花のひらくくと、常盤櫻の花の蕾む時は、續けて下され紺屋

○矢上言葉は住たいろ來たいろ、遊すばんにろ、あらおとろし、やつせんなさ、あにいよたちや、なんばさりゆか。(肥前矢上)

4 童 謠

手 鞠 唄

○トン／＼／＼と長崎研屋町の、花の様なる權三と云うて、都育ちのやす／＼り姿、上にのほせて手習させて、寺が不調法で賭博を打つて、賭博うち／＼打負かされて、高い椽から突き落されて、楊枝鼻紙誰が／＼取つた、畠ちよんねんどの乙娘、親に三貫子に四貫、増して婆さん四十五貫、四十五貫の錢金は、安い米買つて船に積む、さッさ押せ／＼大阪まで、大阪土産は何々よ、一に香箱二に鏡、三で薩摩の板買つて、板屋葺して門建て、門の四周を廻つて見れば、四國坊主や道樂坊主、家の娘を盗んで逃げた、肥後の薩摩の端まで逃げた娘泣くな丁度。一貫つきました。

○前ば通るは千太郎ぢやないか、こてんほかためて、小さん、紺屋さんのおかつさんな白鼠／＼、よんべこらいた花嫁女、奥の座敷にすわらせて絹の小袖を縫はせたら、涙ほろりとお泣きやる、何の不足でお泣きやる、わしの弟は千松で、七つ八つから金堀りに／＼、金は堀らでな死んだけな、一年待てもまだ見えぬ、二年待つてもまだ見えぬ、三年ぶりの、夜の夜中に狀が来た／＼、狀の上書きや何とした、小太郎／＼小錢やろ／＼、小錢とらなで死んだけな。

○とん／＼た／＼はだれさんよ、新町米屋の儀平さん、今頃なんしにおいでたか、草履がかはつて替えに來た、お前の草履は、何じようじよ、猪のし、かのし、皮のじよいよ。(長崎)

子 守 唄

○おん婆か庄屋に舟買ひに、舟はかはずに馬買うた、馬は何處に繫でか、一本松の木の下、何と何とを食はせたか、去年の稗から今年の粟がら、十把許り取り食はせた。

○ねんねが守は何處ら行た、あの山越えて里へ行た、里

の土産は何々か、簞笥に長持、挾箱、挾箱拵らへてや
らるるね、歸でも來でも云はつしやるな。

(南高來郡)

○しよんどんくしよんどんよ、ねんねこんほう、とこ
さんせ、あしたは早うおけさんせ、いし〜おかちん、
ついでおこ、ねん〜ねんねよ、おう〜おう〜
よ。(壹岐郡)

遊戯唄

○螢々、池の水を飲むなよ、飲むなら柄杓とたんごと持
て來い。(長崎市)

○お月さん〜、何故出らッさん、十五夜さんから憎ま
れて、其所から星や出らッさん、後々居るは誰よ。

○草履かん隠しかん、かたらんものは、い〜や〜龜の
子、紅つけ紅つけ揃うた。(南高來郡)

螢狩の唄

○螢け螢け、そつちの水はくそ水、こつちの水は上上水、
一寸さがれ、二寸さがれ、三寸目には、ほつたり。

(肥前五島岐宿村)

はる。(南高來郡)

三 熊本縣

1 祝賀歌

婚禮唄

○親はどんなもの、しら茶にまようてノシコレ知らぬ旅
路に娘遣る、ヨカロカノシコレ、よつなかばつてん、
どうしよに、コツボヨカ〜。

○姑は無理なもの、石で袴を縫へといふ、石で袴を縫は
れるならば、山の葛が糸となる、ヨカロカノシコレ、
よつなかばつてん、どうしよにコツボヨカ〜。

(玉名郡)

酒宴唄

○牛深の前飛ぶ鳥、錢は持たずに買はう〜と、(以下
囃子)牛深三度行きや三度裸、戻りにや本渡の瀬戸か
ち渡り、鍋釜置いても酒盛りやして來い。

(牛深は天草島の南端にある湊、古くから船舶の往來繁く、

○紅ツかとバイ、のんのかバイ、オランダさんから、貰
ろたとバイ。

○歸いらうや柿の葉、もどらうや桃の葉、かいつてもど
つて鹽はかる。(長崎)

亥の日歌

○十月よ〜、十月亥の日にや餅をつく。ヨシヨ〜、
アーエンヨ〜、餅を搗いても客が無い。アーエンヨ
〜、亥の神様を客にして、わたしも相伴いたしませ
う。アーエンヨ〜。

○昨夜こらいた花嫁御、アーエンヨ〜、戸口ばちや出
らいたら、やいけふました。アーエンヨ〜、いけば
何のいけぞんのいけ。アーエンヨ〜。

○堀つて下され姉ご様。堀つてやるこちや安すけれど、
三日またんせ堀つてやる。三日待つ、こちややすけれど、
三日待つ時やうみかやる。アーエンヨ〜。

此の歌は大屋地方に流行し、十月亥の日例十三四歳以下
の子供地方組々に別れて、石を蔓にてく〜り、其上に草
花を飾り、ドーヅの如くして、歌をうたひつ〜つきよ

絃歌の調轉た旅情をそ〜るものありと)

○ドッコイを歌うたりや二階からほめた、歌ぢや飯や食
はぬ、御前ぢや無し、ドッコイセのせなかにや炙たら
け。

○ハイヤエー、ハンヤ〜で今朝出た船はよ、どこの港
か、マー三角つ〜(以下囃子)銚子持て來い爛つけて、
數の子持て來い醬油かけて。(天草郡)

嫁入歌

○親はどんなもの、柴茶に迷うて、ノシコラ、知らぬ他
村に娘やる。アラヨカ、ノシノシ、ホツホヨカヨカ、
良うなかばつてん、どうしゆうか。御勘忍々々々。

○今年始めて姑婆々添へば、ノシコラ、石で袴を縫へと
云た。アラヨカ、ノシノシ、ホツホヨカヨカ、良うな
かばつてん、どうしゆうか。勘忍さい〜。

○石で袴が縫はれぬならば、ノシコラ、山の松葉が針と
なる。アラヨカ、ノシノシ、ホツホヨカヨカ、良うな
かばつてん、どうしゆうか。勘忍さい〜。

○山の松葉が針となるならば、ノシコラ、山の蔓が糸と

なる。アラヨカ、ノシノシ、ホツホヨカヨカ、良うな
かばつてん、どうしゆうか。勘忍さいく。

○山の蔓が糸となるならば、ノシコラ、天の村雲が綿と
なる。アラヨカ、ノシノシ、ホツホヨカヨカ、良うな
かばつてん、どうしゆうか。勘忍さいく。

附記 本俗諺は嫁入りの際、途中友達及び同伴者、拍子を
揃へて歌ひ、前方に送るものにて、中流以下に行はるゝも
のとす。されど上流社會の嫁入りにも往々行はるゝことあ
り。

(玉名郡)

よいやな一節

よいやなぶしは其數頗る多く、類別すれば左の數種とな
る。

元服ひもときなどに祝ひとして謳ふ類。

○祝ひめでたの若松さまよ、枝も榮ゆれや、葉も茂る、
枝も榮ゆれや葉も茂る。ヨイヤナー。

右は婚禮の席にも謳ふ。

新嫁新婿其他家人への祝ひの謳ひ。

○これのお家に入りくる嫁は、黄金枕に錦の蒲團、末代

お前さんにも押します。ヨイヤナー。

男より女に盃返すとき。

○わしは大阪船頭がむすこ、風のないのにや船出しやし
まい。元のみなとに押しつくる。ヨイヤナー。

酒宴の際客より謳うもの。

○わしに下さる肴がなくば、胡椒や山椒や苦瓜なりと、
油でこないて下しやんせ。ヨイヤナー。

同主人の謳うもの。

○まれなお客に何がな御馳走、師走笥冬なる茄子、まだ
も御馳走は胸の中。ヨイヤナー。

新築落成の時大工に謳ひやるもの。

○これのお家はようたちました。柱白銀桁まぢや黄金。
軒にさがりし金すだれ。ヨイヤナー。

家の繁昌を祝ひ、家人の爲に祝詞を述ぶる等の歌は類
多し。

○これの座敷は祝ひの座敷、鶴と龜とが舞ひ遊ぶ、く。
ヨイヤナー。

○これの小坪にや植木がござる。一の枝には大判小判、

長者と祝はんせ。ヨイヤナー。

○玉のやうなる息子を持つては、夕日輝く嫁とりするて、
嚙や親様およろこび。ヨイヤナー。

○一度茲に来て見れば、こゝは祝言祝ひごと、二度こゝ
に来てみれば、二親さんのおよろこび、三つ見事によ
うでけた。四つ嫁さんのおきりやうは、五つ出雲の神
さんが、結び合せた縁ぢやもの、六つむこどのなるな
らば、七つ何事ないやうに、八つやはらかにあたらん
せ。九つこゝに来てたほどに、十をこえんと居りなされ。
ヨイヤナー。

娘を嫁にやる親より。

○蝶よ花よと育てた娘、今宵あなたに上げます程に、末
はよろしく頼みます。ヨイヤナー。

同じくめとる方の親より返し。

○蝶よ花よと育てた娘、今宵こちらに下さる程に、さぞ
やおあとが淋しかろ。ヨイヤナー。

客に盃をすゝむるとき(女より)。

○わしは大阪船頭が娘、船も押します船も押します。

中の眞木は錢と米。ヨイヤナー。

○これの御庭にや小鳥がふける。何をふけるか立ちより
聞けば、御家繁昌とふけります。ヨイヤナー。

○これの小坪にや井戸掘りまして、水は涌かでな金が涌
く。ヨイヤナー。

其他にも種々なるものあり。

○こんな田舎に名所のお客、お出で下さる有難や。ヨイ
ヤナー。

○今宵お客は皆牝鶏か、時を知らぬか、謳はぬか。ヨイ
ヤナー。

○これの御家は祝ひの御家、庭は米つく、御前ぢや碁う
つ、店ぢや手代が錢はかる。ヨイヤナー。

○こよひあんだの御とりもちは、金の盃、黄金の銚子、
下さる御酒は保命酒。ヨイヤナー。

○正月のく、二日の晩の初夢に、扇子の要に池を掘り、
池のめぐりに田を堀つて、一かな植うれば二千石、二
かなうれば、四千石、三かなうれば數知れず。酒
につもれば泉酒、山につもれば富士の山。ヨイヤナー。

○正月の〱、二日の晩の初夢に、白き鼠が三つづれに、又三つづれに、むつづれに、先き行く鼠は金くはへ、中行く鼠は米くはへ、あとの鼠のいふことにや、これにもお家の福ねずみ。ヨイヤナー。

○正月の〱、二日の晩の初夢に、衣更山の楠木は、切りてつくりて板にわき、舟を作りて朝おろし、帆は金欄のまきものに、手綱に綱は戀の絲、舟のへさきに松を植ゑ、松の嵐で行く時にや、千里萬里は一日に、急けばお江戸の品川に。ヨイヤナー。(阿蘇郡)

名附祝歌

元服の時にうたはる。

○春の光りに烏帽子屋五郎大夫ひとり姫、公卿の交り序ひらき、職士なれば烏帽子折り、ゑほしも段々ござります。折り烏帽子立烏帽子なしうちゑほしもござります。中に立てたる左り折り、之を着する人は又源氏の大將左馬の頭父義朝の八男目、堂盤腹にて三男目、當時鞍馬に住居する牛若丸にて候へば、着せて姿を眺めたい。(葦北郡)

下から龜がはひ登る、上から鶴が舞ひ來る、そこで鶴龜五葉の松。

結婚、淨曆等祝儀の場合に歌はる。

(球磨郡)

○たかさごよ〱尾の上の松に白くりて、其枝とりて杵造る。祝ひめでたの餅をつく、其日祝に肴なし。のめや大黒、うたへやゑびす。中に酌とりや福の神。

○高砂や〱此浦舟に帆をあけて、月もろ共にいでしほに、波の淡路の鳴かはや、遠くなるみの沖過ぎて早すみのえにつきにける。(天草郡)

2 舞踊歌

盆踊歌

○盆の三日にをどらぬものは、腹に三月の子がござる。
○花の内の牧、名高い仲屋のおふでさん、縹致は十人並あるなれど、すこしやもじどりが、悪るござる。
○様に貫たや三ツかさもろた、一つア雨傘、一つア日傘、一つア様さんのまねさがさ。

潮來歌

○年の始にさて飾りもの、代々ものもち鶴の羽に、串柿かけだし幸木、門に立ちたる松と竹、小枝に遊ぶ鶴と龜、番ひ蝶々かはらけに肴にや數の子のせぞんほ、末は鶴龜五葉の松、萬歳あくるといはうたる。
祝日にうたはる。(葦北郡)

祝歌

○昔の昔の又むかし、千年よりもまだむかし、萬年よりもまだむかし、昔の人のやさしさや、扇の要に池を掘り、池のぐるりに田をひろめ、其田になほす早稻の稻、一もとなほして千石ござる、二もとなほして二千石、三もと四もとで石づもり、石につもれば四千石、榊は白銀とかきは黄金、金の依にはかりこむ。ヨーシユンガエー。

○世間の方を見廻せば、露とめうがを植ゑそだて、どれがをしやふやら旦那やら、小庭に泉水堀らせたも、中に築山つかせたも、五葉の松を植ゑ育て、一の枝には錢がなる、二の枝には金がなる、三の枝には妻がなる、

○様にあふとて篠はこ投げた、庭の篠箱二度投げた、庭の篠箱二度なぎゆよりも、日和やよいかと出てござる。

○わしが様やんな、これから東、一里隔て、よその村、よその村から御苦勞でござる、わたしや寝て待つ罰かぶる。(阿蘇郡)

○あのや浦島さんな、おかめにうちのり龍宮行き、肌もはなさぬ玉手箱、浪にゆられて浦島妙けんじ。

○様は、お江戸の日暮し御門、見れば見るほど見とござる。

○さまにもろたや真紅の袴、かくれや名がたつ、かけねばすたる、どこではれせうかこのたすき。

○さまにもろたやしんくのてまる、打てば名がたつ、打たねばすたる、どこではれせうかこのてまる。(阿蘇郡)

○是れは古神代の昔、うそか誠か話の傳へ、國は播州だ、いもつの浦、西の宮なる三郎殿は、あれなふしぎは靈氣をうけて、遙か近江の彼の湖に、いんによあつまりのり入りせしと、竿をおつ取り波路にゆらば、浪は靜

かに底清くして、茲にのぞみの釣りばりせんと、来りてつばりゑびなる沈む。金の釣り竿五色の絲で、金魚島鯛釣り上げ給ひ、これを五色の御臺にのせ、君の御前と差上げ給ふ。直に神よりのたまふよりも、よろづ衣服は絹布のすいに、綾や錦や金襴どんす、奥はもよほす三段九こん、御家高砂大島臺に鶴と龜との相生の松、祝ひませうと扇子を持ちて、世にもめで度いためしがござる。いざやこれにて世はまさらじと、御家繁昌と扇子を持ちて。

○尾張大根は、かりながら、聲はた、ねど口説いて見ませう。ヨイヤサー〜。(八代郡)

○盆なはつてかす子供がもぞや、子供嘆くなまだいづる。○だんだら提灯燈した、狐の嫁入鮎の仲立、サツサラホウ〜。

○音に聞えし参りどころ、安藝の國宮島参り、宮島参りの景にこそ、参りて見ればやら見事、うしろに高き山あり、前の欄干に海あり、海の中に波あり、波に権現お立ちあり、権現よりも日表に、五葉の松こそ見て來

君入れて、なんじ灘より押し流されて、此處の沖には五日はゆられ、其處の沖には七日はゆられ、流れつゝたが淡路の島よ。島の大夫の御目にかゝる、うつろ船とは話しにやきけど、ほんに見た事今度が初めよ、拾ひあけてくづし見れば、中に立派な姫君様よ。頭に天冠ゆらくさけて、其日〜の食事を聞けば、そてつ圍子やくくどの菓子よ。菓子の中でも上菓子ばかり。一つあがれば七日の食事、二つあがれば、十四日の食事、其れは立派の食事でござる。國は何處か名はなにがしか。國を申さば耻かしけれど、元は源氏の公卿の娘、少し許の身の誤りで、うつろ船から島流された。あらば大夫も之れ聞くよりも、國に歸るか縁付きするか。うつろ船から流されたから。二度た我家に歸りはならぬ。御せわながらも縁付きたのむ。おらば大夫もお喜びで、ほたん長者の弟嫁に。(八代郡)

君様太鼓踊

○君様の御門に鶴が巢をかけた。世は萬年と鶴がさへづる。

たよ、神の植木がお手松か、お手松ならば歌をかきゆう、歌が詩によみ聞かしゆう、空飛ぶ鳥に結ばせて、思ふ君に説かしゆう。(五家莊)

牡丹長者

○牡丹長者のいはれを聞けば、家は三階八つ棟作り、前の高石高壁垣で、内の様子を細かに聞けば、庭に築山泉水堀りて、金魚銀魚の鯉鮒浮かす。それを眺める長者の威勢、弓や刀や槍長刀や、千疊座敷にかざらせ給ふ。赤き錦の幕引きしほり、それを眺める長者の威勢、鷹七つをみゆうと乗馬五匹、若子三人設ける程に、嫁を三人取らねばならぬ。姉嫁殿の最初を聞けば、朝日長者の先づ一人娘、中嫁殿の最初を聞けば、北山長者の先づ一人娘、弟嫁殿の最初を聞けば、元は源氏の公卿衆の娘、少し許の身の誤りで、うつろ舟から島流された。紫檀黒檀唐木をよせて、京の町ぢゆうの大工をよせて、大工十人七日に成就。さても出來たやうつろの舟が、ひどろさまにはちゃん等かけて、夜と晝との界が分る。金と銀との千よ一つかいて、中に立派な姫

○君様の御門の中に松植ゑて、世は末代と鶴がさへづる。○秋の田の刈穂をあけて一、二、三、世は満作と鶴がさへづる。(球磨郡)

中原樂歌

是は郷社神事の際、庭前に圓陣を作り、一齊に唱ふるもの。

○天の岩戸の神かぐら〜、月に六度の神樂より、千代萬代の神樂より、御伊勢踊りを踊りて慰めぬれば、國も豊に千代も榮ゆるめでたさや。
○東は關東奥までも、諸國盡しの人迄も、まゐり下向のめでたさよ。御伊勢踊りををどりて慰めぬれば、國も豊に千代も榮ゆるめでたさや。
○南は岸上天王寺、江國波國の人迄も、まゐり下向のめでたさよ。御伊勢踊りを踊りて慰めぬれば、國も豊に千代も榮ゆるめでたさや。

○西は住吉天王寺、老若男女に至るまで、まゐり下向のめでたさよ。御伊勢踊りををどりて慰めぬれば、國も豊に千代も榮ゆるめでたさや。

○北は越前加賀能登や信濃越後に至るまで、まるり下向のめでたさよ。御伊勢どをりを踊りて慰めぬれば、國も豊に千代も榮ゆる目出度さや。(阿蘇郡)

棒踊歌

呼出し

○おせろは山で、おせろは山で、ヤソくヨナサ、まよーだハ、え川。

○鎌倉の御所のお庭の十七小女郎酌に出た。目につこばつれて行かのせ、わし諸共に、竹崎のはて迄も、エーそら。

○矢山で、ヤレおしろは山で、イヤソレハヨードナサヨ、まえへくくのヨだハ、えへくくかハ。

○よが寺の徳よが寺で、ソレハヨードナサ、まえへくく、の竹よやよえへくく、のよをしやくや。

(八代郡)

庄屋殺

○今年や子の年大星な年よ。もとよ肥前な水かたけか、田作畑作日にやけます。此處の上村お庄屋様は、親

親の譲りの大段平も、鞘をはづしてねたばをつけて、三つになる子をひへさしとめて、軍神ぢやと血祭しませう。夏の頃なら身かりくと、綾の鉢巻黄金の襷、さつさ行きませう甚平殿よ。前に立ちたる姿を見れば、巴御前か薬師の神か。夜の夜中に庄屋と急ぐ。急げや程なく庄屋に着いて、夜の事なら門つめござる。夜の夜中に戸をとんとんと、夜の夜中に戸を打つものは、公儀の使かふれ状持ちか。公儀の使でもない、ふれ状持ちでもない。晝の喧嘩の仕掛けでござる。あんな手筋ぢや勝めはないが、命助くる甚平殿よ。なんと言はんすお庄屋殿よ。喧嘩しかけて是迄来たが、そこでお庄屋の兄息子殿が、八丁掛の臘燭出して、四方八方に火をともしされる。火をともしられや晝よりあかい。そこでお庄屋の兄息子殿が、斬りか、ればお龜がむかる。勇士と勇士の戦なれば、暫しが間は火花をちらす。一手後れて兄息子殿は、右のかひなを打ち落された。左のかひなも打ち落される。上へ上りて首打ち落された。そこでお庄屋の二番目殿が、此處にはやらぬおる

子三人水見て廻る。今年計りは取留めむと、此處の下村甚平殿も、是も同じく水見て廻る。甚平上田で下田が庄屋。甚平上田は干ごらがたちて、庄屋下田は笹浪ぐひて、そこで甚平が様子を語る。お前其田が三反七畝、わしが此田も三反七畝、お上納拂はばかりはないが、水は分け取りしませうではないか。水は入れ勝ち喧嘩はし勝ち、頭撲れてもど打たれ損。そんな無理するのが、庄屋か。人のけんくわも止むるが庄屋。役にたてつく卑怯な人よ。向は三人味方は一人、哇を枕に打ち臥せられて、濁り泥水顔振りすしで、蹶にすがりて我家と急ぐ。内に戻りて女房のお龜、早く出て行け子連れて行け。妾に行けとは邪見でござる。様子聞かねば妾や出て行かぬ。そこで甚平は様子を語る。今日は上村お庄屋殿と、水の遺恨で口論したぞ。向うは三人味方は一人、四十九の撲ちなやされた。蹶にすがりて是まで来たが。仇討なされ助太刀しませう。妾も義理ある武士の子なれば、二年三年習うた手筋、一に真劍二になぎなたよ、三に小太刀の受けまへ覚え、

んに流儀、下段で来るのは中段で下す、中段でくるのは下段で落す。飾り置かれし六尺の棒、打つてか、ればお龜がむかる。一手おくれて二番目殿も、右のかひなを打ち落された、左のかひなも打ち落された。上へ上りて首打ち落す。さらばお庄屋はそれ見るよりも、飾り置かれし大太刀持つて、斬りてか、れば甚平がむかる。勇士と勇士の戦なれば、暫し間は火花を散らし、一手おくれてお庄屋殿は、一手おくれて千手の弱味、右のかひなを打ち落される、左のかひなもうち落される。そこで甚平が様子を語る。庄屋するるとて貪慾するな。我れは此世のみせしめと置く。手なし庄屋と笑はりゆよりも、お前手にかけ殺してくれろ。

(以上庄屋殺)

(八代郡)

○年はとりても心は一つ、古き櫻に花がさす。サーレハエー、コレハエー、かはばたいしくおこせば、かにく。かにのなまやけは、食傷のもとく。

(球磨郡)

武者踊

○このには参りて見れば、やらみごと、しろがねしらすみ参るにはかな。

○此家はたからの家とき、そろへ、しろがねはしらにこがねはりかな。(八代郡)

白太鼓歌

○オーめでたいやく、ハルワイネソライアア、天の岩戸と申せしは、日本國中くれの暗、七七七夜や舞ひをどり、ハリワイニヤソライ、其時日本國中の神々が、春日白鬚大明神、肩には何を附きゆか。柳の内縁、裙には何を附きゆか。裙には松の内みどり。ハリワイネソライ、踊りよければ自ら、其時扉を開いたりや。ハリワイネソライ。(葦北郡)

都入歌

○をんごく出羽にかくれなき、佐藤莊司の御館、六萬餘騎勢揃へ、都軍の事なればいんしゅう軍のかど入りに、わかぎみさまの御上覽に、六萬餘騎の其中で、佐藤莊司の物語り、沖に鷗の立つときは、敵は船と判ぜられ、月夜鳥はいつも鳴く、暗夜鳥の鳴く時は、敵は山と心

得て、深く用心いたされよ。群雀のさわぐ時は、心を静に持つべきぞ。仇の命がすたるぞえ。言ひ置きするもこれまでぞ。あづまをさして急がれよ。

雨乞又は落成式祝勝會等の場合に踊らる。(葦北郡)

太鼓踊歌

○これのお國のちよ女様、十九で九よみの布織りて、一月さらえて蟬のごと、二月さらえてさぎのごと、三月さらえて雪のごと、紺屋くを望まる。丹後紺屋を望まる。染は何かと尋ねれば、肩にはぢんちよ籠の鳥、裙には早船五葉の松、祭禮踊を踊らうや。祭禮踊と申するは、天竺までも聞えたり。さてさむらひの花見には、天竺までもきこえたり。

○會我の十郎五郎は、豊後のぎをんに初まるり。何が望みで参らる。まが望みで参らる。其ころまがなくして、扇をまことに立てさせて、十郎どのは七ばん、五郎どのは八ばん、十夜四ばんのけさかけばん。

○おとに聞えし羅生門、さて又きこえし大江山、大江山と申するに、きじんがすんでわざする。太鼓打ちて

旗が二千本、あやの旗が二千本、雨は降らねど、さめき渡る。舵に拍子をそろはせて、都に昇る、ぎよいくだり。

○大廣間の景を見てやれば、弓矢揃うて胴甲。おほみうまやの景をみてやれば、オーこれやほどのごかれいは、七間みまやに駒立て、中に立てたるしんのくろ、ひいての門の夜あけには、よあけがたの横雲。

○豊後の國の金平様よ、八萬餘騎で御たちあひ、立花殿をおせめやる。立花勢は少しの武士で、槍と太刀とで手向ひ召せど、無勢に多勢で手も合ひ召さぬ。

(球磨郡)

檢校踊經文

○釋迦、毘沙門、阿蘇、十二區大明神、比惠、猿野、五尾神々の長崎の御神、保小の谷の護神、小川内、三多良伊の護神大良、下登屋、上登屋、藤の尾、灰木、小屋の谷、道級小山、高灰口、小谷々々の護神、水神達はけあひの護神、七曲りの護神、常に此經六字奉る諸人萬人、富貴萬福圓滿息災諸願成就、うやまうて候。

にあたりたる、金時殿はほーそどんと綱どんと、渡邊どんと、五人の人をめしつれて、大江山へかかりある。いくさの装束花やかに、鬼と軍をなされしが、鬼の打首あな見事、浮きつ流れつあな見事。引いてもの、夜明けには、お庭の遊びは引たよし。

○島原は近く名所とうち見えて、うしろは松山前は海。島原の松の縁に縁はへて、ひげよなびげよ島原の松。島原の町のこまの霜ぶけば、いつもたいせんふみと天草。

○りうざん王のしろのまはりがはちりなり。な、へのもがり。うしろはこがは、前はだいがは、西と東はしらたきなり。

○大日の本なれども照りもせず、お、さいとてに、あめがした。

○御馬屋に駒立て、中にたてたる眞の黒、駒が参ると板を踏む。七ひき馬屋に駒立て、中に立てたるの眞黒、敵が見ゆると板を踏む。

○若殿様の、おのり出し、舟が千艘に帆を上げて、錦の

終りの謡

○ことしや満作穂に穂がさいて、君の恵にゑぐちをかけた、末安樂の御世となる。

○阿蘇山岳に登りて見れば、おとうつ山の布の水、

(球磨郡)

獅子踊歌

○むかうか山に鳴くすゝ蟲は、暑さになくか、寒さになくか。朝草きりの目をさます。

○あんどか山にあるとは聞けど、まだ見んものは百合の花。

○土佐より船が三隻や上る。先きのは金よ、後のは錢よ、中のは土佐の早米よ。(球磨郡)

3 雑 謡

五家念佛

○去年までは人の上よと思へども、今年になればまさる我上。イヨサ。南無阿彌陀佛。

○蜀魂ほとこすけに極樂の鳥ならば、親の行方ゆくへを語り聞かせよ。

にー絲はへてー、引かば、イヨ、ひかばなびげよ島原の松。(八代郡)

○春の初めの梅櫻、花の梢の鶯が、雨を戀しと音を轉る。霞がくれの時鳥、雨を戀しと音を轉る。

○殿の御門に鶉がふける。何とふけるか立ち寄り聞けば、今年や満作よしほがなびく。

○大阪の仁の十がさいたる刀の鞘が朱鞘で、下ゲ緒が眞紅。

○瀧の下の岩つゝじ見おろして見るばかり。

○嶋原ちごのご、しゆの忍ぶには、いつも大舟ふみとたまづさ。(葦北郡)

新地歌

○新地お役人なこのしろの無鹽、焼かにやもたえん夏の魚。そらいかゝほた餅やきなこまめさい。ことし始めてお新地に出たれや、がたのいな道やまだ知らぬ。おどんがえ来て見れ道ばたじやるけん、茶わきやゝてまつとる。よらんがなるきや、猫まじやしゆすびん。

(熊本市)

イヨサ。南無阿彌陀佛。(八代郡)

肥後琵琶端歌

○一花いちげひらいて四方の春、皆あさなれやく、門松祝う二柱、ぢつと引寄せ御七五三繩、だいく子孫ゆづるはの、にほひなつかしとびの米、影をよろこぶ鏡餅、かみとき流す串の柿、伊勢蝦飾る蓬菜の、萬々石の寶船。

○積み込む数はほん俵、うちのせ曳けや牛車。昔は神功皇后の、異國退治の神いくさ、蒙古の首を打鮑、姿を返す蜜柑かな。煎りこがしたる鬼豆の、鬼は外内は打ち出の小槌なる。

○垣つめの障子にかをる庭の梅、雀は竹に戯れる、松には鶴の巢をくひて、君の齡は幾千代の、限りもあらぬ壽の、祝ひつきせぬ初春に、御倉は珠玉満ちくゝて、治まる御代のめでたけれ。(葦北郡)

雨乞歌

○しまばーらは、イヨ、ちかくーめーいしよーとうち見えし。うしろはー松山、前はうーみ、松のーみどりー

○今年始めて御新地に出たら、ぶりの荷ひみちやまだ知らぬ。腰をかゝめて唄でたつ。

○雉子も鳴かずばうたれはしまい。わしがとゝさん口ゆゑに、今は萩原の土堤柱どてはしら。(下益城郡)

よいやな節

○帯になりたやあなたの帯に、晝はお腰に巻きたてられて、晩はあなたの寝間の伽がイヤナー。

○あなた弓竹、わしや其矢竹はなすなか間か、おもしろい、ヨイヤナー。

○わたしやあなたに願ひがござる、わしが願を叶へたならば、水に晝をかく、岩で花咲かせ、しちく小竹に物云はせヨイヤナー。

○こんな名所に田舎のわたし、来てはなぶらる恥かしやヨイヤナー。

○君が心が誠ぞならば、野道畦道露ふみ別けて、わたしが方から通ひませうヨイヤナー。(阿蘇郡)

琉球歌

○旅の立出観首堂、千手観音伏し拜み、黄金取り立ち分る。

○袖に降る露おし拂ひ、おほじよ松原歩み行く。行けば八幡崇福寺。

○三重路高橋打渡り、袂を連ねて諸人の、行くも歸るも中の橋。

○沖の寺迄親子兄弟連れて別れる、旅衣、袖と袖との露涙。

○船の纜とくくと、船子勇みて、真帆引けば、風はまともに午未。

○又も廻れば、御縁とて招く扇は見え薄く、さんば呷を後に見る。(熊本市)

おりやんこ節

○高田原のい物あ、ゆもじの上からまいだりして、頭ねぢごふらでせんつき屑煙草。オリヤンコく、リヤンコく、リウケガニヤ。

高田原は封建時代下級士卒の家宅多数を占めたる地なり。ゆもじの上からまいだりしては、上半身裸體の意を表し、

樟は此村にある名物にして、樟の大樹なり。甘藷干大根を此地の名産とす。鶯の観音は古來靈驗あらなる観音と稱す。此地山なるを以て多く牛を使用す。故にこつて牛をかふか。

○上町名物あ春白きなつたれや小ひまがござらぬ。のみとりし、とりちよと出てくぢらほす。

上町とは高橋に於ける貧民の菓類、其生活の様を歌ふ。

(飽託郡)

しよんがら節

○正月の二日の晩の初夢に、新造つくりてけさおろす。百千反のまきばしら、あやや錦を帆に巻いて、手繩水繩は琴の絲、ともに大黒、おもてにゑべす、十二おふな玉まん中に、とものみこしに松植ゑて、松の嵐を帆にうけて、寶が嶋とぞ走りつり。色々寶をつみそろへ、やるぞ晒の河口。シヨンガイ。

○一つ諺ひませう、はゞかりながら。ところは箱館すみやの舟よ。出はやの字机ゑちぜん、共に過ればすゑよしまるよ。末はよけれど今ふがわるい。出ては出も

あたまれぢごふらは、片外しと稱し、士卒の妻にかぎり結ひし頭髮、せんつき屑煙草は貧民の喫する屑煙草。

○高橋名物あ三本木をやつたりとつたり、御手にくひの立たぬがそれが名物ぢや。

高橋町は熊本の西約一里、三本木は松を割りたる薪なり。高橋は古來此薪を天草郡より輸入し、熊本に商ふを業とするもの多し。

○法華坂名物あ、わんく狸が、そら出たもう出た。かゝさんがお手引いて通ればちつともあぶなうない。

法華坂は新町より熊本城に上る坂にして、當時樹木鬱蒼、行人稀なりきといふ。

○春日名物あ、ほんぶらわい、ほんぶらわい。あいぢやにやつけ瓜もござります。巾着長なすび。

ほんぶらわいは南瓜を行商するふれ聲を云ふ。春日は熊本に近く、古來蔬菜の産地なり。

○松尾名物あ六本樟、大きなからいも、鶯の観音さん、こつて牛、干大根。

松尾は熊本の西一里餘、金峰山の裾にある山地なり。六本

どる、はせては流す。能登の福浦に又はせもどす。弘化三年お午の年よ、頃は七月なかばの頃に、二百七兩の金ぬすまれて、一つ人をば疑うてみたり、二つ船中又疑ごたり、三つ港をやさがしたり、四つよその船船止したり、六つ六十になるせんどさん、七つないたり、くやんだり、八つ役所に願を上げて、九つ小宿も又其世話よ、十問屋を詮議をしても、二百七兩の金の行方はまだ知れぬ。(玉名郡)

ほんほこ節

○汐日戻りに麥飯ひやかして、とろ、かくれば、オヤすましの顔で、オーサボンボコくニヤ。

○花の熊本長六橋から眺むれば、オヤボンボコニヤ、下は白川兩芝居、少し下れば、オヤ本山渡舟。オーサボンボコくニヤ。

○あのや浦島さんな龜に打ち乗り龍宮行き、わが釣竿を振りかためて波にゆーられ、オヤほんまのきやうてんじ。オーサボンボコくニヤ。(上益城郡)

十九文節

○一の谷まで行かしゃんすか。わしやなんほうでも離れやせぬ。邪魔になるなら今茲に、殺いてたもれよ我夫さん。サーナンデモカンデモ十九文。(阿蘇郡)

思案橋

○思案橋こえて来るはだれ故、ぢやう様故。

○小池の眞菰いつか穂にで、めぐりあふ。(八代郡)

流山歌

○よいとき生れた親の御蔭でく、よいほんくでみた。

○たちからの明神ましまさば、七日七夜の神かぐら、まひやすめどもつひにも大神どのはいれでもいれさせ給ふらんものかと、とかくしの明神ましまさば、おくせん萬歳の力を出し、天の岩戸を取つてひき破り、いつさい山のすぢよ。

○一方のとびらは、みのくにあふぎがはらになけさせたまふ。

○一方のとびらはもとのしづくに納め置く。その時日本國なかつくに朦朧月夜となりたまふ。(八代郡)

きみさま節

鈍太郎歌

○今朝の寒さに笠山越えて、露に羽織の裙ぬらす。裙のぬれたは大事はなえど、絹布羽織の紐ぬらす。黒い羽織に大紋つけて、行けば夜なく門に立つ。

○えいさどんが、承はつたか。寺の住持は坊主なり。ゑの子の母はめいんなり。と、とかいさん夫婦なり。柄付じよふけは古じよふけ。鼠けた走れば猫きつと見ます。鈍太郎でございます。(球磨郡)

地方特有歌

○宇土で名物轟の水、五色山、人は不知火、桂原、梅の生木の椽柱。(宇土郡)

○南關の四方のけしきをながむれば、東は小富士で南をがみ松、北は書院のネ土手つゞき中を流る、龍瀬川。
備考 小富士は本名大津山、一名舞鶴山といふ。此山は大津山河内守資基の城趾なり。をがみ松は加藤清正朝鮮征伐の歸途八人の戦死者を葬り、参拜の目標に松を植ゑたりといふ。今尙八つ塚と稱する墓の如きものあり。書院は加藤

○櫻木は冬は枯木と思へども、又來る春は花もさすらん。○櫻木は尾ごしに見ればなつかしや、櫻の下の露となりたや。(八代郡)

猿踊歌

○音に聞く、よし八代の徳の淵より御舟に召され、御舟の数が五百艘、御旗の数が一千本、十二の音楽たてさせたまへば、神もいらん佛もいらん。

右は相良侯、昔日參勤交代の節、八代より舟出せし景か歌ひしものなりと云ふ。(球磨郡)

螢がり

○夕風浪ふきよする澤水に、うつる螢のかけやすしき。

(天草郡)

おつや

○こひしさに山めぐり、早くもこゝに木原山、松山に龍田山、ちらと見染めし紅葉山、阿蘇山、ゆふだに、にほひ岳、わたしや根子岳、洞が岳、どんな口説は飯田山、うそぢやない、本妙寺山に茶白山、かたい約束中のぜいにや、石山木山に山鹿山。(下益城郡)

清正の城を範かれし跡と稱する高原にあり。此處に書院の松などいふ名残り。龍瀬川は關川にて、和歌手引に、龍の瀬川と見たるものなり。(玉名郡)

方言詞

○おても(女名)やん(様)あんな(あなた)此の頃嫁入したゆたしたばってん、五ンジャ(男名)どん(殿)ぐぢやべ(あばた面)れやるけん(であるから)、また(未だ)盃きやせんだった。村役、鳶役、肝煎どん、あふんとたち(彼人等)のおらすけん(居る故に)、後向うなつときや成らうたい。あかちやべつちや。(熊本)

惠美須送歌

大畑町に鎮座の惠美須、毎年舊曆の大晦日に宮を出でて民家に遷座せらる。依つて舊正月三日夜に至り、村中の若者惠美須像を箱に入れ、道々此歌を謡ひて社内に入る。

○花をもとめて小車にのせて、春の山路もエーヨサエーサラくと、ひかばなびきやーれ、ノホンホ、ン思ひに亂る、こひしはたれをやつれそふるよの。エ、!

ヨサ。(球磨郡)

福よし

○福よし、世よし、年よし。稻くらに、米倉に、寶藏の御倉に、福がとまるとお祝ひなさり。

正月元日より、五日迄の間に穢多の歌ひ來る歌なり。

(熊本市)

しよんが節

主として酒宴の席にて歌はる。

○めでたいこなたのお座敷に、白い鼠が三つ出た。又三つ出て六つつれて出た。小判なくはへてかねはこぶ。

これが此家の福の神。ナーシヨンガイ。

○西行法師の食い物は、豆腐の骨をば喉に立て、もしこれく女中様、之れに薬はないかいな。之に薬はだんく、數あれど、山にはえたる蛤と、海にはえたる松茸と、夏降る雪に寒なすび、水の黒焼き、火でといて、これが西行の疵薬。ナーシヨンガイ。(葦北郡)

裏の段々畑

○裏の段々畑に獅子が芋ほる、子じ、が芋ほる、し、芋

ほる、子じ、芋ほる、子々じ、芋ほる。ハートツズイタ。

○それをなんぐり返せば、芋がし、ほる、子芋がし、ほる、芋し、ほる、子芋し、ほる、子々芋子じ、ほる。

○裏の段々畑に鳩が豆つむ、小鳩が豆つむ、鳩豆つむ、子鳩豆つむ、子々鳩子豆つむ。

○それをつんぐりまんぐり返せば、豆が鳩つむ、小豆が鳩つむ、豆鳩つむ、小豆鳩つむ、小々豆小鳩つむ。

○裏の段々畑に、ぢーがごんほ堀る、子ぢーがごんほ堀る、ごんほ堀る、ごんほ堀る、ごんほ堀る、ごんほ堀る、ごんほ堀る。

○それをなんぐりかやせば、ごほがぢーほる、ごごんほがぢーほる、ごんほぢーほる、子ごんほぢーほる、ごんほごんほぢーほる。

○裏のせーたんほーにや(下水溜)どぢやうがによろく、小どぢやうがによろく、どぢよによろく、小どぢ

よによろく、子どぢよこによろつーく。
○それをつんぐりまんぐりかやせば、によろがどぢよつく、こによろがどぢよつく、によろどぢよつく、こによろどぢよつく。こによろこどぢよつく。

此歌は中以下の者の歌ふ所にして、種々の宴席に用ゐらる。然して比較的老人社會の集合の時多く用ゐらるゝが如し。

(熊本郡)

酒座歌

○盃はだんぶと受けし影見れば、四萬四千の倉ぞ見えけり。

○こよひの客はのしろの草とたとへます。押してかなはぬさすぞ盃。(八代郡)

4 童 謠

手鞠唄

○向へのザボンな梅の花、朝蕾んで晝開く、晩は凋れて門に立つ、門に立つ松ア何松か、千松か萬松か、まだ七つにならぬさき、御馬の上から飛び下りて、具足の

第三編 九州沖繩俚諺

○請取ましたく、大々大事の御手鞠様よ、金の御服紗に御包み上げて、島原は聞いて極樂見て名所、名所く、の鼻の高さが一尺五寸、あれよあなたの御袖の御下に御渡し申しますく。

子守唄

○ねんね兒よ、ねんね兒よ、ねんねこかつちり龜の子、龜は盗人がおつとつた、板ぎれ叩いてねんねこよ、ねんねこよ。

○お月様いくつ、十三七つ、七つで子もつて、子はだれ

抱かしよ、おまんにだかしよおまんどつちいた、高瀬の町に鹽買ひに、鹽は買はずに馬買うた、馬は何處においたか、一本松の木の下、何を食はせて置いたか、去年のひえがらと、今年の粟がらと、まぜて食はせておいた。(菊地郡)

動物の唄

○ほーほー螢來い、谷川の水呉れう、小柄杓持つて來い、汲んでやる。

○酒屋の蝙蝠酒吞ませう、焼酎のむかひ酒のむかひ、もちつと下ればまたのませう。

丙 薩隅沖地方

一 鹿兒島縣

1 祝賀歌

祝の歌

金のなる木節

○金のなる木を一本ほしし。植ゑて、ヨイく、育てて様にあけう。

○屋久の御嶽をおろかにや思ふな。金の、ヨイく、藏より尙寶。

まだら節

○酒にやもろはく、肴にやまだら、いかな、ヨイく、下戸衆も三つあがれ。

○常にやあがらずと、今宵はあがれ。そなた、ヨイく、御馳走に取り寄せた。

○五島平戸で立てたる櫓、取るはヨイく、大阪の新川

で。

金のなる木節、まだら節は家祝、船祝、網祝其他一般の祝儀の席上にて語る、歌謡にして、最初に「金のなる木節」を語り、引續き「まだら節」に移り、必ず相離れざるものなり。

家祝ひ

(熊毛郡)

○此の家のうちにやー、うれし事きくーの、やーうれしいこーと、(囃)「アーヨイヤサ」、きくーぞ。やーはなのやーよーなしたで、せんぐわんなもといえーて、やー千貫ーなもといえーて、やー萬貫もやーるよーなー。

(熊毛郡)

よろこん節

○いかななる大工が建てたやら、柱白銀、けた黄金、軒もたるきも皆黄金、黄金花さす。ナイヨエ。

○此日此夜の御祝に、床にかざりし松や竹、一の枝には金なる、二の枝にはでにがなる、三の枝には米がなる、でんやら米やら、なりーさがる、上から鶴が舞ひさがる、下から龜が舞ひ上る、鶴と龜との御祝に。シ

ヨンガオー。

右は一般の祝宴の席上にて歌ふ。

○此家は此家は、如何なる大工が建てたやら。ナンノイ
ナ。柱白銀、桁黄金、貫も垂木も皆黄金。こがね、
切り窓に簾。シヨンガオー。

此歌は家屋新築のときに歌ふ。

○目出たいものは、芋の種子、莖長く、葉も廣く、元に
や繁昌の子がさす。ナイヨエー。

○はんじやうの子がさすならば、幸ひよ、子供も數多に
もたされ。ナイヨエー。

○目出たいものは、そばの種子、花咲し、實がないて、
三角そろひが。ナイヨエー。

右三章は産兒の祝宴に歌ふ。又婚禮の祝にも歌ふことある
由。

よいこの節

(熊毛郡)

○先づ今日は祝ひとて、先づ吉日の日を選み、イヤドン
ドコヤ、座敷の内にはさかもりよ。臺の回りに松植
ゑて一の、イヤドンドコヤ、枝には錢がなる。其二の

○那覇の河に出るときは、てんまこぐくいさば船。(囃)

船の纜解くときは、舟子いさんで矢帆ひけば。(囃)

○風はまともに午未、那覇を出てから今日。(囃)島に
みならぶ三つの島、一つ見ゆるは霞かな。(囃)

○雲か霞か浮島か。あひに見ゆるは屋久、永良部。(囃)
けむり絶えずの硫黄島、佐多の岬に立ちならぶ。(囃)

○西を拜むはお開聞、またごしなだをすよくと。
(囃)内の山川へなりぬれば、番所改め相濟んだ。(囃)

○船の纜とくときは、舟子勇んで矢帆ひけば、(囃)風は
まともに午未、知林小島を後になし。(囃)

○富士に見まがふ櫻島、最早鹿兒島ぎよやの濱。(囃)ぎ
よやの濱から琉球見れば、琉球の新橋思ひ出す。(囃)

○かれよしの船はなだよしを乗せて、山も見えぬ、とな
かも見えぬ。針がしよーをあらす。

○鹿兒島の館は、お心よいかた、お盃たもる、琉球
でかたる。

○朝寝して起きて、手洗ひ鉢の水見れば、わがおかほの
鼻があるがふしぎ。(揖宿郡)

枝と申せしは、イヤドンドコヤ、金と銀との米がなる。
龜が歌へば鶴が舞ふ。イヤドンドコヤ。何とまゝをろ
かとえて聞けば、奥にや、オイヤ、お祝ひよといはひ
てまふ。シヨンガオー。

「いやつゞけてや、しめい」と囃して次の歌を諷ふ。次の歌
は略す。

琉球人節

(熊毛郡)

是れは徳川時代琉球の島主より、薩摩の島津侯へ貢として
琉球の物産を獻納するときの灘唄にして、始八章は其航路
の歌、以下は獻納濟みの祝宴の歌なり。

○物のみごとは那覇の町、赤いもの賣り、煙草賣り、ハ
イヤ、トンキヤン、キヤン、キヤン、キヤン、ハイヤ、
ピツピツピツピツピツ、白いものうり豆腐うり、黒い
ものうり紺地賣り、ハイヤ、トンキヤン、キヤン、
く、ハイヤ、ピツピツピツピツピツ、物の品々うり
拂ろて、寺や畑まぢや親と兄弟。(囃)

○つれて別る、旅衣、袖とそでのすよ涙。(囃)袖にう
くつゆおしはるて二度とかへらん那覇の町。(囃)

水汲文句

正月元日の朝、鶏鳴より初水とて汲み初む。一番水は唐芋
の根入り苾き杯云ひて競ふ。

○年男が年改まりて、年の初めに水汲み初をする時は、
南下りの堀川に、水は汲まずに黄金汲む、く。

(熊毛郡)

白おこし (又白搗は白祝ひ)さ始め或

○高砂の尾の上の松で白きつて、其枝々できねきつて、
千徳々萬徳々。

一月一日の夜明、白の祝物に向つて右の歌を三唱し、杵を
取りて白搗く眞似をなし、其白に祝ひある餅を貰うて去る
なり。

○年初めに年男が米搗き初めをする時は、東高砂が北の
野隅に立つたる、五代の松で白切つて、其枝々で杵切
つて唐の鳥と日本の鳥と飛や渡らんその内に、千徳々
萬徳々とつかせ給へよ、伊勢米、く。

○東こうさが山に立ちたる、尾の上の松で白切りて、其
枝々で杵切りて、唐の鳥と日本の鳥と、飛び渡らぬ内

に、搗かせ給はれ、伊勢の上米、伊勢の上米。

○東一さが山に立ちたるをへの松で白きつて、其枝々で杵きつて、鳳凰の鳥のおそまぬ内にさんさつつかせ給へ、七五三一、七五三二。(熊毛郡)

船祝歌 (一名綱さらへ)

○(詞)「ともへ〜」ともに申し。「何とうけたまはりませう、」時頃潮もよささうに御座る。「それ一段よう御座りませう」。(歌合唱)「やーざう〜」
「おも楨」「オットー」。「今の楨取つてさふらふ」。(歌)「やーらいめでたいな、めでたのわかまつ、枝もさかゆる、〜葉もしける」。「なほもめでたいな、御世はめでたの、帆矢帆も、うやみな、と〜どに、そよに、そよ〜と〜、吹いた嵐に乗りだす。それも船頭衆の仕合はせや。サーノ」。「佳例よしや、佳例よしの船に、なだよしをーのせて、船頭から船中衆みな佳例よしで」。

右船祝の歌は毎年正月二日の出の頃、船頭始め乗組員一

ろーよは「道理」の意、とびよは「鷹」のことならん。めーには「眼」のことなるか詳ならず。かへば「かれば」の訛。

○祝うて申す。こーれの御船に白銀楯を押し立て、黄金のせーびよくるませて、大帆にや綾錦、手繩、みなは琴の絲、寶一艘積込んで、寶が島に打向けて、思ふ港にそよそよと祝うて申す。(漁船等所有者の家を祝ふ歌)
○祝うて申す、こーれの御庭に、ゆ川を掘りて、水は湧かねども、泉酒の湧き候。白銀塚に黄金のくしやく、汲んでも汲んでも、盡きしはせぬ。祝うて申す。(井戸の在、家を祝ふ歌)

ゆがはは「井川」くしやくは「柄杓」なり。
○これの御寺のみうちには、うつでんこーづ、こーぶくろー、ゆはいのすーみーあるとや、つる龜がほろ〜
ーかんめこーでさふらふよ。四方のすみ〜にせんとかねを祝うて申す。(寺の門前にて歌ふもの)
○これのだんなさまーきんかたびらめして、おーびはにしき、かたなはひぜん、大小めされ、ふすま障子をひ

同甲板上に整列し、各所定の位置に就き、先づ船頭より初めて右の歌を誦ひつゝ、一切の船具を取揃へ、乗組一同之に和して船玉様を祭り、以て其年中航海の無事を祈るものにして、其式甚莊嚴なるものなり。而してこの歌は正月二日より以外には決して誦はざる定なりと。(熊毛郡)

正月七日祝歌 (くさいもん)

若きものども各戸につきて誦ふ。

○祝ひ申そ、〜。いつのよしな、今年はこの門松榮えた。そーれに榮えたる枝に鶯がとまつて、さえづるやうに、家の亭主、これのやどを見渡し見れば、四方のすみ〜の湯水酒の湧くごとく、黄金のびん白銀のひしやく、汲んでも〜盡きません。祝うてやほかほー。
○祝うて申す。こーれの門松いつよりも今年には木戸の松がさかえーた。榮えたるろーよ、西の方の枝にはとびよがとまつて、東の方の枝には鶯がさがつて、鶯がめーに生ひたる稻は、一株かへば千石、二株かへば二千石。そなたの宿を見渡し見れば、米の俵千石、粃の俵二千石、祝うて申す。(普通の家を祝ふ歌)

きあけて、こがねのさしまくらー、ひきあけみたれば、あかいこそでむす〜(生ひ)しろい小袖むす〜、六つなるちごにしよーがすすきむーすきたてがみ、おらきくのはな、はなおいきせて祝うて申す。(役人等の宅にて歌ふもの)

○祝ひ申さう。いつもよい、こーとしはーきどの松がーさーかえたーも、ろーりよ。西の方の枝には、とーびほがさがつて、東の方の枝には、うぐひす鳥がとまつて、鶯鳥のまへにー、おえたるいねは、一本かれば千石、二本かれば二千石、そなたのやどを見渡し見れば、米のたはらが千石、もーみたはらが二千石。とーびは満足祝うて申す。(普通の家の門前にて歌ふもの)
「祝ひ申す」と亭主に案内を述べ、左の通り歌ふなり。

○ヒョーソーラ、イヤソーロヨ、福歳物や、さうろよ。これの御亭主様の御屋敷は、何時よりも今年には門の松が榮えた。ヒョーさかえたもろーりよ。ヒョー四方の隅々に、泉酒が、たとへた。ヒョーたとへたもろーりよ。ヒョー白銀の曲け桶に黄金柄杓で汲みたとへたも

ろりよ。ヒョー西三條四條には白銀の山を築く。東三條四條には黄金の森を築く。ヒョー黄金花が蕾うで、
錢花が開いた。ヒョー開いたもろりよ。ヒョーこれの殿の御内に祝ふ物は何々。ヒョー錢と米を祝ふよ。
ヒョー祝ふこそやろりよ。ヒョー雪豊年の年ならば、とんび寶がとんび来て、鶴と龜が舞ひ来る。ヒョー福吉、萬福時あるとは冥加に叶はせ給へよ。ヒョーこれの殿の御内に丁度御祝ひ御籠めやれ。

○ヒョー久歳文ぢや候よ。ヒョー何時よりも茲年は、ヒョー門の松が榮えた。榮えたこそ道理よ。ヒョー是の殿の御内に、ヒョー錢と米を祝ふよ。ヒョー東三條四條には白銀の山をつき、ヒョー西三條四條には黄金の森を築く。ヒョー四方の隅に泉酒が湛へた。湛へたこそ道理よ。ヒョー白銀の曲り桶に、黄金のちやび杓で、汲み湛へたこそ道理よ。ヒョー鶴と龜が舞ひ来た。ヒョー三十二艘の千石船を積み込んで、えいやらざらりととき込んで、ヒョー町の御祝ひ御込めやれ。
○ヒャーこれにこーそや候よ。ヒャー福歳物や道理よ。

○何時よりも舊式の門祝ひ申す。(青年)ヒョ 何時よりも今年は門の松が榮えた。(少年)ヒヨ 榮えたもー道理よ。(青)ヒヨ 此の殿の御内に、鶴と龜が舞ひきた。(少)ヒヨ 福龜めして候よ。(青)ヒヨ 四方の隅々に泉酒がたへた。(少)ヒヨ たへたもー道理よ。(青)ヒヨ 錢と米を祝ふよ。(少)ヒヨ 祝ふこそやそふろよ。(青)ヒヨ 錢花が蕾で黄金花が開いた。(少)ヒヨ 開いたも道理よ。(青)ヒヨ これにこそやそふろよ。(少)ヒヨ さいもんや、そふろよ。(熊毛郡)

穂 垂 挽

一月十四日朝、團子用餅搗の時の祝ひに歌はる。

○米の穂もぶらぶらー、麥粟の穂もぶらぶらー、唐芋はごとごとーぶんどーささけは、ほつとせー。(熊毛郡)

蠶 舞 (一名このみやぢやう)

○これから申す、門から申す。此の御家は裕福の御家と、見掛け申すが、九十九かいの、このみやぢやうを舞はし舞はするさあーきに、綾をはへて、錦を擴けて、是から思へば、東の峠の朝平の木蔭の雉子鳥の雌

ヒャーこれの主の身内に、ヒャー祝ふものは何々。ヒャー金錢と米を祝ふよ。ヒャー祝ふこそや候よ。ヒャー何時よりも今年は、ヒャー門に松も榮えた。榮えたも道理よ、豊年の歳なれば。四方の隅々に、泉酒がたへた。ヤーたへたやも道理よ。ヤー黄金しやみしやくで、くみたへてやー道理よ。ヤー火の神、田の神、御門の神、ヒヨ三十二方の作り物、ヒャー祝ひこめてや道理よ。ヤー富貴自在みやうがに、かなへたまへば、ヤー西三町四町には白銀の山つく。ヒャー東三町四町には黄金の森をつく。ヒャーこれの御門の門を見てやれば、ヤー黄金の門がたしてや道理よ。ヒャー黄金花が蕾んだ。ヤー錢花が開いた。ヒャーこれの御庭の景を見てやれば、ヤー金銀の匱がかゝりける。ヤーよき豊年の歳なれば、ヒャーとんび袋飛んできて、ヒャーとんび寶置いて行く。ヒャー鶴と龜も舞ひ来た。ヤー是程目出度い祝儀を、御受けなされよ。ヤーちやうど御祝をこめなされた。御祝儀目出度し。
右の歌は、正月七日の夜、農作の祝として歌はる。

鳥の、右のおほりばね左のかざきり、おつとり合せて、一羽がひすくへば、千枚すーくふ、二羽がひですくへば、二千枚すーくふ。三千枚の子種をよーせ集めて、篤と産ませて、ありごになるときやーはいりや、いりやいと申す。つみらごになるときや、むつむつと申す。蟲に起るときや、雨桑も嫌はず、露桑も嫌はず、なごめになるときや、はいのまいと申すが、春駒は、夢に見てさや、ものうきもーのと、聞こえ申すが、龍の駒かよ。(テンテンと戸を)まいにまはせて、そーのまいのかたさは、あんまがはらの、いーしよーりも、まいだかーたい。このみやぢやうを、祝ひに祝うて、おじやる、ろーから、かがせたまへよ、ばーばーぢやうさま、娘嬢さま、丁度御祝ひ、御籠めやれ。

備考 正月十四日の晩「祝ひ申す」といつて一人座敷に上り、舞子となりて舞ひ、他の人数は皆庭に立ちながら右の歌を歌ふなり。

○(兒童)御亭主様く、年々の通り、御祝儀を御祝ひ申上け申す。(亭主)あー祝うて給ふれ。(兒童合唱)ヤーラ

く、ハ是から申す、門から申す。ヤーこれの御家は裕福な御家と見かけ申候。定めし木の實や祝うて御じやるど一す。九十九かいの木の實や嬢のまはし召す先に、綾をはへ錦を廣げ、ヤー篤と踏ませて、是より東の朝ひらの峠の、けんく鳥のめん鳥の、右のおもひは左の風切、おつとり合せて、一羽かいてすくへば、千まゆすくふ。二羽かいてすくへば、二千まゆすくふ。三千まゆの子種子を寄せ集めて、蟻子になすときは、はいりやいりやと申す。はいりやいりやになる時は、つぶらごと申す。ヤーふじに起れば、春のしゆうを召す。春駒を夢に見てさへ物憂きものよ。まして況んや龍の駒から駄らんだ此の繭のノ、かたさはかんまがはらよ。まして況んや龍の駒から駄らんだ千秋萬秋日出度御座る。(亭主)あー内に御じやれ。

最後に「あー内に御じやれ」を亭主言はざる時は、童男等不平にして「すくべー、なれく」と言ひ放ち去る。舊正月十五日に作の祝として、木の枝に切り餅を貫き、家の四隅及び門に挿す。而して多くの童男一團となり、各戸毎に

庭より右の歌を合唱し、終りて年長の者二三名家に入り、盃を受け、引き出者に亭主より大なる餅數箇を貰ひ去る。

○ヤー是から申す、門から申す。ヤーこれの御家は裕福な御家と見掛け申候。定めしこのみや祝うて御座る。上極上の桑の葉はこのみやぢやう。申しまつるさきに綾をはへ錦をひろめ、ヤーとふませて、これよりや東の、朝平のたうけの、雉子鳥の女鳥の、右と思へば左のかざきり、おつとり合せて一羽がひぢや千枚、二羽がひぢや二千枚の子種子をよーせ集めて、蟻子になるときや、粒子と申す。粒子になるときは、はいりやいりやと申す。ヤーふしにおきれば、はぢの用意をめさる。はーるごまは夢に見てさへ、ものよきものとなして、いははじよーのこまかららんだんやー。此繭の繭の堅さは、あんまがはらの石よりや、まだ堅う御座るらんだん。上極上の桑の葉は雨桑も嫌はん露桑も嫌はん、赤繭白繭がせ給ふは、母女様かららんだん。

右の歌は正月十五日、農作祝ひの一部として子供の歌も

の。(熊毛郡)

2 舞踊歌

御田踊 (一名棒踊又田植踊)

○苗は小苗で一本苗よ。よねが八石八百石、九石になし てくまにまゐらせ。

○物の見事は吉田の城よ。後は山で、前は大川、花の流れ。

○むかへの此地が地續きならば、なるこさけて花の鳥を追ふ。

○花もいろく多けれど、手にそむ花はとつさごの花

○花たねとると日を見れば、月の九日、日の七日。又日を見れば、かのえかのとのかのえさる、あかりとの風。

○けふの日を見れ、御日を見れや。西山木蔭におてんとさまのちろく。

○めすが、ころもよいころ、あがりころ、あがりとの風そよくとふくかな。(始良郡)

○おしろが山は、まへはたいがは。

○七はた立て、箒の目の數。

○やけく雉子は岡のせに住む。

○霧島躑躅は黄金花さす。

○たのかみ山は躑躅卵の花。

舊二月村社竹田神社(舊日新院公を祭る)前に於て、毎年此踊を執行し又村社伊勢神社例祭の後にも盛に踊ると云ふ。

(肝屬郡)

○焼野の雉子は岡のせに、そーそりやようやれ。

○一本苗は稻の八石。

祭禮其他式の時、十數人鎌棒或は長刀等かもち、丁々と打合せて躍る時、列外に在る二三人のはやし方は、右の歌を三度四度くりかへしくりかへ、音を長く引いて歌ふなり。其間舞手は合圖にイヤサエーくなどと囃す。

○實に面白や、年の内より春は來ぬく。鶯がほーほけきやうと囀りて、軒端の梅に宿しつ、春や人につけつらん。りう(又じう)のさんみつ深けれど、かゝる調をきくからに、若しみつけてたのしみぬ。あけとほやら面白や。アーヒーエー。

○千里駈ける様な虎の子が欲しや。アーエアーハッ、便りき、たいきかせたい。アースサノイチヨイ〜ノ

○時何も熊狩り八兵連れて、龜井、片岡、源八兵衛は、エー〜エー〜ヨイヤサー、それさ、それ八千代で、エー八千代取るかよ、九重ここのへを取るか。二ツ取りたら八千代が増しよ。

○おばは〜どちに行く三升樽提けて、サー〜嫁の在所に、ヨイヤサー、嫁貰ひエー。

毎年陰曆九月氏神祭の時、赤襦袢を着、其の上より五色の布を禪十字にあやどり、後に長く結び垂らし、各七八尺の丸き檜木の棒を以て、右の歌を誦ひ、打ち合ふなり。尤も人数に限りなきも、二列となり、各列同人数にて各列の先頭は太鼓を打ちつゝ其拍子をとるなり。
(熊毛郡)

○おせろは山で、前はだい川。

○せのぢが、濱はまの砂すなのめのかず。

○武藏の原の、かやのめのかず。

○霧島松は、こがね花はなさす。

○山田の牛は、木を引きだす。

○鎌の柄が折れた、三把おくれた。

○かたけたつとは、中は雪めし。

○焼野の雉は、岡の背にすむ。

備考 三尺棒の歌は早く、長刀の手は稍遅く、六尺棒の歌は最も遅く歌ふ。
(揖宿郡)

○おせろは山で前は大川。

○霧島松は、黄金花咲く。

○一本苗は、米で八石。

○清めの雨は三度ばら〜。

○神に物参り、今こそ遅る。

○一本苗は、米が八石(八石は處に依り百石又ははるとも誦ふ)

○後は山で、前は大川。

○清めの雨は、三度ばらつく。

○今こそ通ろ、神にものめい。

○武藏の原の、茅の根のかず。

○鳳仙花は、もめば手に染む。

傳へ云ふ、今を距ること百五十年前、瀧渡丹波守清雄農事

に注意し、擊劍の淺山流より棒踊を案出し、歌は武士踊の調子より作り替へて、農民に踊らせ、農事奨励の方便として農作を祈らせたりと。
(日置郡)

安城踊

又掛打太鼓(太鼓を掛けて踊れば)、大踊(多勢にて踊れば)、づんちきちん(鐘太鼓の調子より)とも呼ぶ。元安城村より起りたりと云ふ。村民神佛に希願し、成就したる時の踊にともなふ歌なり。

○この城の西と東の山見れば、木の葉の上に黄金の花咲く。朝日さす、夕日かやくとのもとに、黄金の花が咲きやこだる。

○是の御庭にひよこが遊ぶ。皆國々は太平樂、彌勒の御代と謡ふ鳥、是の御庭のいんるの角は、さんほ榎、元は白銀白藤かゝり、枝には黄金がなるそよ。

○東長者、西長者、中なる長者のちやうけには、黄金が九つおいたよな。一つでしよいてにまるらせう、二つで長者になるなれば、黄金の御門を立て申さう。黄金の御門が立つなれば、やりでもがりをゆはせうよ。

士踊歌

やりでもがりをゆふなれば太刀でとべりをはらせうよ。刀でとべりをはるなれば錢でついちをつかせうよ。錢でついちをつくなれば、やら〜みごとやらみごと。(熊毛郡)

○ちとせふる松のみどりも君が代も、いまこそちとせのはじめなりけり。

○ときはなる松のみどりも君が代も、いまこそちとせのはじめなりけり。

○わか緑いろもかはらぬ松が枝に、いまぞちとせの初めなりけり。

○今は難波に何はやる。うらのれふしが網をひく、えーさら〜と網をひく。

○とても参らば清水に、花の都を見おろして、おもしろや、いよのかた〜。

明治三四年の頃迄は高山士族出揃ひ、竹田神社前(舊日新院、公を祭る)にて、毎年六月十三日に此踊を爲し、甚盛なりきと。
(肝煎郡)

○千歳ふる松のよはひも君が代も、今こそ千とせのはじめなりけれ。

○常盤なる松のみどりも君が代も、今こそ千とせのはじめなりけれ。

○深みどり色も變らぬ松が枝は、今こそ千せとはじめなりけれ。

○今は難波に何流行る。浦の獵師が網をひく、エー／＼／＼／＼／＼、さら／＼と網を曳く。

○秋の田の面に何流行る。賤が鳴子の繩を引く、エー／＼／＼／＼／＼、さら／＼と繩をひく。

○御崎山をば削り平け川にして、船をやりたやな、おらが船をや。

○とても參らば清水に、花の都を見おろして、面白や、いよのかた／＼。(熊毛郡)

兒 踊 歌

○君が恵は清瀧川の、流の末もすむ御代なれや、民もゆたかに、サンサアルヒハサ、あらししづけき此時よ。

○松はもとより常盤の色よ。梅は匂ひよ、柳はみどり花

兒の踊りしところにして、今は廢たりとも、其歌曲は當村士人の間に傳へらる。(川邊郡)

一歳歌 (一名兵兒踊歌又強張歌)

○千代にな、八千代はふるとも動かしまい、君が治むる國ぢや程に。

君前祝の時先に誦はる

○敵がよせかけたりとも、逃しやしまい、さいた刀のやぐぢやほどに。

他郷の兵兒に對する場合に先きに誦はる。

○みさき山をばややけぞにたひらけて、川にして船をやりたるうらが船。

最後の歌は諏訪神社へ花火を獻じて踊る時に、歌はる。最終の花火を頭上に差上げ、花火を行ひて踊る。最も危険なる仕事なり。

○へこさん御前は、どこに行かさんす、おいどま出水になぐさみに。そんならわたしも、つれて行かさんせ。こまい子供はじやまになる。なんのわたしが、じやまになーろかいな。そんならけもーけ。さいまなこ、姉

は紅、サンサアルヒハサ、あらし靜けき此時代。

○淺久し、二葉の松の千代のみどりも今年より、色もまさりて常盤木の、松と竹とのすぐなる御代は、代々をふるとも盡きせじな。

○春はまつ咲く梅の花、招く尾花にさそはれて、行けどはてなき武藏野は。

○夏は澤邊に飛ぶ螢、いとどこのあこがれて、行けどはてなき武藏野は。

右加世田士踊歌は島津日新公の作にて、出陣前勢揃の節、必ず諸士に命じて踊らしめ、合圖の手拍子を以て、忍び間者を試みたりといふ。然るに島津貴久公薩隅日三州の大亂を裁定し、初めて加世田に入る時、郷内の諸士之を萬瀬川に迎へしに、惣て供を命じて、御屋形に著く。日新公は貴久公の爲めに三州の平和を祝せんと、諸士をして此踊をなさしめたり。降りて貴久公逝去の後、藩主命あり、其御忌日に當り此踊を踊らしむ。故に今に至るまで毎年舊六月二十三日、加世田村東加世田村、即ち舊加世田郷の郷士は、大半來り集りて此踊りをなすを常とす。兒踊 十四歳の男

さんどーしゆかな。かほちやの、ごまじゆり、どじよのあんかけうまかろな。よかろな。よかろな。(始良郡)

○エー／＼若竹の世々のすゑまでの君さま、イヨこのまことに千とせふる、サ谷の流れに龜遊ぶ。御代はかからで長久安穩ぢや。

○エー／＼千世をへとなくや雛鶴の君様、イヨこのまことにをさまりて、サ谷のながれに龜遊ぶ。御代は治まる長久安穩ぢや。

右二才踊は四五人の鎧武者を先着とし、他は向鉢巻をしめ陣羽織を着、尻をからげ、双刀を帯びて踊る。慎重にし、活氣ある踊は、よく高雅勇壯の歌曲と合し、毫も卑俗の嫌あるなし。(川邊郡)

○きろーどのこそ、だてにとらへ、みはほたんきろー、くわらん(壇花)に、菊うゑて、切るな、こやすな、枝をるな。きろーどのたより花きらう、くわらんに立つ竹は、もとは尺八なかは笛うらは、そこくの筆のぢく。

毎年盆祭に社前にて踊る太鼓踊なり。(熊毛郡)

はじめの庭

○佐渡と越後のさし向へ、橋をかけようか、あれへや舟橋を。はしの下には鶉の鳥が、鮎をくはへてふりしやんと。

○沖のかもめに物問へば、我はたつとり波にとへ。

○集殿作りは、やら見事。柱は何本立てたよな。六十六本皆黄金。たる木口には金をぬき、上はひーはだ、のーせぶき。のせぶきには、舟作りは、やら見事。

○ひいてもの、よーきには、夜明がたの横雲。

中の庭

○東長者、西長者中なる長者の茶受には、黄金を九つおいたとき。二つは諸ていにまらする。七つで長者になるならば、黄金の御門を立て申さう。黄金の御門が立つならば、錢でつきぢをつかせうよ。錢でつきぢを築くならば、槍でもがりをいはせうよ。やりでもがりをゆふならば、太刀で扉をはかせうよ。たちでとびらをはくならば、やら〜見事やら見事。

○ひいてもの、よーきには、夜明がたの横雲。

末のには

朝が初めなり。

○今度富士野の牧狩は、諸國大名の馬揃へ。曾我の十五

(十郎五郎の義なるべし)はある兄弟、親の敵と志す。

○淀の川瀬の水車誰を待つやらくる〜と。

○熊谷次郎直實殿は敦盛殿を打棄てた。敦盛殿は組み伏せられて、よにくるしけの息をつく。

○肥後の高瀬の二本松、肥後に靡かぬ二本松。音に聞え

し高砂の、松の葉色は常盤山。(川邊郡)

盆踊歌

○高砂やこの浦船に帆をあげて、月諸共に出潮の浪も淡路の島陰や。

○武藏野に須磨や明石の名所もうつして、此處に照る月の眺めはいつもひの澤や。(ひのさまや、又いる澤や、とも云ふ)

○ふしぶしをかさねし若竹の、直なる御代は何時まで、枝も榮ゆる葉もしける。千代の始めは〜。

○秋の田のかりほの色を見るからは、壹歩に米が七俵、さても見事なみになりた。今日から鶴が六つつれて、

○この寺にひよこがあそぶ。みな國々も太平なるが、みろくの御代とったふ鳥。

○この寺のいぬのすみの三本榎、えの實はならいで黄金なる。

○この寺の西と東の山見れば、木の葉の上に黄金花さく。

○朝日さす夕日かゝやく木の下に、黄金の花が咲きやこだる。

○島原彌七は氣作よし。花の千代女に暇出す。それが、いとまか、おなさけか。その時、彌七のはなむけに、五貫かたびら、二貫帯、それを、千代女に参らする、その時、千代女のはなむけに、元結百かの花寶藏、それを、彌七にまらする。その時、彌七は舟を出す。乗りておじやれよ、平戸まで。平戸までこそ帆も見ゆる。

○ひいてもの、よーきには、夜明がたの横雲。(熊毛郡)

太鼓踊歌

○敦盛殿は御装束村重藤の弓でんじ(手にしなるべし)、眞羽の矢そろへ十二筋、しよ年(少年)年は、六歳、軍は今

又六つつれて、十二つれ、其時鶴が、うたをよむ、御代も永けれ、世もよけれ。

○さても見事な、たからお舟が見えた。舟は白銀ろはこがね、高いやぐらに積みかさね、とものはぐろも、ほにかけて、ろかぢをそろへて、おせ〜さ〜や〜、とんとろと、みなと入る、こゑをそろへて舟あそび。

○今歳の稲の葉色を見やれ。今歳の年は賑ひ年よ。白銀延べてたすきにかけて、黄金の舛で米はかる。

○御寺のけいきを見やれ。十二か三かのちご達が、白銀五机すゑならべ、吾も人もと學をなす。父さんは何をなす。きんらんろんすのけさかけて、ほけきやうらんぶで面白い。

○種とりて、うれしうなれば武藏野の、せまくやらん吾思ひ、草繁れ〜よ、治まる御代こそ芽出たけれ。

○千早振る、千早振る、神の御前の鈴の音、神樂をとめの颯々の聲、萬歳樂には命を保つ、あひおひの松風。

○君が代は治まる國や四つの海、岸打つ波は閑にて、一世を過ぐるひなづるが、直くなる枝に巢をくんで、惠

も深くたまがはや(又とまがや)

○千代を重ねし常盤の松は、名をも身をもあぶぐなり、枝もあをみて千代の春。

○南さがりのほり川に、白さぎおりてほろろ打つ。ほろろは打たいで鶴の子の、錢金含んであひおひの松風。

○今年やよいとし、穂に穂がさいた、わせに八石、なかに九石、増しておくてにや十二石。

○松は唐崎、時雨は富山、月の名所は須磨明石、青葉を残す一の谷、扇子かついで招かんせ。

○ちはやふる、神のおまへの鈴の音、かぐら少女の、颯々の聲。

○まんざいらくには、命をたもつ、あひおひの松風。

○武藏野にしまや武藏の名所を、うつして此處に出る月を、眺めよいつもいろさはや。

以上三章は願ほどきの踊にも用ゐらる。

○釣りに来た、はねて来た、大鯉魚を釣りに来た。木綿帆を掛けて、笑うておじつた。

○うれす目出度の若殿様よ、御世も永かれ世もよかれ。

(川邊郡)

○「ちとせまでサテ、」かぎる松さへ今よりは、君にひかれて、ノーサテ、よろづよやへん、君にひかれて、ノーサテ、よろづよやへん。

○「つきもせぬサテ、」君がよはひは、幾千代も、かはらぬ松の、ノーサテ、色にこそあれ。

○「君が代にサテ、」あふは誰しも嬉しきを、花は色にも、ノーサテ、出でにけるかな。

○佐渡と越後は、筋むかへ、橋をかけうや、船ばしを、いつれうき身や。

○「いざやまるらん、住吉にな、」明石むし山見渡して、面白や、イヨノかた。

○「千代ニナ、」八千代はふるともや、うごきやせまいの、君がをさむるや、國ぢやほどにな。

「……」の分は歌揚のみ歌ひ、他は勢にて歌ふ。

(薩摩郡)

殿の御庭

○との、おにはに、梅と櫻が見事咲く。一の小枝につほ

○今年や豊年満作ぢや、く、道の小草に米がなる。

○そね(魚の居)には鳥巻き(鳥の出で居る處に)、中海は出魚(魚の遊泳する處)、灘の雑魚場には雑魚が湧く。

○世々を重ねし若竹の、すぐなる御代は何時までも、枝も榮える葉もしける。

○面白や、民のかまどを眺むれば、早夏も過ぎ秋の来て、もみぢは今ぞ盛りにて、むらがる蝶の遊びにぞ、心もはれて面白や。けに思ひ出にしほりあみ(蜘蛛の手ごとにとりてかけむとて、群る蝶を追ひまはし、ひまなくまなし遊び遊びて、今ぞかへる。

○種子取りて嬉しうれなば、武藏野も狭くやあらむ、我思ひ草、ヒーヨー、茂れ茂れと、治まる御代こそ目出度けれ。

最後の歌は種子島信基公、始めて南海十二島の主に封ぜられ、島に入りし時の作なりと云ふ

(熊毛郡)

○年の内より咲く梅の花、燕早く目に懸る、お顔の露袂に残る。

○白いゆかたに、六字を書いて、聽て行くもの極樂に。

みにさいた、しんとろとろと。エー。

○とろりとさいた、オーその枝とては、末迄も末は多いて、ヨイサドツコイ、さいたはー。(熊毛郡)

祭禮踊歌

打込

○天下泰平長久に、治まる御代こそ久しけれ。峯の松風さーく、雛鶴がちとせずも、末もはるかに祝ひ治むる、ヒーヨー。

踊歌(扇子)

○千早振る、ヒーヨー、神の御前の鈴の音、神樂少女のさーさつの聲、萬歳樂には命をたもつ相生の松風。

同(手)

○松は常盤木色ぞいまさる若みどり、千代を争ふとも鶴の、雌雄の翹に養はれ、梢にす鳴くひなの聲、雲井長閑けき春なれや、ようもうらくうらかに庭の面、ヒーヨー。

○武藏野に行き暮れて、月を眺めて草枕、さやけき夢に似ると見て、袂をしほるうた、ねに。ヒーヨー。

同 (扇子)

○面白や高野の原の秋の日に、小たかのすゝの音高く、
勇む心が若たかに、連れて我家にかへりける。ヒーヨ
ー。

○八幡参りに勇んで遊ぶ。ヒーヨー。神や久しく氏子の
末も、通ふ千鳥の幾千代かけて、須磨のせきやは面白
や。ヒーヨー。

○君が代は、君が代は巖となりて、二葉の松に折りそへ
て、千代のはじめは、千代のはじめは、さゞれいし、
さゞれ石いはほとなりて、二葉の松に折りそへて、千
代のはじめは、く。

引 端

○南下りの堀川に、白さぎおいて、ほろろうつ。ほろは
打たいで鶴の子の、錢金ふんで舞を舞ふ。まことや
是れぞ目出度けれー。

備考 此の祭禮踊歌は北種子村西之表西町に於ける盆踊の
歌なり。刀を挿し扇子を持ちて踊る。括弧中扇子とあるは
扇子を持ちて踊り、手とあるは扇子を帯に挿み手のみにて

れば、鞍には何鞍敷かせうよ。金覆輪の鞍を敷く。あ
ぶみは何をさ、せうよ。白銀あぶみをさ、せうよ。其

の御馬に召す殿は、薩摩の館と相見えた。

○此の寺の西と東の山見れば、木の葉の上に黄金花咲す。
朝日さす、夕日輝くとのもとに、黄金花が咲しやこら
る、さしやこらる。

○おーらが弟の千代稚は、まーだも幼なき十三で、富士
野の戦に誘はれて、じやんばいかむとの、じやばらま
きー、くろしやくどう、ふちかたな、前八文字にさ
ーさせて、味方のじようどう打ちをがむー、敵のじ
よーどー打ち招くー。かーかれかかれと招きをる。

以上三章の歌は、九月十一日豊受神社にて、豊年祭の踊に
合せて歌はる。(熊毛郡)

秋の田

○さても目出たい御代なれば、とふから鶴が六つつれて、
また六つつれて十二つれ、佐賀の松よと、こゝろさす。

○そのとき鶴が歌をよむ、こがねばなさく佐賀の松。

○秋の田の刈穂の稻を見てからは、一步に米が七たは

踊るなり。又打込とあるは、踊をなす隊形をなすまでの歌
にして、引端とは踊の隊形をくづして引き込む時の歌なり。
(熊毛郡)

山口踊

○土佐から船が三艘ほど参る。先なは錢よ、中なは金よ、
後なは土佐のわさ米よ。わさ米ならば箕でひて手では
かれ。斗かきは置いて手で計れ。

○上は山、下は清水で冷された。開きかねたよ。櫻花か
よ。やらく見事よやら見事。

○鶯がく花踏み散らす細足でお薙刀でさくと切らば
や。やらく見事、やら見事。

九月九日節句の祝儀として踊る時に唄はる。(熊毛郡)

豊年祭踊歌

○みさき山をば、けづり平けて川にして、舟をやりたい
おらが舟。

○とてもまらば清水に、花の朝顔みをだして、おもし
ろや。

○肥後と薩摩の間にこそ、阿蘇門嶽とて嶽がある。其嶽
の御許に、天より駒がおり下る。天よりおり来る駒な

らー。(熊毛郡)

白 鷺

○しらさぎがく、濱邊の松のエ、二の枝に、しばか
きー寄せて、巢をくんで、十二のまひこをうみそろへ。

○十二が一度に目をひらく、親諸共にエ、立つ時は。
○黄金の銚子を取出す、又白銀のエ、盃を。飲めよ大
黒、歌へよ恵比須。受けて喜ぶフ、福の神。シヨン
ガエー。(熊毛郡)

川 踊 歌

○西は熊原、東は鹿屋、北は花岡つづきは野里、野里、
岡村、堂園村よ。村のむかへにこげぞ(婦)がござる。
ごげが息子に善太郎殿よ。今年はじめて山入るすれば、
なたは腰差し、斧ふりもちて、高い山から谷そ、見れ
ば瓜やなすびのはなざかり。(肝屬郡)

豊年祝の踊に歌はる。

辨 慶 踊

之れは毎年舊九月氏神祭の折、辨慶の組は鏡を着薙刀を持
ち、牛若の組は襦袢を著太刀を持ち、兩方共草鞋脚絆扮装

にて、辨慶の先頭は太鼓、牛若の先頭は鐘を叩き、二列縦隊となつて舞踏す。

口上

○(辨慶)そーもそも吾れは西塔のかたはらにすまひ申す武藏坊辨慶。吾等も此の度思ひ立ち、五條の橋にて千人切申さばやと存じ候。イヤートンドンく。
(牛若丸)……の出でたる處なり。

あゝどのべに見えたは辻切と見えて候。あーるまじき事。たとへ辻切に逢うたるとも、後の如くは歸らずして、たーんだ切りに切り通らばやと存じ候。牛若の使に参り、辨慶殿こそ五條の橋で千人切り申さる由承り、わーれらも此度思ひ立ち、辨慶殿にうけ立ち申さばやと存じ候。

(辨慶)あーらいたはしの稚兒方や、辨慶にてはかなふまじ。

(牛若)あーらいたはしの辨慶や、稚兒方にてはかなふまじ。

(歌)さーくく。(三度)

ども、胸に法華經よみくだし、顔に日本の日をてらし、やせたる松にこけはえて、あかしかねたる御用意かな。
○これのおんれいは今こそ見たれ。西は杉山、東にやこよしぐ、おもてにや名所な石ご立。

○百で買うた米は千石六斗、ごまいにや酒が七ひさけ。

○伊東殿くは吾がもとじよーには、かまかれて、油断めされた星のとのく。

○ほしのとのくは茶園畑に打ちすわり、こーせんどとおまぢやる。

○ほしのとのくは、おせんようきけ、なみかけ潮打ち渡す、筑後の國よいそがるい。

○もーは手の下、お手の下、おさきおつはなお手の下。

(熊毛郡)

へら踊歌

○神はおいせの、おはらひばこよ。ナヤレ。目出たい。

くおはらひばこよ。ナヤレ。目出たい。オー。

○今年やよい年、おほそがはやる。おほそ神さま、踊りすや。

○さらば太刀を合はせ申すよな。太刀をつくとはみえつ
のありまの宿のまちわらめ。

○辨慶殿は薙刀以てかゝる。牛若殿は小太刀を抜いてちやうと打つ。ちよろくじんな出て拜む。其時牛若御威勢く。

○牛若殿はこたかのいんろーむすんでかけて、あきすの羽がへしとんほがへりの水車を、やつはなまでは受けたれど、遂には辨慶かなはれぬく。

○辨慶殿は五條の橋にて千人切を始めつ、九百九十九人は打ちたれど、只一人にきを落すく、實にきを落す。

○やまがらの山にはなれて、やつれて、枝なし枯木でもどろうつく。

○山伏のときんの上におく露は、つかれのものとの涙なるもの。

○山伏のかりほーを胸におとし置く、時を何でつくらうに。

○天竺のてんだい様の姫君は、まだまだ五つにはならぬ

○かみは島田がみ、化粧足袋はいて、踊をどればおほそまろい。

○踊りをどれば、おほそまろい。しめもおろさず、もばらひいらす。(揖宿郡)

佛舞

座興の舞にて、一人囃せば舞手は舞ひつゝ歌ひ興するなり。

○佛舞は見さいな。佛舞と囃されて、佛舞をやるからは、皆様囃は頼みませつ。佛舞の初めには、烏こそ佛よ。烏が佛ならなしや。準繩矢にや恐るか。そんなら矢こそ佛よ。じんじよう矢が佛なら、なしかー石にや立たぬか。そんなら石こそ佛よ。石が若しも佛なら、なしかー火にやけるか。そんなら火こそ佛よ。火が又佛なら、なしかー水にや消ゆるか。そんなら水こそ佛よ。水が又佛なら、なしかー人にや飲まるか。そんなら人こそ佛よ。人が又佛なら、なしかー佛を拜むか。そんなら佛が佛が本の佛よ。(熊毛郡)

そんな節

○御召御座船白帆をかけて、綾と錦を積み受けて、手繩水繩は眞紅の絲よ、萬の寶を積み入れて、思つた港にそよぐと。

○親が子を思ふ幾多の事か。山ぢや木の數、野ぢや茅の數、濱ぢや眞砂の數、それまでや愚、落つる千里の瀧よりも。(熊毛郡)

金山節

○ことしや殿様の、金山がござる。天氣もよけれ、ふく金もよけれ、大阪の町でねもよけれ。

○名所くよ金山は名所。水がふきよさす、これ名所。

○殿の金山が一年あろば、藏をたちよもの金庫を。

(熊毛郡)

御神田節

○今年や御神田、おさほがござる。土手と山下うちづしやめすな。それぢや、おとなしゆが、たまりやせぬ。

○一ぶさがりもーせよ。御奉行様よ。一ぶ二ぶしよは、さけてもくりよが、三ぶさぐれば、おうへのさはり。

釋、それでも聞かずに來るならば、首に刀を引出もの。

一二つとや、深き手だては胸の中、敵にもらすな此事を。

味方く陣所とは、合圖定めてつけし火を。三つとや、御國の人は残りなく、鎧冑を備へつ、すはやと

云は、其儘に、陣所々に馳せ屯せ給へ。四つとや、夜打を敵が掛くるなら、眞弓鐵砲を構へつ、大將と

見えし人々を、ねらひずまして射落せ。五つとや、何時もかはらん加藤めが、片穂の鎧で鎌共に打落せ。六

つとや、昔の人もあざむける。薩摩荒武者此度は、思

ひ極めし事なれば、岩もこがねも一くだき。七つとや、中々そちも退屈よ、氣をばきかせて引き取りや。いか

に必死と極めても、薩摩武者には勝ちやせん。八つと

や、屋敷く角々を、さがし求めて敵方の、間者居

りなば其儘に、なはや綱にてしばり置け。九つとや、こゝの處は大口よ、肥後の多勢をやすくと、只一口

に引き入れて、口の中にてみなごろし。十とや、とが

なき敵を法もなく、殺さば後の罪作り、よわき加藤が

其儘に、いざや仁愛加へ置け、敵ぢやとてなにしに人

第三編 九州沖繩俚諺

(熊毛郡)

六調子

○千里奥山、鹿の子が鳴くか、淋して鳴くかよ、夫子を呼ぶか。淋して鳴かんよ、夫子は呼ばん。

○明日は御上の狩がある。やぐらはせむま。

○おみうぶし助けてたもれよ山の神。責めて此の子が生れたならば、師走八日にや子も引き連れて、參詣致す。ヨイヤナー。(熊毛郡)

どんく節

○あーどんくぶしや道琉球にはやりなり、こんだ本琉球の道までもなり。カレハドンくく。(熊毛郡)

しよんが節

○しよんがぶしならしほやがもとよ、東しほやがほんのもとや。シヨンガオー。

此節は舊時宴席に用ひられしも、當今の女子は得歌はず。

(熊毛郡)

新納忠元數へ歌

○一つとや、肥後の加藤が來るならば、煙硝着に團子會

のにくからん、おなじからだにおなじ身ぢやもね。

(伊佐郡)

坂田節

○歌へくと、サーくサー、ドーカイコカイ、望まれ

まする。うたふまいとは思へども、肥後の小謠のすき

なれば、何のてにはに、あひませうと、箱より出づる

三味線も、坂田小夜の濱、サーくく、ドーカイコ

ーカイ、米ならよーかろ。上の小さいしよにただす、

このつませましたよーなり。

○ゆふべ見て來た酒屋のつじ、朝は開いて夜蓄む。

○此花一枝折らんとや。大事なこちが花ぢやもの。よそ

の花なれや、見て通れとなー。

○わしがと、さも小間物賣で、剃刀や小刀、紅や針、綿

や木綿にや、茶や煙草、まだもござるよ、つけのくし。

賣りませうと、あいきやうめすこの買うてたーもれと

なり。(熊毛郡)

やつざ節

○雨は天から横には降らぬ、風の便りで横に降る。

(惚れて居るけれども)、おはん(貴方は)あたをいを(妾を)、すつきやはんと(好かないのか)けしよべんつけても(化粧紅つけても)すつきやはんと(好かないか)、枕ほーたいなけ(打投げ)はちつきやつとな(出て行くのか)。ー(鹿兒島)

4 童 謠

手鞠唄

○だんちのく、お手鞠様の、海ふくさと、むしのふくさと包み合せてだあり様々も、いつも遊び同士の様—to 様に渡した。(鹿兒島市)

二 沖繩縣

1 祝賀歌

祝言唄

○九重のうちに苔みて露まちよ、うれしも菊の花やゆる、常磐なる松のかはるもなき、まいつもすこりはいるぞ

て招く扇や三重城、斬波岬を後になし、伊江屋戸立波おしはらひ、道の島々見渡せば、七島途中や灘易く、立つる烟や硫黄島、佐多岬にはいならで、エイあれに見ゆるは御海門、富士に見まがふ櫻島。

下りくどき

○さても旅寐の假枕、夢のさめたる心地して、昨日や今日やと思へども、早も九十日なりぬれば、いざや御暇下されて、使者の面々皆揃ろて辨才天堂を伏拜む、やがて御狩屋立出で、多勢の人々皆揃うて、御屋の濱にて立別る、名残り惜けに船子共、喜び勇んで帆を揚けぬ、呼びの盃廻るまに、山川港にはいりて、船の検査濟んで又錨引上げ帆をあけぬ、波路遙かに眺むれば、後や先なる友船の帆を引きつれて走り行く、七島途中や灘やすく、道の島々見渡せば、斬波岬を後になし、あれく、拜め御城え、辨の御嶽を打過ぎぬ、エイ袖を列ねて諸人の、向ふに出でたや三重城。

四季くどき

○さても目出度や新玉の、春は心も若返り、四方の山邊

まさる。

○けうのほこらしや、なほれかな、たてろ、つほであるはなのつゆまやたごと。

○月や昔、つきやすが、かはてゆつやひと心。

○旅やはまやとり、草枕心寐ても忘れんそかそは。

○嬉しさよ、庭の竹の節々に、君が萬代の齡こめて、むかしうらめたるん、あかつきのとりん、今年にならずしらなあなや。

○月日重なれば、年やよるれども、ゑりなけるいそぐ旅の空よ。

くどき唄

上りくどき

○旅の出立観音堂千手観音伏し拜み、こがね酌取つて立ち別れ、袖に振る露押し拂ひ、大道松原歩み行けば弓矢八幡景源寺、新築地高橋打ち渡り袖を列ねて諸人の行くも歸るも中の橋、沖の側迄親子兄弟伴れて別る、旅衣、袖と袖との露涙、船の纜とくくと、船子勇みて真帆引けば、風や正面に午未、復廻り逢ふ御縁と

の花盛り、(囉子)長閑なる世を告げ来る谷の鶯はく

○夏は岩間を傳へ来て、瀧津麓に立ち寄れば、熱さ忘れて面白や、(囉子)風も涼しく袖に通ひて夏も餘所なる山の下陰ハ、く。

○秋は尾花が打招く、園の籬に咲く菊の、花の色々珍らしや、(囉子)錦紗羅紗と思ふばかりの、秋の野原や千草色めくハ、く。

○冬は霰の音添ひて、軒端の梅の咲く花は、色香も深く見えあかぬ、(囉子)花か雪かといかで見分けん、雪の降る枝に咲くやこの花ハラ、く。(那覇市)

2 雑 謠

方言唄

○けふの福らしや、竹もが、なたちよる、つぶて居る花、露ぎやあたくと。(那覇市)

○今日や何やら面影の、目の尾に下とて暮らさらぬ、サツサ我沙汰しゆらど、今時分かまど小(可愛い者)か。

○假令一里の道やこむ、思れば一足の行戻り、サツサ他所知らぬごと、早行ん危なさぬ。

○今日の御月や晝の如照渡て、裏座や暑さに居りりらぬ、サアサ此處うて眺みて、遊ばなや終夜。

○郎君船送て戻る道しから、降らぬ五月雨我袖濡ち。

○沖繩かい、めら背てど云せしな、明日の日になれば物も云らぬ。

○月も照り美さ糸求めて童子、露の玉拾て言ちやは遊ば。

○月は昔から變ることならぬ、變つて行くものは人の心。

日本歌謠集成 第十二卷 終

昭和四年二月二十日 印刷
昭和四年三月十日 發行

(非賣品)

日本歌謠集成



著作者 高野辰之
東京市外代々木中山谷一六七

發行者 神田豐穂
東京市麴町區内山下町一ノ一

印刷者 關根慶寬
東京市牛込區早稻田鶴卷町三六二

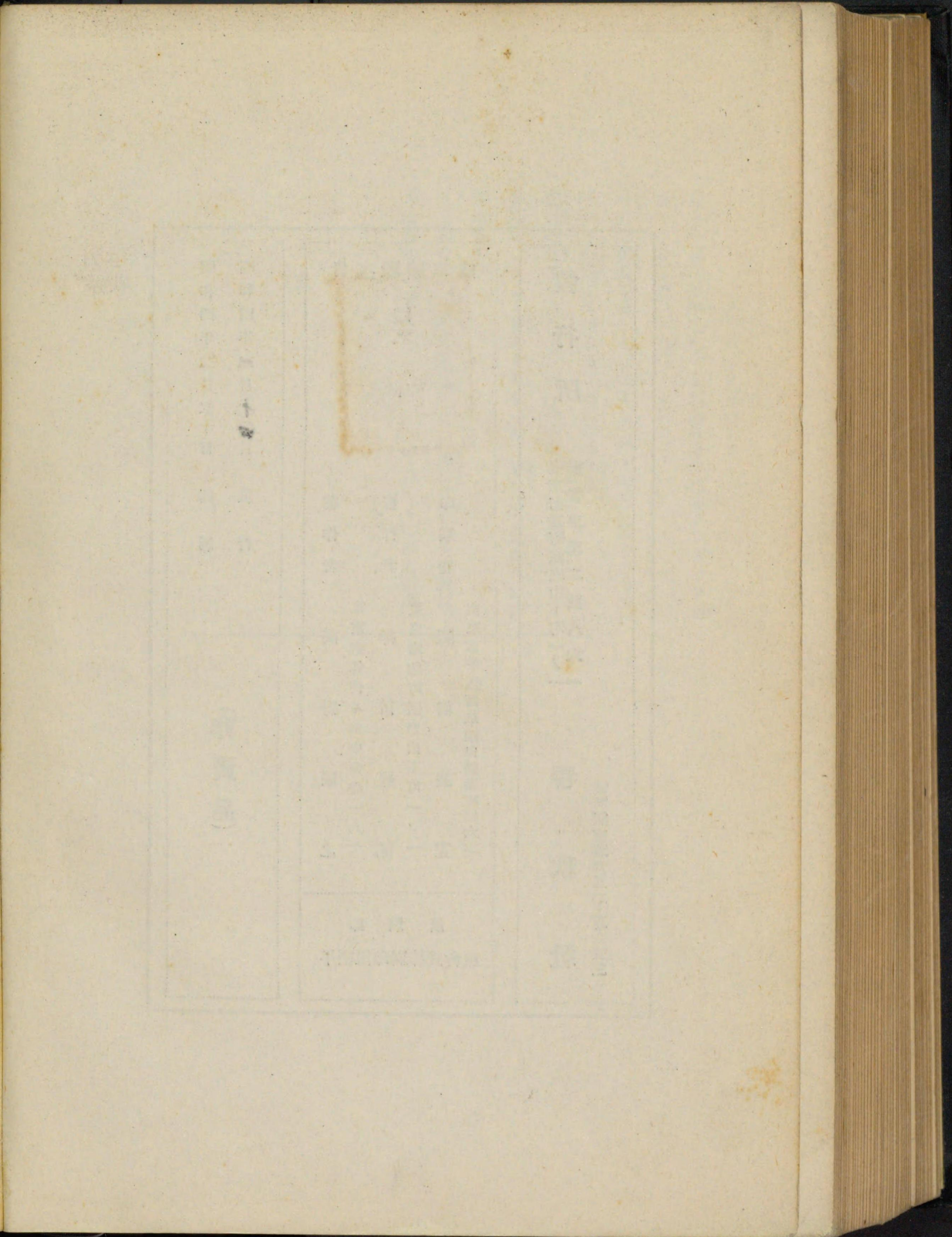
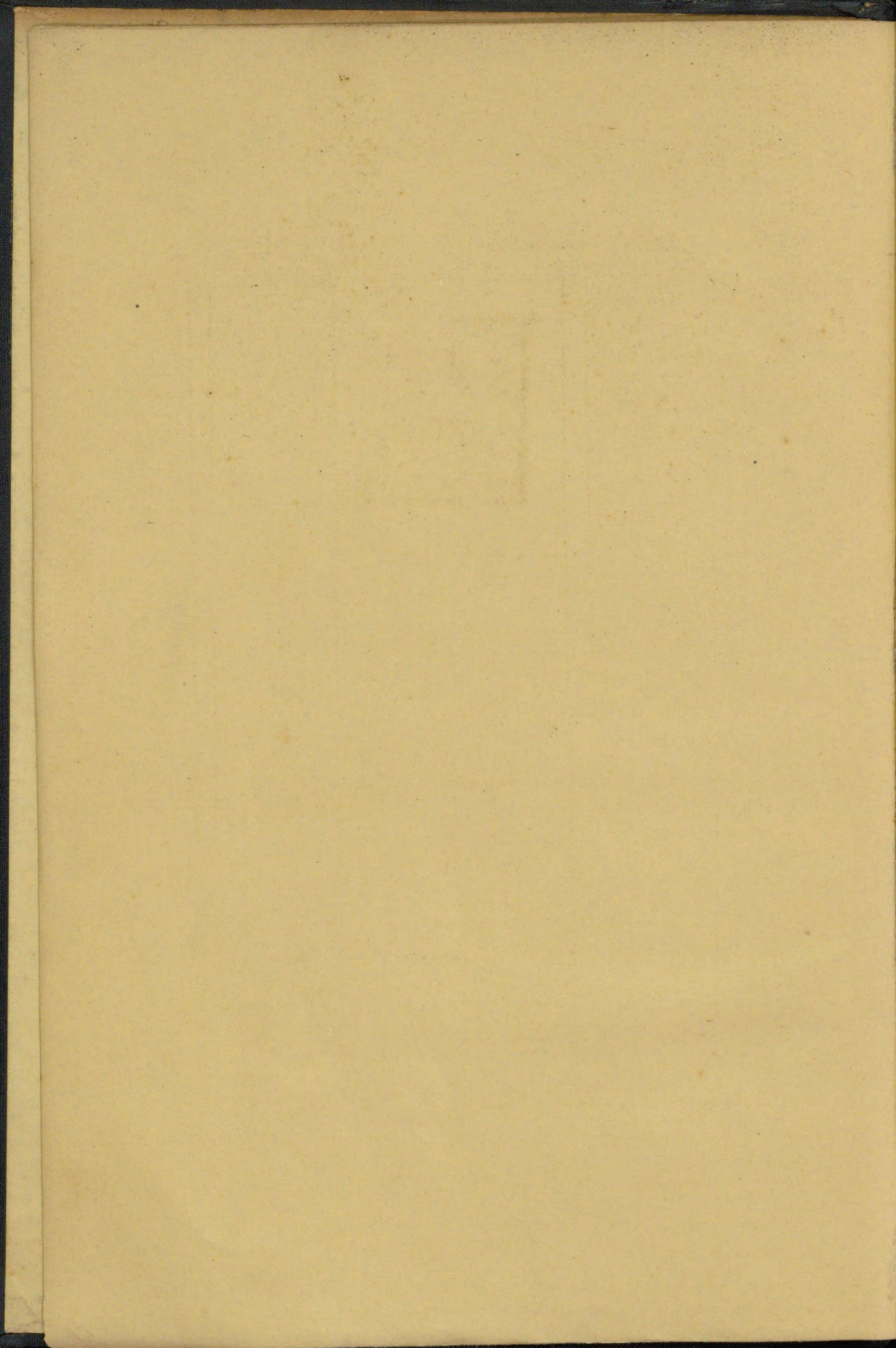
印刷所 早稻田印刷株式會社

發行所

東京市麴町區内山下町一ノ一
振替東京二四八六一

春秋社

電話銀座五六五二・五六五三



584
33

